

全能者の揺籃

プロメテア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全能は少女と成り、少女は恋に墜ちた。くるくるくるくる、踊るように。くるくるくるくる、唄うように。全能は、揺籃にて眠る

A c t 2 0	F a l l i n g	III	160
A c t 1 9	F a l l i n g	II	153
A c t 1 8	F a l l i n g	I	148
A c t 1 7	T u r n i n g		140
A c t ??	I n a D r e a m		134
A c t 1 6	F a l l i n t o a d r e a m		126
A c t 1 5	R a m e s s e s e	III	119
A c t 1 4	R a m e s s e s e	II	113
A c t 1 3	R a m e s s e s e		106
A c t 1 2	D i s c o m f o r t		99
A c t 1 1	P r a y e r		91
A c t 1 0	C o m b a t		83
A c t 9	A c c e l e r a t e		72
A c t 8	D a y d r e a m		65
A c t 7	i n t e r l u d e		58
a c t 6	c h a t t i n g		52
A C T 5	B l a s t i n g		45
A C T 4	W a r F r o n t		37
A C T 3	e n c o u n t e r		29
A C T 2	e n c o u n t e r		20
A C T 1	e n c o u n t e r		12
A C T ?			1

p r o l o g u e

目 次

prologue
ACT1?

自分が世界を救う者だと自覚したのは、果たしていつの事だっただろうか。

今日か、昨日か、一昨日か。一年前か、二年前か、三年前か。それよりもずっとずっと前のこと、子供頃か、産まれた時か、はたまた母の胎の中か。

または前世のその時からなのか。
気がついた時には自分^{オレ}は世界を救うのだと自覚していて、それをどうしようもなく理解していた。

——??の声が聞こえる。

水底から迫り上がるように。天上から降り注ぐように。耳元で囁くように。

救え。救え。救え。救え。世界を、未来を、星を。遍く全てをその手で救えと声が聞こえる。

そもそも、どうやって救えばいいのか分からなかった。
仮に核戦争を止めればいいとして。

それを自分ができるのかどうかなんて分かりきった事だ。

だから忘れるようにした。

だから聞こえないふりをした。

そうやって、日々を普通の子供として過ごした。

朝起きて両親に挨拶して、身なりを整えて学校へ行く。

まず、学校で友達を作ったり勉強したりして、何の変哲もない小学校の六年間を過ごした。

次に地元の中学校にそのまま進学した。

小学校の頃からの友人で固まって遊ぶこともあれば、入部した剣道部を通じて仲を深めた新たな友人と競い合い、いくつかの大会にも出場した。

この頃には声が聞こえていたということすら忘れていた時すらあった。

それほどまでに穏やかな日々だった。

「お前、将来どうすんの？」

もう顔も思い出せない友人にそう聞かれた事がある。

答えたことは忘れた。たぶん何も考えてないから会社員になるとか、公務員になるとかそんなことだった気がする。

そんなこんなで、何となく高校に進学した。

適当に受けたからかある程度知り合いや友人はいたと思う。

でも剣道も他の部活も何となく燃え尽きたような気分だったから入らずに逃げ回り、頭に響く声から逃げるように勉強に没頭していた。

なんとなく言っているか分からない。分かりたくない。聞こえない。聞きたくないと耳を塞いだ。

向き合わないことを選んで大学に進んだ。

だから、今もこうして生きている。

それなりに裕福な家庭ではあったけれど、弟と妹がいたからあまり遠くに行くという選択はなかった。

出来れば地元が良かったけれど、やけに熱心な両親に説得されて東京の大学を受験して合格した。

下宿は少し高めのアパートで、サークルには入らない。

限られた友人とたまに遊ぶくらいで特別な娯楽もなく、趣味といえば散歩か筋トレ、飲酒に喫煙くらいなもの。

今日も飲みすぎでフラフラしながら歩くバカ二人を横目に、寒くなってきた東京の空を見上げる。

雲に覆われて星はおろか月も見えない。これでは風情も何もあつたものじゃない。

雪でも降るんじゃないかというほど寒い、天気予報は降るなんて

一言も言つてなかったから降らないだろう。

実家は雪で大変になるだろうし、年末の帰省は早めにしておきたいと思う。

「おーい、ぶんしんすんなよまひとー」

酔っ払いの戯言が少し感傷的だった気分を吹き飛ばす。いい感じだったのに台無しだ。

馬鹿なこと言うなと小突いて駅に歩く。

歩きながら吐いた息は白く、少し身体が震えた。

「少し寒いな」

「おれあぽかぽかするぜ〜」

「酔いすぎだバカが……」

すまん、とこちらに詫びながら片割れをど突くのが見えるが、思い切り鳩尾に拳がめり込んでるように思えるのは気のせいだろうか。

いくら相方が合コンで毎度毎度飲みすぎてこうなるとはいえ、リリースしたらどうするのだろう。処理するのだろうか。

いや、こいつならテキパキ処理を終わらせてからもう一発殴るくらいはしそうだ。

「めちやくちやかわいいこいたなー。もったいなかったなあー」

「お前には無理だと思うよ」

認めよう、今日の相手の子はめちやくちや可愛かった。

ナイスバディだった。聖人君子かと思うような性格の良さ。皮を被ったくらいなら百戦錬磨の俺たちに見抜けなはずもないから、あれは真正正銘、心の底から善人であるという事なのだろう。

黒髪ロング、性格良し、超巨乳。

通っている大学ではメンタルヘルス関連の分野を専攻しており、二年にして既に就職先もほぼ内定状態だという超優良物件だった。

「お前みたいな単位落としまくってるやつのこと、ああいうタイプの女は哀れんでくれても愛してはくれないよ」

「うるせーばか！ もててるやつにおれのきもちがわかるか！」

「負け犬の遠吠えは気持ちいいね！」

ハツハツハー、と笑い飛ばす。

合コンでも引つ張りだこ、学部内被告白回数ナンバーワン。なんなら大学で一番モテる男、坂上真人様さかがみまひととは俺のこと。

顔はいいのに単位とこの酒癖でモテない裕一とはひと味もふた味も違うのである。

「お前、合コンには来てるのにそういった相手を作らないのはどうしてだ？」

だから彼の質問はある種当たり前だった。

だが俺の口にする理由は単純にして明快。然して世界の道理である。いざ震えるがいい、実は俺は――

「実は俺、貧乳派なんだ」

「マジか」

紛れもない事実である。

巨乳より貧乳。無乳より貧乳。乳に貴賤なし？ 否、否である。貧乳こそ至高。無敵の存在なのだ。

大艦巨砲主義にも理解は示すが、それは脳を蛆に侵された患者の戯言でもある。俺は決して染まらない。

酔いも冷めたかというくらい驚く二人をしり目に改札を通る。

二人とは真逆の方向に住んでいるため、今日はここでお別れだ。合コンの終わり際は終電ギリギリで少し焦ったが、駅まで来てみれば案外余裕だった。

別れを軽く済ませてタイミングよく来た電車に乗る。

車内には当然のように人がいる。

自分と同じように終電ギリギリまで遊び呆けていた学生もいれば、疲れきったスーツ姿の人が年寄りから若者まで。

そんなに働くようにはなりたくないなと思いつつながら、空いた席に腰掛ければ電車が動く。

流れていく景色はいつの間にか見慣れたものだと感じるようになっていて、ここ最近で少し遊びすぎたかと内心で自嘲する。

財布と講座の中身をしっかりと把握しておかないとなと思いつつながらぼーっと向かいの席の奥にある景色を眺め、次の駅に着く。

降りるのはここから更に三つ先で、そこから歩きと考えるとやはり帰宅はいつも通り日付が変わるギリギリになる。

不意に震える携帯を見れば、明日の夜も合コンするぞという馬鹿な内容が書いてあった。

二日酔いでダウンしてそんな馬鹿だが、まあ慣れたものだ。どうせ夜には復活しているので気にすることも無い。

問題ないと返信して目を上げれば、

——そこに、蒼い少女がいた。

知らず、息を呑む。心臓が跳ねる。痛みを伴いながら鼓動が加速する。瞬きが出来ない。

ふんわりとした金の髪。幼い顔立ち、低い背丈。妖精と見紛う可憐さ。蒼い瞳は宝石のように美しい。

ここにいたのが詩人であれば、思いつく美辞麗句の限りを尽くしてその可憐さを語っただろう。そういう可憐さだった。それほどまでに見惚れてしまった。

「となり、いいかしら？」

「あ、ああ……」

ありがとう、という声を呆然と聞く。

心臓が五月蠅い。血流が痛い。目が焼ける。気を強く持たなければ直ぐにでも気を失ってしまいそうだった。

——頭が痛む。

横に目をやれば、微笑みながら向こう側の景色を見ていた瞳がこちらを向く。

小首を傾げる姿にすまないと返しながら、自分もまた視線を向こうに固定する。

先程まで景色ばかりを見ていた気がするが、ガラスに映る少女の姿から目が離せない。

何度瞬いても、青いドレスに身を包んだ妖精がそこにいる。

——会話はない。

けれど、視線が絡む。

優しく微笑む姿はまるで慈母のようであり、僅かに紅潮した様子はなにかにときめく乙女のようにもあった。

ただ見惚れたままでも時間も時間は経ち、最寄り駅に着く。

席を立つことに僅かな抵抗を覚えるも立ち上がり、続くように少女が立ち上がる音を聞いた。

視線をやることなく、なんとか電車を降りてホームを歩く。

コツコツ、と。後ろに続いて足音がする。

軽やかな足取りだった。鉛のように重たくなつた身体を動かす自分とは違い、スキップするような軽さで彼女は歩いている。

駅を出れば、視界に白いものが映る。

手を出して触れれば溶け、冷たい水に変わるそれは間違いなく雪だった。

今年は寒いとはいえ、まだ十二月の初頭である。こんな時期に東京で雪が降るなど信じられなかった。

「素敵ね」

「そうだな」

思わず立ち止まった俺の前に躍り出て、振り向きながら言う彼女に返事をする。

「どちらともなく歩き出した。

「ねえ、貴方のお名前は？」

「坂上真人だよ。君は？」

「私は沙条愛歌」

名前を教え合いながら歩く。

いつも通りの光景を見ながら、いつも通りではない光景を見る。

その無防備な白い肌に、背後から手が伸びそうになるのを抑え込む。それはダメだと自制する。

「歳は？」

「21。大学三年生だよ」

「そう、私は14。中学二年生よ、歳の差だわ！」

「なんか悪いことしてる気分だ」

「そうかしら、とつても素敵よ?」

　　楽しそうに笑い、跳ねる。

　　無邪気に笑い、可憐に跳ねる姿を尊いものだと感じる。たとえ誰が認めなくとも、俺は彼女を誰よりも可憐だと言えるだろう。

　　くだらない会話を続ける。

「好きな食べ物?」

「焼肉、寿司、ミカン。あと甘いもの全般だな」

「趣味は?」

「飲酒喫煙、散歩に筋トレ」

「誕生日はいつ?」

「8月8日だったはずだ」

「好きな人はいるの?」

「いないね。中々ときめかない硬派な男なんだ」

「恋をしたことは?」

「実は一度もない」

「じゃあ将来の夢は?」

「幸せになりたい、かな」

　　具体的になりたいものなんてない。ただ漠然と、不幸だと思う人生は歩みたくないから、幸せになりたい。

　　それだけしか自分にはないことが少し恥ずかしくて、誤魔化すように視線を空に向けた。

　　暗くて寒い夜だ。

　　雲の合間に月が見え、空から落ちる雪が美しい。

「それじゃあ、今は不幸なの?」

　　不幸ではない、と思う。

　　家族がいて、友人がいて、不自由することは特にない。だが、目の前には妖精のような少女がいる。

　　嘘は許さないなんて欠片も言っていないし、険しさの欠けらも無いのに。

　　どうしてだろう。

彼女にだけは嘘をついては行けない気がする。

——耳元で絶叫する誰かの声が聞こえる。

「ずっと、誰かの声が聞こえるんだ」

「声？」

「殺せ殺せ、世界を救え。お前の敵はそれだ、首を絞める頭を殴れ心臓を潰せ」

許すな。赦すな。それを救おうとするな。殺せ。世界を。人を。星を。未来を。

多くを守り、救うことがお前の使命なのだと呼ばれている。

「これさえなければ、きつと俺は幸せなんだと思うよ」

「……そう、かわいいそうだなね」

小さくそう告げた少女に手を取られる。

……小さな手だ。

力を込めれば折れてしまいそうなほど細く、小さな身体をしていると思う。

なのにどこか、自分にはない強さがあった。

折れない芯のような何か。思わず膝を折ってしまいそうになるほど、こちらを見るその瞳は力強く優しい。

それはきつと？に満ちた眼だった。

「こっちよ」

手を引かれ、公園に入る。昼間には子供を連れた家族を見かけることも、この時間には閑散としている。

導かれるままにベンチに腰掛け、向かい合うようにして膝の上に乗られる。

頬を手で挟まれた。こつんと額が触れる。

暖かいと感じた。手も額も、寒さの中ですっかり冷えきってしまったっているのに、触れている部分から感じるのは暖かさだった。

瞼を閉じ、慈母のような空気を纏う少女を？したい。

顔面を殴り付け、地面に叩き落とし、何度も殴打する光景が浮かぶ。

腹を殴り、倒れた身体を執拗に踏みつける凄惨な姿が脳裏に流れる。

それはあまりにも罪深く、あまりにも甘美な光景だ。そうすることが出来たならどれほど楽だろうか。

さけぶ声に従い、この小さな身体を蹂躪し、これが正義だと謳いながら救世主に成り下がることが出来たなら、

自分は、どれだけ救われるのだろう。

—自然と手が伸びる。

そのか細く白い首に手が届く。

そつと触れれば、見た目よりもずつと脆く儂い感じがした。

片手で撫でるようにしていると、気がつけばもう片方の手が添えられている。

力を入れればそれで終わる。

終わる。終わってしまう。自分よりもずつと年下の少女の命は、今力を加えるだけで簡単に失われてしまう。

けれどそれは、許されてはいけないはずだ。

「いいのよ」

なのに、許されている。

逃げ出せばいいのに。きっとそれが出来るはずなのに。それをしないまま受け入れている。

少し、力が入る。

苦しそうに身動きして、それでもその瞳が別の感情に囚われることはない。

優しく、甘く、蕩けるように。

こちらを労わるように見つめる姿に身体が震える。

「私のことは殺していいの。きっとそれは正しいことよ」

「……やめろ」

「あなたは世界を救う人。悪い女を斃し、明るい未来を手にする人。だから、気に病まなくていいのよ?」

A C T 1 1 e n c o u n t e r

カチャカチャという音が聞こえる。

時刻は午前十一時五十二分。

あれから家に帰って来た時間を思えば少し寝すぎな気もするが、問題はカチャカチャという音の発生源である。

今この部屋にいるのは俺ともう一人。

昨日連れ帰った少女が料理をちゃんと出来るのかは定かではなく、もし絵に描いたような下手であった場合損害を被るのはこちらである。

そもそもそんなに食材もない気がするんだが、とベットから身を起こしてドアを開ける。

両親の好意で1kの部屋に住んでいるが、ここの扉をこのような状態で開けるのは初めての事だった。

「あら、おはよう。起こしてしまったかしら？」

「いや、目が覚めたただけだけど……」

言い、足元のビニール袋に目がいく。

色々と買ってきた痕跡が残っているが、香ばしい香りに釣られて視線をコンロの方にやればフライパンの上に綺麗に焼き上げられたムニエルが見えた。

ゴミ箱のパックから見るに鮭だろうか。

鍋の方は蓋がしてあって分からないが、恐らくスープの類いだろうなど考えたところで、まじまじとこちらを見る目に気がついた。

蒼い双眸は、昨日とは似ても付かない不安に揺れて弱々しい。

何を気にしているのだろうか。

それを口に出して聞く前に、彼女がおずおずの口を開く。

「その、えっとね。迷惑じゃなかったかしら？」

「迷惑？」

「あなたがよく寝ていたから、起きた時には美味しいご飯が食べれる

ようにと思っただけけれど、キッチンを勝手に使っているしお米だって勝手に炊いて……」

思わず呆気に取られた。

恥じ入るようにして告げる姿に言葉が出ない。

それはまるで、はしたない姿を恋人に咎められた乙女のように。沙条愛歌という少女は俯いているのだ。

「いや、ありがとう。とても嬉しい。でも、俺にもなにか手伝えることはないかな？」

「ご飯を作られるだけなのは、存外心苦しい。そう告げれば、恐る恐るといった様子で顔をあげる。

「ほんとう？ 迷惑じゃない？」

「これを迷惑に感じるのはやばいね」

「なら、ご飯をついでもらえるかしら？ その間に私は他のものを盛り付けるから」

「了解した」

テキパキと準備をする様子から手馴れているのが伝わってくる。一人暮らしながらあまり自炊をしない自分とは大きな違いだ。

二人分のご飯を盛り付けて炊飯器を閉じ、整理されていた机に茶碗を置く。

大きめの皿には鮭のムニエルを中心にポテトや野菜が彩り良く盛り付けられており、マグカップには野菜のスープが入れている。

どれも見事な出来だった。

どれも少し量が多い気がするが、些細なこと。全て食べて満腹になるかどうかというところだろう。

二人で向かい合うように座り、手を合わせる。

「その、あまり味に自信はないのだけれど……」

「美味しい。めっちゃくちゃ美味しいよ」

ほどよく塩気がきいたムニエルはご飯によく合っている。

野菜にかけられたドレッシングは恐らく彼女が作ったものなのだろう。あまり好きではない野菜も美味しいと感じられる。

見つめられながら箸が動く。

ポテトを食し、スープを飲む。ソースのかかったムニエルをご飯にのせて放り込み、味わいながら戴く。

美味しい。美味だ。

母ですらここまで上手く料理していた記憶はない。

気がつけば出された食事は全てなくなっていて、完食したこちらの姿を彼女は嬉しそうに眺めていた。

「ご馳走様でした」

「美味しかったかしら？」

「ああ、とても」

その辺で食べる食事なんかの何倍も美味しく、満たされるものだった。ありがたい限りだと思い、ようやく食事に手をつける彼女を見る。

所作の一つ一つが丁寧で洗練されている。間違いなくそこそこ裕福な家庭で育っており、頭もいいと思う。

服装とか髪の手入れのされ方とか、そういった事にも目がいくが、肝心なのはそんな要素はどうでもいいと言わんばかりの可憐さだ。

妖精だと言われても頷ける可憐な容姿。花が咲いたような笑み。

宝石のように輝く瞳。嫺やかな手。

嚙下する度に動く、細く愛らしい首に絞められた跡さえなければ完璧だった。

そうだ、と思い出す。

首を絞めたのは自分だ。あの跡を付けたのは自分だ。

昨夜、忌々しい衝動に駆られて無抵抗の彼女の首を絞め、気を失ったところで正気に戻って連れて帰った。

冷静になってみれば、完全に犯罪者だった。

考えよう。俺は二十一歳である。大学三年生、このまま大学院に進学することも決まった立派な大人である。

対して、彼女はどうか。

自己申告によると年齢は十四。中学二年生らしいがしかし容姿は

幼く、小学生と言われても納得のいくレベルだ。

首を絞めて持ち帰りしてなくても割と犯罪である。

更に言えば、彼女がこの姿で買い物に行って帰って来ているのは間違いないだろう。

そうだ。首に、明らかに絞められた跡を付けたままこの部屋から外に出て帰って来ているのだ。

——やばい。

平日とはいえ、一応近所のご婦人方と活動時間は被っている。最悪の場合だと近所に住んでいる知り合いに目撃されている可能性すらあった。

彼女とは連日飲みやらなんやらに行くほど仲は良くなくとも、同じゼミに属する者として面識はある。というかそれくらい浅いからこそ、見られると余計にまずいものがある。

まあまあが出来かしら、なんて呑気に食べ終えた彼女を見る。見つめる。見つめ直す。

見つめ直して、紛れもなく自分が、その白く細い首に絞め跡を残しているのだと認識する。

テキパキと片付けを始めたが、身体が動かない。

上機嫌に鼻歌を歌いながら動く姿は様になっていて、誰が見ても見惚れるに違いない。

水音と食器が触れ合う音だけがしばらく響いた。

食器を拭いて戻ってきた彼女が対面に座り、お茶の入ったコップを置く。

「……なあ」

「なに？」

「なんで俺に近づくんのだ。俺は君を殺すかもしれないんだぞ」

今は何も感じない。

出会った時のような動悸も衝動もない。声も聞こえない。むしろ初めて感じるくらいには身体が軽い。

こんなことは初めてだから、これがいつまで続くのかも分からない状態で傍にいるのが恐ろしい。

次、もう一度ああなつた時。今度こそ耐えきれない。
決壊した衝動が彼女を殺すだろう。

それは昨日首を絞められた本人である彼女も分かっているはずだ。
意識を失うまでじつくりと、翔るように苦しめられたのに近づいて
くる神経が分からない。

「愛歌って呼んで？」

「は？」

「まーなーか」

「いや、おい」

「まーなーかー!!」

「いやだから俺の話を」

「ほら、早く早く!」

「ま、愛歌…?」

「はい、よろしい!」

よく言えましたと満開の花のように笑う。

それを可憐だと思う。

本当に、心の底から嬉しそうにする姿はただ愛らしいだけの少女そ
のものだ。

殺す理由なんて見当たらない。

もし彼女が世界を本当に危険に晒す大悪党だとして、こんな風に笑
う女の子を殺すことは絵本の勇者にだって出来ないだろう。
そう思えるくらいには魅力的だった。

「真人」

「ん？」

「今日は何か用事はあるの？」

「いや、特にはなかったような…」

なかったような気もするが、何かあったような気もする。

ボケてきてるなあと思いつながら携帯を手に取る。

何故か電源が落ちているので起動する。

使い古しているせいかな最近起動が少し遅いのが気になる。そろそ
ろ買い替え時かもしれない。

起動してメールを開けば、合コン確定。十九時に新宿。と簡潔に記されていた。

「合コン…?」

それを、いつの間にか隣に来ていた愛歌に見られる。

右手に持ったのを左側から両手を床に着けて見に来るものだから、少女らしい肢体が密着する。

ふんわりといい匂いがした。

「合コン、行くの…?」

ハツとして視線を合わせる。

悲しそうに下がった眉尻、僅かに潤んだ瞳を見た。瞬間、決意は固まる。

「——いや、今夜は空いてる。合コンはない。そんなものはなかった」
すまない友よ。さらば、まだ見ぬレディ。

合コンと首を絞めた罪悪感の残る女の子なら、俺は迷いなく後者を取らせてもらう…!」

爆速で体調不良を偽装。超速でそれらしい事をメールに打ち込んで送信した。

「よかった。それなら今日は時間を貰ってもいい?」

「ああ、いいよ」

お安い御用である。

合コンから脱した自分に不可能はない。

時間は有り余り、金銭もまだ余裕がある。

如何なるお願いが飛んでこようとも完璧に対応しきってみせる自信に漲っていた。

やったわ、と。胡座をかいた上に座る彼女が喜ぶのを見て頬が緩む。

かわいい女の子が笑うのはとてもいい。特に愛歌は妖精が現実に現れたような可憐さだ。

心が洗われるような心地だった。

ああ、でも、だからこそ。

その命を奪えと叫ぶ???は到底認められないと思ってしまう。

きっと間違っているのは抗っている自分で、正しいのはあちらなのだろうと頭では分かっているけども受け入れられない。

間違いない、彼女は悪では無い。

少なくとも世間一般でいう犯罪者などでは無いし、物語に出てくるような悪役の特性なんて見られない。

少し不思議だが可憐なだけの少女だ。

「その、私たちこうやって出会ってしまったわけじゃない？」

「ああ」

そうだ、出会ってしまった。

出会って、殺せなかった。

首に手をやって、そのまま絞めて、自分が中途半端に抵抗して殺せなかった。

「だからお父さんに挨拶に行こうと思うの」

「ん？」

「昨日は何も言わずに帰らなかったからあれだけど、きっと大丈夫だわ。でも綾香が心配ね。不安で泣いたりしてないかしら」

分からなくなってきた。

そこはこう、俺のこれを解決するために何かしようとかそういう話ではないのだろうか。

なにやらお義父さんに挨拶する流れになっている。

まだ付き合うとか婚約とか以前に告白もしていないしそもそも恋愛対象として認識出来ていないのだが。

「大丈夫？ 辛い？ 昨日で逃げたとは思っただけけど……」

「何も感じてないよ。ちよつとドキドキするくらいだ」

…まあいいか。なるようになる気がする。

目を輝かせながら話をするのを遮る気にはならない。全身から嬉しそうな空気が出ている。

否定されてしまったらどうしよう、なんて。そんな割と当たり前に立ち上がる問題に悩む姿を見ると、少しだけ救われたような気分になった。

相手は十四歳の少女だ。

まだ未来は長く、出会いは多い。これから高校にも通うだろうし、大学にだって通うかもしれない。

たぶん親御さんにぶつ殺されそうなのが今日一番の課題かなあ、なんて考える。

もう声のことなど忘れてしまおう。

だからもし、万が一あれに耐えきれなくなったそのときは。手が伸びる前に舌を噛み切って死ぬ。

きつと俺はそうすべきだ。

楽しそうに今日の計画を話し始めた愛歌を見ながらそう思った。

ACT 1-2 encounter

入口には大きな門。広い玄関、手入れされた庭。家具も一つ一つがそれなりの値段がする気がするし、ガーデンと呼ばれる庭園もある。

こうして机に四人で座っている今も、視界に映るのは今まであまり見た事のないくらい値段がしそうな家具しかない。

対面に座る男、愛歌の父親である彼は至って平凡に見えるが、それでも話からするに母親のいない状況で一人、この家と生活を維持している稼ぎ頭である。

庭園の維持には当然金がかかるはずだから、それだけで一般家庭出身の自分には考えられない出費のはずだ。

それにも関わらず調度品は高い品質であり、一家の服装もよく見れば高級品であることを理解出来る。

仕事の内容は不明だが夕方になってこうして帰宅したため、定時退社は出来る職場なのだろう。

だから間違いないのは金持ちであること。

娘たちの衣服や教育に関して妥協していかないであろうこと。

これらの二点程度しか、推し測ることは出来ない。

——沈黙が場を支配している。

八歳だという綾香ちゃんは年齢にそぐわない綺麗な姿勢で黙って座っている。

愛歌は横目に見た感じニコニコしているが、沈黙の原因なので見なかつたことにした。

そして今、沈黙を誰も破ることの出来ない理由である彼女たちの父親、沙条広樹はじつとこちらを見つめたまま動かない。

正直、これが一番気まずい。

初対面で怒鳴ることもなければ怒りを堪える訳でもなく、冷めきつた目で自分を見て平坦な声でようこそなどと言われた。

次に愛歌が口を開き事情を少し曲げて説明しても、首にある絞め跡を一瞥するだけ。

インフルエンザの流行で学級閉鎖期間だという綾香ちゃんが部屋から現れ、こうして四人になってからは無言。

愛歌が俺と暮らしたいから家をしばらく空けると言っても無言。ただ何かを見定めるといっわけでもなく、思索に耽りながら見つめられている。

迂闊に口を開いて地雷触れるのも怖いし、愛歌の首を絞めて意識を落としたところで自宅に持ち帰ったというのが事実なので何も語りたくない。

そうやって沈黙が維持されること十数分。体感にして数時間後経ったかと思うような停滞を破ったのは沙条広樹その人だった。

「分かった。好きにしろ」
「やった！」

よかったわ！　なんて喜ぶ愛歌を横目に少し痛んだ気がした胃を押さえる。

俺の人生どうなるんだ……、と未来に思いを馳せながらキッチンに向かう愛歌の姿を追う。綾香ちゃんがとととと着いていくのも見えた。

広樹氏が目配せしてきたのでそれに従い、一旦リビングを後にする。



用意された夕食は豪華だった。初めて食べる本格的なディナーである。

作成者は沙条愛歌とお手伝いで妹の綾香。

メインはローストチキンとローストビーフ。

どちらも調理の具合は完璧と言って差し支えなく、香草によって引き立てられたチキンの味は格別なものであり、焼き具合の見事なローストビーフは絶品だった。

スープにはあまたのパプリカ粉で味わい深さのあるオーストリア風グヤーシュ。

これは解説されて初めて存在を知ったが、新鮮な味わいでありながら病みつきになる美味しさがあった。

苦手なサラダはフランス風に飾り付けられていて、ドレッシングでつけられた味わいは嫌いなものではなかった。

更に畳み掛けるようにして追加。

ロシアから鮮やかな赤のボルシチ。オリエントからペリメニにケバブ。中華の焼売に刀削麺。日本の釜飯にドイツ風のパン。

食後のデザートにスコーン、ケーキ、ゼリーなどなど。

総じて美味。非の打ち所がない出来であり、味と量の両方で腹を満たしてくれた。

些か量が多かった気もするが、気がついたら平らげていたので誤差の範疇だろう。

広樹氏が目を丸くしているが、食べ盛りの大学生ならこれくらいは余裕である。

「ご馳走様でした」

どこか嬉しそうに片付けをする愛歌を見ていると、取り残された妹から視線を感じた。

気まずそうでありながら隠しきれない好奇心をのぞかせる瞳はどことなく愛歌に似ていて、決定的にどこかが違う。

瞳の色とか髪の色とか、そういった身体的特徴では無い何かが違う。

けれどもどこことなく顔立ちは似ていて、愛歌のそれよりも更に幼い彼女に擦られる何かがあった。

「綾香ちゃん、でいいかな?」

「えっと、はい。真人さんで、いいですか?」

「ああ、もちろん」

改めて話をしてみれば、おずおずとした様子のまま色々な質問が飛んでくる。

歳、好きな食べ物、苦手な食べ物、学校、お友達、お姉ちゃんとは

どうやって出会ったのか。

広樹氏が自室に戻っているからか、お父さんとは何を話したんですか？ などと聞かれてしまう。

ほかの質問はいいが、これは困る。

問題ないといえれば問題ない話だが、一応内緒の話だしここは適当にお茶を濁して回避したい。

回避したいがしかし、先程きわどい質問をはぐらかそうとして失敗しているので怪しい。

無垢な瞳が心を苛む。

こてんと小首を傾げた姿は彼女の姉にとてもよく似ていて、これが子供の力かと戦慄する。

とても愛らしく、素敵なものだ。

「綾香、あまり困らせちゃダメよ」

だから愛歌の助け舟が有難かった。

流石に姉が仲裁に入ると我に返ったのか、少しばかりしゅんとした様子で下がっていく。

それが聞けなかったことに対する残念さから来ているのか、姉に注意されてしまったという後悔からきているのかはさておき。

「それにしても意外ね」

「なにが？」

「綾香がこんなにあなたのことを気にするなんて、思ってもみなかったわ」

あわわ、と混乱すると妹の頭を撫でる姿は優しい姉の模範的な行動のように見える。

見えるが、言動がちよつとあれかもしれない。

「真人のことは義兄さんにいって呼ばないとダメよ？」

「義兄さん……う？」

ちよつとクラつときた。

色々とツツコミどころがあるが、いい。とてもいいものだこれは。

無垢な幼子という感じがして、尊いものを見る気持ちになる。実際、子供は尊く、大切なものだ。

「そろそろお勉強の時間ね」

「あつ」

「ほら、お父さんが部屋で待ってるわ」

頷き、それじゃあまた、と子供ながらに会釈をしてから立ち去る姿を見送ってから、愛歌の方へと視線を向け直す。

色々と、聞きたいことがあった。

家のこととか。俺の背中にあるよく分からない紋章のこととか。完全に関じられなくなった???のこととか。学校のこととか。魔術なるものこととか。

聞かなくてはいけないことは沢山あって、けれどそれをどれから聞けばいいのか分からない。きっと全てを答えてくれるのだろうけれど、聞きたくないと思う自分も確かにいる。

聞けば何かが終わるような、そんな気がする。

我儘だなど自嘲した。

「真人、お話ししましょう?」

「そうだな」

手を引かれて移動する。

リビングを出て廊下を進み、部屋を無視して直進。大した時間も経たずに一度建物を出る。

そうして目に入るのは家に隣合うようにして立つガラス張りの壁と天井の建築物。ガーデンと言われていた庭園に辿り着く。

こういった方面には疎くとも、見事な作りであることが伺える。静かな夜に、昨日とはうってかわってよく見える月の映える庭園だ。

月光を浴びて金の髪が仄かに輝る。

——全身が熱を帯びる。

熱くて痛いとか、反射で身体が跳ねるとか、思わず悶えるようなそれでは無い。

ただなにかに抱かれたような、そんな暖かな熱が湧いてきた。なんだろうか、これは。

「ええつと……その、服を脱いで欲しいのだけれど……」

「わかった」

思案していたところに声をかけられ、反射的に返事をしてしまった。

脱げと、彼女は言ったのか。

この夜空に見守られる庭園の中で服を脱げと歳下の少女に請われ、返答してしまった己を僅かに恨む。

だがしかし、この身も男。ここで臆しているは名が廃るというものの。

決意と共にジャケットとシャツを脱ぐ。

勢いのまま下もいこうとベルトに手をかけ、

「上！ 上だけでいいの！ そんな残念そうな顔をしながらズボンに手を伸ばさないでちょうだい！」

もう！ と顔を真っ赤にして怒る姿に少し意地悪したい気持ちが湧くが、諸刃の剣なので自重する。

いや、助かった。流星にこの状況下で素っ裸は紳士である自分にも苦しいものがある。

この季節でも寒くないのは有難いが、顔を赤くして見られるのはありがたくなかった。少し擦りたい。

どうか何故脱がされたのかと考えたところで、答えが浮かぶ。なるほど、背中か。

くるりと回って指を指す。

「これ何か分かるのか？」

「……ええ。よく分かるわ」

昼、起きた時にはあったよく分からない黒い紋章。七つ羽を描くそれは背骨を軸に背中いっぱい広がっている。

どこから取り出したか分からない姿見で背中越しに確認させてくれるが、昼間よりも濃くなっている気がするのは気のせいか。より黒く、明確に。

「第一階梯、熾天使ね」

「なんだそれ」

「真人は魔術や魔法を信じる？」

「魔術に魔法か……」

正直なんだそりゃ、というところではある。

科学技術の発展によつて暮らしは豊かになり、世界の形が急速に変わっているこの時代において魔術、魔法。頭の痛くなる話だ。

しかし理解出来る話ではある。

手早いところだとどこからともなく取り出された手鏡がそうだが、世の中どうにも解せないことが多いのも確かだ。

もしかしたら、地元でたまにいた霊能力者とか名乗る変な奴らも魔術絡みなのかもしれない。

頭に響く???の声も、そうなのだろうか。

「信じてくれる?..」

「もちろん」

魔術はあるとして、それなら背中のはこれは魔術によるものなのだろうか？

「魔術は魔術回路がある人間にしか使えないの。これは一般人の中にも偶に持っている人がいるのだけれど、基本的には魔術師として続てきた家の人間にしかないわ」

「愛歌には?..」

「もちろんあるわよ? 綾香もそうだしお父さんもそう。私たちは魔術師の家系なの」

なるほど、と理解する。

つまり魔術師であるから少々特異な娘を持つてもある程度の信頼と安心を持って放任できるのか。

「ここからが大事なのだけれど、全ての魔術師には共通の目的があるの」
「ほう」

「根源と呼ばれる世界の全て、一にして全なるもの。そこに到達することが全ての魔術師の目的なのよ」

「ふむふむ」

「まあ根源に辿り着けた魔術師は長い人類の歴史の中でも限られているし、基本的に彼等は夢物語を追い続けている感じね」

「なるほどなあ……」

要は世界の全てがある場所に辿り着くために努力しているけど、基

本的にそんな所に辿り着けるはずもないと。

理解が深まる。聞いた知識から知らない知識が湧いてでるような感覚で多くのことを理解した。

魔術を以て根源に至り、その後彼等は どうするつもりなのだろうか。

世界を壊すのか、救うのか。

それともなにか、叶えたい願いがあるのか。

それが分からない。

「そこで根源に至る方法があるって言われたら、みんな飛びついて来ると思わない？」

「あるの？」

「あるのよ」

なるほど不思議なものだ。それは清々しいほどイカれている。

根源に至りたい魔術師が他のものとその手段を共有してでも辿り着きたいなど狂っている。

果たして何が彼らをそうさせるのか。

「——聖杯。有名なイエスの杯、その本物が東京に現れたの」

「……キリストのあれ？」

「そう、あれ。聖なる杯は時を超え、万能の願望器として東京のどこかに在るの」

思いもよらぬビッグネームに思考が止まる。

イエス・キリスト。世界最大の有名人、キリスト教の基盤となった聖人。実在が信じられないイカレ野郎。

聖遺物だのなんだのと求められるイエスの杯が、万能の願望器？

「私、それが欲しいの」

馬鹿げていると一蹴するにはあまりにも真剣で、ならそれをどうやって手に入れようというのか分からなかった。

「あれがあれば貴方を助けられる。???から解放できる。だから私は聖杯が欲しい」

語る彼女は本気だった。

「七人の魔術師マスタがそれぞれ英霊を呼び出し、使役し、最後の一人になる

まで戦う。それが聖杯戦争と呼ばれる聖杯を手に入れるための儀式
聖杯戦争。戦争だ。

最後の一人になるまで殺し合うのだろう。それはとても危険なことだ。現代社会で許されるべきことではない。

「貴方は魔術を使えない。選ばれた人ではあるけれど、ただそれだけの貴方が闘う必要なんてないの」

言葉は甘い誘惑のようだった。

心底不安そうにこちらを見る瞳は震えている。言葉の一つ一つを丁寧に選んで口に行っているのか、この一日で最もゆつくり話をする。

これは妖精の誘惑だ。

これは悪魔の囁きだ。

手を取れば何の苦労もなく、あの煩わしい声から解放されるのだろうという確信があった。

彼女にならそれが出来るのだろうと、出会って一日も経っていないというのに。

心の底から信じている。

「私は貴方を助きたい。貴方に戦って欲しくない。私は貴方と一緒にいたい」

だから、——

「だから、私に背中の中の令呪をちょうだい？」

その甘い囁きに、意識が揺れた。

ACT-3 encounter

——ある日、？は選んだ

それは、産まれた時代が正しかった。

それは、育った地域が適していた。

それは、都合の良い肉体だった。

それは、？に逆らう未来が無かった。

選ばれ、動き、役目を果たす。

そういう舞台装置として期待され、それは正しく役目を果たした。
果たしたはずだ。

ならば、ならばどうして、どうして、？はまだ、今もまだ、

アレを見ているのか



「——参ったな」

困ったことになってしまった。心底そう思って、思わず口から漏れてしまう。

庭園は静まり返り、月明かりが目の前に敷かれた魔術陣を照らしている。

ここに愛歌はいない。儀式に必要なだという血を取りに、一旦屋敷の方に戻っている。

だが彼女が戻ってくれば英霊とやらを召喚し、聖杯戦争なるものへ参戦すると思うとおもわず身震いしてしまう。

——聖杯戦争。

七人七騎による殺し合い。聖杯を手に入れるための大儀式。過去に活躍し、歴史に名を刻まれた英傑を召喚し、使役して争う呪われた聖戦。

訳の分からない事態だと言えばそこまでだが、確実にいままで人生に絡んできた喧しい声を解決するにはいい機会だった。

だからこそ、愛歌に令呪を渡すという選択はなかった。

彼女は確かに自分よりも優れているかもしれない。

彼女は確かに自分よりも知識があるのかもしれない。

彼女は確かに、自分を慮ってくれている。

それに甘えてはいけなそう思ったのだ。理屈ではなく直感でもっと抽象的で文学的、非科学的な言葉で言うならば魂が。

今も、戦えと叫んでいる。

声は聞こえない。脳を割るような痛みも、心臓が破裂しそうな焦燥もない。導かれているような不快感もなかった。

きつと、これが自由というのだろう。

気づいた時には語りかけてきた声のない世界は思いの外、恐らく一時的なのだろうけれど、あっさりと手に入っている。

聖杯が真に万能の願望器であるというのなら、あの声を黙らせることも出来るはずだ。

だから勝とう、勝つてあの沙条愛歌の小さな少女に人並みの人生を贈ろう。

沙条愛歌を殺せと叫ぶあれをどうかしない限り、いつか次の自分が産まれてくるという妙な確信がある。

人はきつと、あれを？と呼ぶ。

あの時、瀬戸際で抗えた理由は分からない。分からないけれど、あの殺意は沙条愛歌だけに向けられていた。

必ず、何があろうとも。殺せるならば殺さなくてはならないと、強

い強迫観念のようなものを感じた。

あれはきつと正しいことだ。間違っている。

「どうなんだろうな」

理由があるはずだ。明確に殺意を抱き、排斥せんとする理由がどこにあるはずだ。

けれど見た目より大人びているだけで、中身は普通の少女のように思える。実年齢的にはむしろ見た目が追いついていないのか？

身体的なあれこれを詮索するのはやめておこう。宜しくないことだ。

思考を戻す。

果たして、沙条愛歌を殺さなくてはならない理由はなんだろうか。

特別強力な力があるわけではなさそうだ。マジックとかその辺の比では無いくらい魔術は扱えるし、その才覚も極めて優れていると言っていた。実際、虚空から鏡を出してきたのはかなり驚いたが、あれは置換魔術というものらしい。よく分からん。

問題はそれが彼女を殺さなくてはならない理由になるかどうかだ。ならないだろう、普通。

置換魔術なるものが使えて、他にも色々な系統の魔術が使える。なるほど凄そうだ。

だが、それがなんだ？

世界を救えと叫ばれるほどに危険なのかと問われれば、それは断じて否と言える。

むしろ核弾頭を撃てるどこかの国の大統領とかの方が危険度としては遥かに高い。

ならば何故だ。何が、悪い。

産まれてきたのが過ちか？ 生きているのが罪深いか？ ???は何を考えている？

ああ、まったく以て、——

「……なんだ？」

明らかに愛歌のものではない靴の音に思考を打ち切る。規則正しい足音はこちらが振り向くよりも先に、庭園の中心であるここに辿り

着いていた。

「君は——」

澄んだ男の声に振り返る。その声は困惑しているように聞こえた。振り返った先に映るのは青いフードで顔を隠した男だった。背は高く、体格は良い。

悪寒がする。背筋の震えが止まらない。寒さではなく、肉体が目の前の男に対する恐怖で震えている。

自然体であるはずの彼がこの世の何よりも恐ろしい。今すぐにも逃げ出したい。

動悸がする。心臓が騒ぎ立てながら血液を送る。呼吸が浅く繰り返される。口の中が渴き、視界が狭くなる。

自分の身体に起きている恐怖から来る異常を全て認識しながら、それでも二本の足で立って彼の視線を受け止める。

「君に向ける敵意を私は持ち合わせていない」

「……信じられるか」

言葉の一つ一つに心が籠っている。誠心を持って接し、相手に対して敬意を絶やささない姿がある。

だからこそ怖かった。

きつとこの男は相手を敬愛し、讃え、心の底から認めた上で殺すのだ。何ともまあ、騎士らしい。

「サーヴァントがマスターを前にして敵意を抱かない理由はないはずだ」

「……君はまだサーヴァントを呼んでいない。私に無力な人を斬る趣向はないよ」

「ならばなぜ来たのか答えて欲しい。ここに、沙条の家でもこの庭園まで来た理由はなんだ」

「……………」

答えはなかった。ならばそれが返答だ。

この男は、この得体の知れないサーヴァントは何か明確な目的を持ってここに現れた。

間違いなく、俺の命を狙って現れた訳では無い。殺すつもりなら初

手で殺している。その気になればいつでも、その右手に握る聖剣で俺の首を過たず刎ねるだろう。

見事な剣だ。素晴らしい美しさと悍ましさだ。気味が悪いとさえ感じる。

セイバーのサーヴァント、愛歌によれば最優の英霊。アーチャー、ランサーと纏めて三騎士と呼ばれる強力な召喚枠にあつて、最優を謳われる存在か。

ならばそれが態々ここに現れた理由がわからない。

アサシンならばまだ分かる。

バーサーカーでもまだ分かる。

なぜセイバーが単騎で、マスターも連れずにこんなところに足を運んだ。

「——立ち去れ、セイバーのサーヴァント。無関係の幼子を巻き込むのがお前の望みか」

「無関係の幼子、か……」

宝石のような青い瞳を伏せて思案する素振りが見える。フードを被っていても整っていると思わせる空気を纏う男はそんな素振りすらどこか洗練されていて、同時に奇妙な確信を抱かせた。

愛歌か綾香か。或いは沙条の血縁か。魔術師としてあるこの家を、彼は目的としてここに来たのだ。

——深く息を吸う。

思考を冷やして加速させる。震えを気合いで抑え込む。心臓の音がやかましい。

戦おうなどと考えてはダメだ。殴りかかっても一瞬で殺される。どう足掻いても勝ち目がない。

「——私は世界を救わなければならない」

「ああ、そうか」

——コイツはダメだ。生きてはいけけない。なんとかして排除しろと叫ぶ心を理性で抑える。

知らず、拳を握り込む。

ああ、最悪だ。どうしようも無い。これでは詰みだ。救いようがな

い。

サーヴァントなんてものはいない。特別な武器もない。立ち向かえば死ぬ。情け容赦なくあれは斬ってくる。

けれど、もしかしたら。もしかすれば、勘違いなのかもしれない。感じたことは勘違いで、交わした言葉は空虚な虚言であったという可能性はある。だから戻ってこないでくれと願うけれど、足音はもう聞こえてくる。

少し浮かれたような軽い足音。コンコンとなるそれは入り口からこちらに向かつて真っ直ぐに向かつて来ている。

歯を食いしばる。心の火を燃やす。拳を痛みを感じるほどに握り込む。

戻ってきた愛歌がセイバーと向き合うこちらの姿を視界に入れ、

「真人、その人は……？」

青い騎士を見て硬直する。

フードを被る装いからは隠しきれない迫力がある。それに圧されたのか手に握っていたプラスチックが地面に落ちた。

騎士が振り返る。その表情も何もかもわからないけれど、それが致命的なことだった。

愛歌を正面に捉えたかれの気配が揺れ、次の瞬間には肌を突き刺すような硬さに変わる。剣を握る手が僅かに揺れる。

愛歌の怯えた顔が視界に映る。

身体が動いた。

「——恨んでくれても構わない」

「ふざけんなクソがア!!」

迷わず踏み込む。

「なっ——」

振り向きながら振り抜かれる剣を深く、獣のように踏み込んだことで結果的に回避する。

殴れるか、いや殴る。必ず殺す。ここで殺す。命を懸けることに躊躇いなどない。

這うような体勢から、拳を振り抜く動作とともに浮上する。このま

まいけば顎を打ち抜く。脳が揺れたところにマウントをとってそのまま殴り殺す！

「——ガ、ア」

視点が宙を向いている。肉体の感覚が薄い。足が地面に触れていない。呼吸が出来ない。

これは、あれか。殴り飛ばされたのか。肉薄して剣の下に潜り込んで殴る動作を行う前に左の拳で殴られたのか。

何が起きたのかを頭が凄まじい速さで理解してくれる。状況を気持ち悪いほど正確に認識できる。

「——」

受身も取れずに地面に転がる。口から血が溢れる。腹の感覚がない。たぶん、内臓がイカれた。漫画や小説でしか有り得ないと思っていたが、まさか体験することになるとは思わなかった。

麻痺しているのか痛みはない。ただ起き上がろうと腕を立て、えずくようにして血を吐いている。

「真人っ……」

こちらを見ながら立つ騎士の横を走り抜けて愛歌が駆け寄ってくる。

やめろ、逃げる。狙われてるのは俺じゃなくて君だ、なんて言えなくて。無様に血を吐きながら騎士を睨むことしか出来ない。

血溜まりの中に躊躇いなく膝をついて縋る少女が泣いているのが分かる。

こちらを見る騎士の瞳から迷いが消え、決意が宿るのが見える。

——ここで終わる。終わってしまう。

坂上真人の???に絡まれ続けた人生が終わる。ようやく変われそうだったのに終わってしまう。

昨日の夜に沙条愛歌に出会って強烈に干渉され、それを越えて導いてくれる被害者の女の子を泣かせて。その子を助けることも出来ない。

無様だった。無力だった。悔しかった。悲しかった。苦しかった。

——足音声が聞こえたが聞こえる

黄金の剣が振り上げられる。

——これで終まだわりだりろなのか

振り下ろされればそれで終わりだ。

——それでいい諦めるのか？

背中が熱い。心が熱い。身体が燃え上がる。

時間が止まったようだった。身体が動く、血を吐くだけの役立たずが機能する。

背中の令呪が燃えるように熱い。焼印を押されるような痛みを感じる。

腕で無理矢理持ち上げた身体に力を入れて、脳裏に浮かぶ言葉をありつけたけの力を込めて叫ぼう。

手を貸してくれるなら応えてくれ。俺はこんなところで終わるわけにはいかないんだ…！

だから——

「——来い、ランサアアアアア!!」

——炎が、溢れ出た。

——炎が溢れる。

振り下ろされる剣をその槍で受け止め、炎を纏う男がセイバーを打ち払う。

徐々に炎そのものの様な姿が人になる。現れるのは白い髪に白い肌の痩身の男。纏う覇気はセイバーのそれを凌駕するほど圧倒的で、揺らぎがない。

「サーヴァント、ランサー。召喚に応じ参上した。お前の道に立ち塞がる悉く、この槍で打ち砕こう」

宣誓する姿は堂々と。ランサーのサーヴァントは気負いする様子もなく、背後にマスターと少女を庇ってセイバーの前に立ち塞がる。

大槍、黄金の鎧、胸の中心に煌めく紅玉。赤い衣。そのどれもが上質な神秘を纏っている。一挙手一投足から目が離せない。目を離せば殺されると分かる。

「——さぞ名高き英雄とお見受けする」

「世辞は不要だ、セイバー。お前の決意は誰が相手であろうと揺らぐものではあるまい」

世界が軋むようだった。僅かに舞う火の粉が気温を上げ、騎士を中心に風が動く。

ランサーは倒れ伏した男を癒す少女が脇目も振らず、一心不乱に魔術を行使しているのを一瞥する。

——槍が奔る。

軌道は直線。何の銜いも工夫もない愚直な一刺。音を置き去りして放たれたそれをセイバーは辛うじて受け流し、反撃しようとした瞬間に迫る二撃目を飛び退いて回避する。

凄まじい技量だと驚愕し、開いた距離を瞬く間に詰めきったラン

サーが掬い上げるように槍を振るうのを受け止める。

「場所を変えるぞ、セイバー」

僅かに身体が浮かんだ瞬間に顔面を掴み、投擲。ガラスを破り夜空を舞うセイバーに一闪。鈍い金属音と共に弾け飛ぶ。沙条邸から離れ、住宅街のど真ん中に軽やかに着地。

両者ともに住宅街での戦闘行為は好ましくないと認識しているのか、どちらともなく屋根を伝って付近の林に向かって走る。

その間にわずかでも隙を見せれば後手に回り、素直に林に辿り着いても敏捷で優るランサーが恐らく先手を奪うだろう。故に先手必勝、選択肢は無い。たとえ防がれるのがほぼ確定であったとしても、部の悪い賭けを行う以外に選択肢はなかった。

振るわれる刃は並の英霊であれば防御も許さず、一刀の元に斬り捨てるだろう。だが、彼の相手はそのように脆弱では無い。

受け止めるのではなく弾き、炎と化した魔力を解き放ちながら薙ぎ払う。雑木の林が燃え上がるのではなく、熱量によって消し飛ばされて風景が変わった。もはや戦略兵器といえる次元の一撃は宝具でもなんでも無いただの攻撃だった。

それを、セイバーは正しく認識する。

尋常ならざる英雄。間違いなく超一級のサーヴァントであり、あの青年から瀕死のはずでありながら供給され続けているのであろう潤沢な魔力。間違いなく燃費が悪いはずのランサーが十全に動いているのは、果たしてどういう絡繰りなのか。

セイバーにそれを知るすべはなく。煙に紛れて思考を巡らせる時間も終わる。その剣を中心に渦巻く大気が煙を払いながら刀身に収束する。

マスターから無断で魔力を吸い上げていることに心中で謝罪し、しかし世界を救わねばならないのだと言いつ聞かせる。必ずやランサーを打ち破り、沙条愛歌を殺さねばならないのだと。

「ほう、俺を前におきながらその瞳に映るのは俺ではなく別の誰かか。それは俺のマスターか、或いはあの少女か」

「……………」

「答えは不要だ。俺はただ、マスターの意思に従うのみ。俺の命ある限り、貴様は指先の一つさえ彼らに触れられぬものと知れ」

言葉と同時に、炎を纏う一閃が唸る。直撃すれば即死、受けても余波で大きく形勢を握られる。狙わなくてはならないのは相殺か回避。しかしこの距離で放たれたこれを回避するのは不可能であるが故に、残された選択は相殺しかなかった。

暴風が炎とぶつかり大地が抉れ木々が飛ぶ。続く二合で大地が割れる。三合で割れた大地が隆起し、四合でそれが両断される。極小規模の天変地異が人の形をとってぶつかり合っている。

ぶつかり合う中で互いに浅くだが徐々に傷が生まれ始める。技量はほぼ伯仲、能力も大差はない。故に戦闘の最中で適応していくお互いの動きに合わせて被弾が生まれていく。だが、そことは別に間違はなく宝具とスキルに隔絶したものがあるとセイバーは推察した。

セイバーが浅く受けた傷を癒すことも出来ず、その必要も無いからと放置しているのに対してそもそもランサーはその全てが瞬く間に癒えている。しかも余りにも浅い一撃はなにかに阻まれて届かない。

常時発動型の宝具、治癒と防御を兼ねる間違いなく神話に語られているであろう強力な神秘。高位の英霊であると推察していたが、よもやこれほど強力な英霊であるとは思わなかったとセイバーは内心で戦慄する。人類史の中でも限られた超級のサーヴァント、破格の大英雄に違いない。

今もなお打ち込まれ続ける神速の槍はその全てが必殺であり、返す刃は不可視の鎧に阻まれて有効打になり得ない。仮に風の鞘から解き放つたとしても足りない。彼を斃すには宝具の解放が必要となる。「剣に迷いが見えるぞ、セイバー」

暴威が加速する。僅かに受け損なった瞬間に肩口を浅く抉られ、呻きながら次に備えようとした瞬間に顔に蹴りを受けて飛ばされる。ここに来て蹴撃を見舞ったランサーは追撃を加えるのではなく、何かを放つ予備動作を見せている。

明確な魔力の収束。解き放たれば一帯は消し飛ぶであろうあれは、もしかや宝具か。不味い。受ける手段がない。相殺を狙うにはあま

りに遅い。間違はなく雑木林を越えて無辜の民草を巻き込むあれはセイバーには許容し難い。

加速した思考には世界が遅延したかのようだった。その右眼に滾る魔力の奔流が放たれるまでもはや一秒と無い。その名とともに解放された一撃が多くくの命の喪失と共に決着を齎すだろう。

だが、これほど大規模に戦っていれば妨害が入るのは当然の結末だった。

解放の直前で鏖の雨が降り注ぐ。それはセイバーもランサーも纏めて葬らんとする死の雨。尋常ならざる技量によるものか、回避しようとする隙が間違はなく命を奪うだろう。セイバーは上空の雨を暴風によって瞬時に打ち払い、ランサーとの距離を詰めて斬る為の隙間に一歩踏み込む。

進めと言わんばかりに絶妙な隙間があるのはそういうことだろう。間違いなくランサーは強敵、サーヴァント二騎が本格的に協力しても戦力的に拮抗出来るかどうかと言ったところ。技量で並べど宝具で離され、宝具で並べど隔絶した技量は生半可な相手を寄せつけない。ならばこそ、この不意を打つ機会が最大の好機だった。

「ブラフマーストラ梵天よ、地を覆え」

——瞬間、鏖の雨が消し飛んだ。熱線が空を穿ち、月夜に浮かぶ僅かな雲が消える。衝撃が空気を叩き暴風を生み、音が遅れて破裂する。大軍すら一撃で滅却し得る一撃を放ったランサーの周りは高温によって地面が融解していた。

セイバーの足が止まる。鏖の雨が止んだ。槍を軽く払いながら歩くランサーの姿は圧倒的だった。無傷、無表情、無感動。どうしたこの程度なのかと言わんばかりに悠々と振る舞う彼を相手に被害がどうとか考えている場合ではない。

「——ほう」

剣が煌めく、聖剣が輝きを纏う。それを見てランサーが僅かに瞠目する。

「星の聖剣、ならばお前はブリテンの騎士王か。なるほど相応しい高潔さだ。お前ほど騎士の王に相応しい男はいないだろう」

挑発とも取れる言葉に歯を食いしぼる。答えを発するような余裕はもはやない。全ての神経を彼に向け、アーチャーが放つ矢を抜けないが聖剣で不可視の鎧の上からランサーを斬る。それだけに集中しろ。聖剣を見て真名を知り、それでもその余裕を崩さない彼はやはり尋常ではない。

先の宝具、梵天^{ブラフマ}よ、地^{マーストラ}を覆え。ブラフマーストラといえればインド、ヒンドゥーにおける奥義の名前だ。そして太陽の如き炎と不可視にして頑強なる鎧、右手に握る大槍。真名を確定させることは出来ないがある程度絞り込むことは出来る。

だがしかし、それがなんだと言うのか。彼は紛れもない大英雄。神話に語られる英傑の一人。特定の武具や伝承が致命傷になろうとも構わずそのまま猛威を奮うであろう。鏝の雨を炎の放出によって妨げ、セイバーと打ち合いながらその尽くを打ち払っているのがその証左だ。

数の不利など些事に過ぎない。遠距離と近距離の二人による即席かつ無言の連携ですらない共闘など苦でもない。打ち払い、燃やし、砕くのみ。

何者であろうとも、我が歩みを阻むに及ばず。雑木林の大半が更地と化し、燃え上がる周囲に目もくれず聖剣の担い手を追い詰める。如何に優れた騎士であろうともその攻撃が致命とならないのであれば恐るるに足らず。技巧を以て宝具の発動を許さず、ただひたすらに致命となる攻撃を繰り返し返せばいいだけだ。

鏝の雨が消えてからというものの、アーチャーの矢は初手ほどの苛烈を見せず的確に隙を狙い、時に隙を生むように挟み込んでくるのみ。たしかに卓越した技巧であり驚愕すべき威力ではあるが魔力の放出が炎の形となるランサーはその放出のみで威力のほとんどを打ち消せる。恐れる道理などなく、必然的に初手のような明確な必殺になり得るもののみを意識して払えばいい。

青い騎士の衣服は泥によって汚れ、フードはとうに剥がれている。

金の御髪も所々汚れ、整った顔には幾らかの切傷が見える。今も尚続く猛攻によって徐々に削られていく彼の瞳に宿る闘志はしかし消えることなく。僅かな隙を逃さないと獰猛に輝いている。恐らくランサーは今、宝具を打てない。それはアーチャーの牽制もあるが、それでも放つ機会は幾らかあった。つまり魔力に問題があるのではないか。

打ち合う最中、幾度か致命的な隙を見せたセイバーに対してあの熱線を打って来なかったのが釣りでなければ間違いない。まあ、だからといって勝ち目がある訳では無いのだが。

——槍が脇腹を抉り咄嗟に身を振れば顔面に槍が突き刺さる直前で飛来した矢によってランサーの動作が強制的に止められる。セイバーが瞬時に体勢を建て直した時には硬直から復帰したランサーの刺突が首を狙って迫り、打ち払った瞬間に横に飛んで背後から飛来してきた矢をランサーに受けさせる。それすら打ち払って振り回せる剛槍にあえて踏み込み、競り合う形に持ち込んだ。このまま形を崩して形勢を傾ける為にもアーチャーの矢を正確に認識し、次の手を構築しようとした瞬間に悪寒がして全力で飛び退いた。

直後に放たれた炎はこれまでの比では無い出力であり、もはやランサーを起点に火柱と化すほどのそれは接近した矢を灼いて消滅させる。如何に対魔力に優れるセイバーであってもあの中に入れてはタダでは済まないだろう。窮地だから力を振り絞ったわけでも今まで手加減していた訳でもない。ただ必要と判断したから使ったのだろう。それだけ丁寧な戦い、時間を掛けても確実にセイバーを落とすつもりでいる。

それは心底恐ろしいことだった。絶対に宝具を解放させないよう立ち回り、それ故に生まれている隙を力技で潰して戦うなどという出鱈目を通す。少々雑だが関係ない。彼我の間には絶望的なまでに性能面に差がある。この分だと宝具も使えないのではなく敢えて使っていないと見ていいだろう。意図は不明だが、そうした方が有利になると確信しているのだろう。そこに油断や慢心がないことが厄介だった。

日が昇るには未だ早く、騒ぎを聞き付けて無関係の民草が現れることは無いことから魔術による隠匿は成立しているのだろう。何者によるものかセイバーが知る由もないことだが、今だけはその働きが彼にとって裏目に出ている。

仮に人目に付くような自体になれば、ランサーとて即座に撤退するだろう。事実、彼はその宝具による被害以外は雑木林があった地形の範囲内に収まるように立ち回っているし、流れ弾が溢れないように配慮しているような素振りさえある。それはセイバーやアーチャーも同様だが、数の不利を背負ったランサーが事も無げにそれを実行しているのはやはり恐ろしいものがあった。

今は僅かな間を維持しているが、ここで聖剣を解き放つ動作を見せれば妨害されて終わるだろう。アーチャーによる援護も途絶え、無言で向き合ったまま燃える大地で佇んでいる。魔力切れを疑うが、その堂々たる姿を見れば未だ潤沢なの魔力によってその全てが維持されているのが分かる。何故動かないのか分からないが、それ故に警戒を解くことができない。

「騎士王よ、お前は聖杯に何を望む」

だから、その問いに即座に答えられなかった。見つめる瞳は真つ直ぐで偽りの一切を許さない力があつた。この問答によつてもしかすれば和解の道があるかもなどとは思わないが、しかし誠実に答え言葉を交わさないのは騎士道に反する行いでもある。

「私自身が聖杯に願う望みはない」

「ならば何を願う。お前はその決意を以て何を成す」

答えれば間違いなく、再び戦端が開かれるだろう。しかし偽ることなどありはしない。戯言と切り捨てられようとも進む。例え自身のマスターに断りを入れず独断で動き、その結果叱責されようとも構わない。

「私は世界を救わなくてはならない」

「その在り方は過去を見つめ、世界に囚われた虜囚だな。お前は思考を放棄し、愚かしくも自らの道を狭めている蒙昧の輩のように思える」

それ以上の言葉は無かった。セイバーにも、ランサーにも。それ以上語るべきことばを彼らは持たなかった。構え、再び打ち合う中でセイバーの脳裏を過ぎったのは涙を流す少女の姿。それは苛烈な戦闘において不必要なものであると切り捨ててしまおうとしているのに、どうしてか。十全に動作する肉体とは乖離して心が重くて仕方がなかった。

鏝の雨が空を覆い、炎が舞い、聖剣が煌めく。陽は昇らず、夜は未だ明けない。

——眩しい。陽の光を浴びて眼球に痛みすら感じながら目を覚ます。

知らない天井だった。ベッドは普段使っているものよりも数段上のものなのか、柔らかで身体にフィットするような感触だ。腹に何かに乗っている気がするが、ちらりと目をやれば赤が混じった金の髪が映ったのでそつと体を起こす。

記憶にある限りならば悶絶しながら血反吐を吐いて彼を呼び、そのまま気を失った。ランサー、カルナ。インドの大英雄、太陽神スーリヤの息子。絶大な力を持つ彼は確かにあの忌々しい騎士を退けてくれたのだろう。彼女が傷つけられた様子はなく、俺の血で汚れてしまったまま椅子に座ってベッドに倒れるように眠る頭をそつと撫でる。血が固まってしまっている、起こして風呂に入るように言うべきだろうか。

少し悩んでいれば、扉が開いて瘦身の男が入ってくる。白い髪に鋭い眼光。幽鬼と見紛う白い肌。死地に於いて助けてくれた命の恩人であり、これから聖杯戦争を共に戦うサーヴァント、ランサー。彼は部屋に入るなり神妙な顔でこちらを見つめ、何かを見定めるような目で俺と彼女の間で視線を彷徨わせる。何かあったのだろうか。納得するように頷き、そのままベッドの脇まで近づいた。

「サーヴァント、ランサー。真名をカルナ。今更だがよろしく頼む、マスター」

「坂上真人だ。よろしく頼むよ、カルナ」

手を差し出し、握る。硬い掌は鍛えられているのだなと感じさせ、同時に目の前に立つ彼がとんでもない英雄だという情報を伝えてくる。視界に映る奇妙な文字は彼の能力を分かりやすく伝え、彼の持つ宝具の詳細を読み取ることが出来る。なるほど、怪物だった。分かりやすくシンプルに、彼は英雄だった。無敵の鎧、神より与えられた槍。

師より受け継ぎ、呪われた奥義。夢に見た夜の戦闘風景。そのどれもが常識を笑うほど破壊してくれた。

セイバーに浅くはない手傷を負わせ撤退させ、アーチャーはある程度の実力を把握したに過ぎないが直接戦闘ならば間違いなく勝利出来る。ランサーは冷静にそう分析し上で、しかし相手はそれを覆してくるだろうと伝えてくる。ランサーがそうであるように、彼らもまた偉業を成し遂げた英雄なのだ。油断も隙も不要。常に全霊を賭けて討ち取る覚悟でいるべきだと彼は言う。

なるほど確かに、それは道理だと納得した。自分など羽虫と変わらない力を持つセイバーを基本性能で上回るだろう彼がそう言うのには説得力がある。それに、今回の戦闘でセイバーは宝具を使っていない。カルナがその猛攻で使わせなかったというのもあるが、使用にはそれ相応に隙があるからだろうと分析する。星の聖剣、ブリテンの騎士王。ならばあれこそがエクスカリバーだとか呼ばれる有名なあれだ。どんな力なのだろうか。

「ん……」

愛歌の手がベッドに下ろされていた手を握った。暖かで柔らかい手を解こうとは思えず、どうしたものかと思案する。

「マスター、彼女はつい先程までお前を健気に看護していた。今はその微睡みを脅かすべきでは無いはずだ」
「そっか」

ならこのままでもいいよう。せめて横にしてあげたいが、それで起こしてしまつては悪い。起きてこなさそうなタイミングで抱き上げて横にしよう。それまではこうしてカルナと話をしようと思う。改めて視線を向け、その静かな瞳と視線を交わす。

目付きは悪いが綺麗な目だ。話していると何でもかんでも見透かされるようで少し気味が悪いが、確か経路パスといったか。これを通じて伝わってくるのは決して悪感情ではなく、好感情であるのが伺えるのでそういう人物なのだろう。

良くいえば表裏なく率直に言葉を口にする人物であり、悪く言えば素直すぎる上に言葉選びが最悪に悪い。セイバーにたいする発言も

微妙に刺々しい感じがしたが、たぶんあれも褒めてるつもりであったのだろう。まああの場面で褒めても煽ってんのかという感じはししうだ。

「瀕死にも関わらず戦闘を覗き見るのはあまり褒められた行為ではないだろう。なぜ安静にしていなかった」

「いや、なんか痛みとたぶん失血で意識飛んだらお前の視点で見てたんだよね。よく分かんねえや」

「マスター、一度己の内に声を投げかけ潜むものを見定めるべきだ。お前に不足しているのは自己理解のように思える」

「そうかあ……?」

あまりやりたくない行為だ。瞑想とかしてみたことはこれまでの人生の中で何度があるが、毎回毎回叫び回る声に意識を持っていかれそうになって気合いで戻って来ていた。たしかに声が聞こえてこない現状ならばそういう行った行為をやり直すのもありかもしれないが、眠っている間にランサーの視点で多くのことを知れたのはとても良い収穫だったように思われる。確かによく分らないが、これを深く理解しようとするれば地雷を踏むような気がするのだ。

というか、深く意識に潜るとまた?に干渉される気がする。意識を分解して仮眠する方法とか瞑想を通じて仏に通じる的な修行を一通りは体験しているから分かるのだが、今やるべき行為ではないと頭ではなく直感で感じるのだ。だから有難い提案ではあるがやらない。きつと聖杯戦争において足を引っ張るものでは無いはずだからいいだろう。

そう伝えれば彼も納得してくれたのか、一度頷くだけに終わった。

部屋を静寂が支配する。思い返せばまだ二日程度だ。聖杯戦争がどの程度の長さで終わるかなど知らないが、先は長いと見るべきだろう。早々に大量に血を吐いたり認めてはならない相手を見つけたりしたが、まあ生きているし殺す相手が決まってよかったと思おう。殴り飛ばされてあれだけ血を吐いたのに、貧血の症状もなく元気になっているので気にしないことにする。

「不思議なものだ」

「お前もそう思う?」

「ああ、不思議なものだ。この平和な時代にあつて苦難を約束され、数奇な運命を辿ることを約束されている。それに抗う様はとても好ましい」

「……ん?」

会話が微妙に噛み合わなかったがそこはいい。苦難を約束されているとか数奇な運命を辿るとかも、まあいい。世界を救えと聞こえるくらいだし、そこは認めざるを得ないものがある。だが、なぜ、カルナにそれがわかったのか。マスターがサーヴァントのことを知ることが出来るだけでなく、サーヴァントもまたマスターのことを知れるのだろうか。そうであるならば、或いは彼はこの声の主を知っているのだろうか。

「カルナ」

「どうした」

「お前は世界を救えと叫ぶ声の主が分かるか?」

「それは俺の知るところではない。だが世界を救えとお前に声をかけるならば答えは限られてくるはずだ」

しかし俺はそれを知らない。禅を組み、深く意識の中へ潜っても見つかからない。愛歌はきつと知っているのだろうかけれど、彼女に聞くべきではない気がする。世界を救って欲しいと人に声をかけるような存在といえば――、

「ああ、そうか。神か」

「ありえない話ではない。俺の時代にはよくあつたことだが、お前ほど縛られていた者もまた珍しい」

カルナの時代にもいたのかと驚くが、少し考えれば納得した。それはそうだ。彼の時代は神の時代、当たり前前に神様が世界を運営する時代だったのだ。きつと今よりも身近に神様はいたんだろうし、確かカルナ自身も父親が太陽神だ。多神教、複数の神が闊歩する時代において神の声を聞いて導かれる者は珍しいものではなかったのかもしれない。落ち着いて考えてみれば変な話だ。フランスの聖女、ジャンヌ・ダルク。彼女は神の啓示を、声を聞いて祖国を勝利に導いて処刑

された。

なぜ、そんな類似存在に気づかなかった。

どうして、神の声だと思わなかった。

「……なんだ、そりゃ」

意識しなければ？だと認識できない。こうして指摘されなければ気がつかない。声で囁き、叫ぶだけではない。アレはこちらの行動に干渉し、意識に干渉して操り人形に仕立てあげようとしている。お前はただ従っていればいいと。導いているのではなく、操作している。世界の在るべき姿はこうなのだと、勝手に決めつけて動いている。だが、本当にそうだというのなら。俺は、俺は――

「落ち着け、マスター。お前はお前の意思でここにいる」

「……どうしてそう言える」

「お前が俺を呼んだからだ」

嘘偽りなどないと真っ直ぐにこちらを見る瞳に気圧される。ふざけた根拠だと反論しようとして声が出ない。

「俺は確かにお前の声を聞いた。死の淵に有りながら、輝く魂から零れ落ちたお前の意思を受け取った」

だから、胸を張れと彼は言う。

「あの輝きは何者にも穢せないもの、誰かを守るためにどこまでも立ち向かう勇者のものにほかならない。誇れマスター、お前は俺が尊敬するに値する人物だ」

「……おう」

「理解したならば覚悟を決めろ。これより先、悩んでいる暇も立ち止まっている暇もない。お前がその少女の未来を思うならば立ち上がれ。聖杯戦争とはそういうものだ」

「おう」

乱れた心を落ち着ける。精神を乱す要素を無視して統一する。少し崩れたくらいならば取り繕える、まだ立ち上がれる。ずっと付き纏ってきた声のお陰で精神面は強くなっているのだから皮肉なもの

だ。穏やかに眠る愛歌の髪を気がつけば解放されていた手でそつと撫で、起こさないようにベッドを出る。肉体の調子を確かめる。手は動く、足も違和感はない。壊されたと思われる内臓も身体を折ったり伸ばしたりしても何も感じないことから完治していると思われる。

眠る愛歌を抱き上げる。思ったよりも軽い。よく見れば青く綺麗だったドレスが血で汚れている。髪だけでなく全身の至る所に乾いた血の跡がある。しこたま吐いた俺の血だろう。これをベッドに寝かせるのも些か問題があるような気がした。しかしどうしたものかと頭を捻つていれば、控えめなノックの音がした。

「はい、どうぞぞ」

「……もう立てるのか」

「思ったよりも頑丈だったようで」

軽く笑いながら広樹氏に腕の中の愛歌を見せれば彼は驚いたように目を見開き、少し声の大きさを落として受け取ろうと言った。続いて、綾香に任せればこの子も文句は言うまい、と。やはり愛歌も年頃の娘らしくお父さんと同じ洗濯機は嫌とか言うのだろうか。少しそういうことが気になったので、起きたら聞いてみようと思う。

「替えの服をリビングに用意してある。出かけるならそれを来ていきなさい」

「すみません、ありがとうございます」

「構わないさ」

愛歌を渡し、部屋を出る。廊下で別れて霊体化したカルナ共にリビングへ向かう。心做しか身体が軽い。覚悟を決めろと発破をかけられたからか、それともなにか別の理由か、あるいは気のせいなのか。ほんとのところは分からないけれど、心は間違いなく軽かった。

迷っている暇はない。立ち止まっている余裕もない。後悔している時間はない。進め、進め、進め。今はただ前に進む時だ。腹を括つた、覚悟を決めた。その先に何があつとしても、聖杯を手に入れて俺は願いを叶えよう。

くそつたれの神に唾を吐いてやる。

対面で拳を構えるカルナを見ながら、聖杯戦争について考える。まず、この聖杯戦争において必勝法というものは存在しない。

それは呼び出されるサーヴァントは如何なる存在であろうとも現代に生きる人間では到底及ばぬ存在であり、また彼らを従えるマスターを暗殺したところで主を失ったサーヴァントがそのまま潔く消滅するわけでもないからである。時に生き汚い者は隠れて忍び、時に幸運に恵まれた者は新たな主を得て戦うという。

それはこの争いが決して気を抜けぬものであるとするのと同時に、マスターとサーヴァントが死ななければ完全な勝利に届くことはないと示している。マスター、契約者、願いを持つが故に聖杯に選ばれた七人の愚者。身の程を弁えずイエスの杯に手を伸ばすもの。当然、生き汚いものだろう。広樹氏から貰った資料によれば、伊勢三などは廃れかけとはいえそこそこ古い血筋の魔術師であるため、中々にしぶといのは間違いないらしい。

魔術師、これもまた問題だろう。

坂上真人は決して魔術師ではない。確かに普通ならば触れられぬもの、感じられるものに接してきた人生ではあったが、それは確と神秘なるものに携わってきた訳では無い。知らぬ間に触れ、聞き、己の内沈んだものに過ぎない。故に、独力で魔術師を打倒することは叶わない。魔術師とは常人の感性を持たず、只人とは一線を画す力を持つのだ。勝てる道理がない。

ならば坂上真人が聖杯戦争に勝利するために行うべきこととは何か。

無理だ、無茶だと諦めることは捨てている。必ずや聖杯を手に入れる。最も確実に勝利する方法を探して選ぶほどの余裕はない。であれば答えは一つ、カルナという最大戦力で蹂躪する。これだけが俺たちに許された手段だろう。無力なマスターと強力極まりないサー

ヴァント。しかし宝具の行使に差支えがある事はなく、全力戦闘もまた問題がないと自己申告された。

よって考えるべきはカルナという強力無比な力を如何にして敵にぶつけるかだが、これは基本的に待っていればいいという結論に至る。同盟、徒党を組んでの襲撃であろうとも余程でなければ凌げる。拠点は愛歌が目覚めれば変えることになるのだろうし、とりあえず今はこのまま待ちの姿勢でいいだろう。明らかに浮いた陣営、取りに行けるタイミングがあれば即座に襲撃して殺す。昨夜の戦闘でセイバーとアーチャーと思われるサーヴァントは少なからず疲弊していると思われるため、その隙を伺う他の勢力の動きを見るべきだとカルナも言っていた。

「どこを見ている、マスター」

「——う、ア」

鳩尾に衝撃を感じた瞬間に思考が途切れる。交わっていた拳打の合間に挟み込まれた殴打に胃液をぶちまけそうになりながらも堪え、一切の躊躇もなく顔面に向けて放たれた追撃を防ぐ。力を同じレベルまで抑えているにも関わらず防いだ腕を起点に凄まじい衝撃を感じると同時に弾かれ、鳩尾への二撃目に間に合うはずのタイミングで置いた腕をすり抜けて宙を舞った。

「イ、てエ……」

「雑念を捨てろ、捨てられないのであればこれで終わりだ」

悪い、まだやれると立ち上がる。最低限の自衛の為にと申し出たのは自分であり、この程度の痛みであれば少して治まるから雑念を排してこぶしをかまえる。武器を持たないカルナが用いる武術は確か、カリパヤットと言ったか。インドにおける武術、遙かな古代より存在するそれは彼らクシャトリアも例外ではなく納めているらしい。

同時に踏み込みながら側頭部を狙う拳を身体を落として避け、下から顎を狙って左腕を振り抜く。それを身体を軽く揺らして避けられながら至近距離を維持するカルナに中に入りすぎた事で起こるインファイトを覚悟し、顎に向けて跳ね上がった膝を額で受ける。そもそも宝具によつて守られたカルナに傷をつけることは叶わないが、ま

もにもらうより痛みはない。

そのまま片足立ちのカルナが体勢を戻す前に組み付いて姿勢を崩し、馬乗りになって拳を振り上げる。当てれば勝ちという条件上、傷は付けられなくともこれを入れればこちらの勝ちだ。だが、この程度で勝てるならば彼は英雄として名を残していかないだろう。案の定と言うべきか。振り上げた拳が当たる直前で視界が回り、如何なる手を用いたのかは知らないが、身体が宙を待っていた。

「——は？」

受け身も取れずに地面に落ちる。衝撃で無理矢理吐き出された空気も痛みも大したものでは無いが、何をされたか分からなかった事がショックだった。口から出るのはどうやってとかそんな言葉ではなく、ただ間抜けなだけの疑問。何がどうなっているのか分からないというだけの、ちんけなものだった。

「説明が必要か？」

「いやまあ欲しいだろ」

そしてあわよくば身につけたい。拳の構え方、殴り方、蹴り方。現代に伝わるカラリパヤットとはまた別の、古きカラリパヤットを英雄から直に学べるというのはとても大きい。現代では、確か植民地時代には有名な流派が失伝したとかで正しい形のそれは残っていないかっただけだ。どう教えたものかとカルナが悩んでいる間に身体を起し、地面に座る。

身体に痛みはない。どこかを痛めることも視野に入れていたがそういった心配もない。殴られた腹も膝を受けた額も地面とぶつかった背中もその他殴打された様々な部位に痛みもなければ打撲痕もない。内出血の一つすらないのは、なんとというか不気味だった。これもカラリパヤットの力なのだろうか。そんなわけは無いだろうが、何でもありなインドだしあるかもしれない。

「……すまない、俺の口からこの技を伝えるには語彙力というものがないらしい」

「素直か！」

「嘘偽りを語り、相手を騙すことは悪徳だろう」

こうして組手をしながら会話をしていくうちにやはりと思うが、この男は素直だ。クソ真面目とも言える。聞かれたことには素直に答え、他者の意見全てに対して所感を口にしてしまう。しかしその全てにあるのは肯定であり、あらゆるものを尊いと認めているらしい。仏陀か何かこいつ？

「思えば、師より技を授かった際には受けて学べと言われたものだ」

「脳みそに筋肉詰まってるだろ」

「しかしそうなる那不肖の弟子であるとはいえ、オレもまたそれに習うべきか」

「馬鹿なの?!」

僅かに不満げなというか、解せないといった様子のカルナに思わずため息が漏れる。神話に語られる師弟が揃って筋肉脳だった。シヨックというよりもやっぱりかという感覚だが、カルナの師とは何者だろうか。あまり詳しくないため疑問に思う。

「どんな人だったんだ、その師匠は」

「一言で表せばそうだな、嵐のような人物だった」

「やんちゃってことか」

「そうともいう。だが、決してそれだけではなかった」

語るカルナは懐かしいものだと言いながら、穏やかな顔で言葉を続けていく。

「名をパラシユラーマ、ヴィシユヌ神の化身の一人であり最後の英雄であるカルキを導くとされる者。クシャトリヤ嫌いであり、オレの時代で実際に戦えば間違いなく滅ぼされていただろう」

それはとんでもない化け物だ。カルナと同時代、クシャトリヤといえば有名な英雄も多く語られる階級であったはず。それらを滅ぼせるといえるのはどういう力を持っていたのだろうか。

「しかし、師が偉大な人物であることに間違いはない。多くの戦士が育てられ、技を授けられて戦場に出た。厳しくも優しい、師として仰ぐに足る人格者でもあった」

「その辺も気になるけどどんな力を持ってたんだ?」

「主な武器は斧であり、師はそれを振るいガネーシャ神の牙すら折つ

たと言われている」

いまいちスケールの分からない話だ。ガネーシャというのが神であるのは分かるが、それが如何程の存在なのか。その牙を折るということが神話としてどれほど価値のある事なのか不明である。

「詳しく気になるならば直接聞くといいだろう。お前であればいつか会えるはずだ」

「ん？」

「この戦争が終わった後、それでも師について興味があれば探せ。恐らく、師は未だ存命だ。お前のような男が探していればいつか姿を現すだろう」

「神話の人間が生きてるのか……？」

「間違いなく生きている。いつか現れる最後の英雄カを導くために生き続ける。師とは、パラシユラーマとはそういう存在だ」

途方もない話だ。インド神話に語られるような人物が今も尚生きている。千年なんて話ではない。二千年でも届かない。詳しく何年なのかなんてきつと誰にも分からない永い時間、パラシユラーマはこの星で生きているという。全てはただ、いつか現れる最後の英雄を導く為に。

流石はインド、スケールがでかい。世界を創造するとか破壊するとかそういう話が現代で語られるほどに規模が大きい神話は違うということだ。まあでも、一度探してみてもいいかもしれない。きつと今も旅をする門司にとっても、どこをふらついているのか知らない妙蓮寺にとっても、この戦いを終えたあとの俺にとってもタメになると思う。

神だの仏だのに悩まされる身としては、実際に神話の時代から今に至るまで決められた役割の為に生き続ける存在の言葉というものはとても大きなものだろう。叶うならば聖杯戦争なんてものに関わる前に会いたかったが、過ぎた望みか。

「とりあえず鍛えられるところは鍛えて戦って、勝ったあとで探せばいいか」

「その意気だ、マスター」

心の在り方は定まっている。成すべきことも決めている。道を探すのはこれが終わってからでも間に合うだろう。今とにかく、魔術師なんてものに襲われても最低限の自衛が出来るように鍛えるしかない。

再開しようと立ち上がり、お互いに拳を構えて目を合わせる。重心の乱れ、呼吸の仕方、拳の構え方に問題はない。こちらの踏み込みに合わせて、鍛錬を再開する。

結局、鍛錬というなのボコボコタイムは日が沈む頃に愛歌が来て終わるまで、カルナに一発も入れれないまま終わった。

——綺麗だと思った

街の灯りは全て消え、人の気配は欠片も無い。雲一つない夜空には無数の星が輝いていて、それを眺める少女の姿はどこまでも幻想的だった。二人で空の上にほど近い建物に乗り、満天の星空を眺める。東京でこんな空が拝めることは明らかにおかしいのだが、聖杯戦争なんて頭のおかしい儀式の最中であることを考えて多少の違和感は忘れよう。

遠くで立ち昇る黄金の光、空を裂く無数の鏃、全てを呑む灼熱。サーヴァント、ライダー。真名をオジマンディアスというらしい古き英雄。サーヴァント、アーチャー。真名不明だが、衣装からしてペルシャあたりの英雄と思われる。サーヴァント、ランサー。真名をカルナ、インドのマハーバーラタに語られる大英雄。彼らがぶつかり合う度に爆炎が舞い、周囲が壊れていく様は爽快ですらある。

こうして遠くから眺めているだけで心底震え上がってしまいそうなほど、彼らの戦闘は苛烈だった。

恐らく三者三様に手加減はしているだろうが、それでも既に複数のビルが崩れ、灼け、消し飛んでいる。本当に人間という規格から外れているとしか言いようがない。カルナが目から熱線を放ち、それが東京の空を焼きながら彼方へと消える様子なんてもはや漫画や小説の世界だ。

まあ、神話に語られる大英雄と正面から張り合う二騎ももはやよく分からないとしか言えないのが凡庸な人間に過ぎない自分の限界なのだろう。融解したビルに立ちながら光を以て全てを呑まんとするライダーの姿、それらを軽々と避けながら一矢がビルの一つ二つは貫く矢を放つアーチャー。時折目で追えない速度で戦闘する彼らはきつと、朝陽が昇る時まで争うのだろうと思う。

「楽しそうね」

「まあ、カルナも戦うことが好きらしいしそういうもんなんだろうよ」
「男の人はああいうのに憧れるって聞いたのだけど、貴方はあんな風になりたいって思う？」

「俺は思わないかな。持て余しそうだ」

ただ一人で大軍を薙ぎ払い、強大な力を以てあらゆる難題を乗り越える。その末路に待つものの殆どが悲劇であり、幸福を手にする者もその道程は苦難に満ちていることが大半だ。人生を旅路というのであれば、俺はそんな波乱万丈な旅路ではなく穏やかなものがいい。力なんてあつても持て余すし、苦しいことに立ち向かうのは嫌いだ。

「愛歌は」

「？」

「愛歌は、どんな風に生きていきたい？」

「そうね、普通がいいわ。誰かに恋をして、誰かを愛して、誰かに愛されて」

目を閉じて何を思い浮かべたのか、少し寂しそうに微笑みを携える。

「最後に、大好きな人と寄り添って死ぬの」

「普通だな」

「普通でしよう？」

思ってた数倍は普通だった。普通オブ普通。坂上真人が欲しいと思っただけで諦めてしまった極めて普通な人生を望んでいる。もう少しこう、ぶっ飛んだ解答を予想していたがこういう所は普通の少女だ。きつと、そういうところがどうしようもなく眩しいのだと思う。自分が諦めてしまった普通を、■の声に導かれて己を殺す化け物を知っている。そういう風に生きていられる在り方こそが尊いものなのだろう。

なればこそ、ああ、忌々しいセイバー。騎士王アーサー・ペンドラゴン。今も玲瓏館とかいう日本でも有数の富豪にして魔術師らしい家の敷地内でバーサーカーらしきサーヴァントと小競り合いをしている彼。一目見たあの瞬間から胸に燦るこの感情につける名を俺は知らない。怒りではなく、怨みではなく、しかし憐憫や愛では決してないこの感情はなんだ。

見たことの無い衣装に身を包む少年がマスターなのだろう。彼と向かい合うようにして座る二人が玲瓏館の当主とサーヴァントであるキヤスターか。衣装、服装や装飾品といった特徴から時代を類推することが出来ない。こういうの、専門分野的に割と得意だったのだが彼は本当に分からない。

白い長髪、白を基調とした衣装。軽薄そうな顔立ちと表情に裏のありそうな雰囲気。なんというか、異質だった。およそ英雄らしい要素を感じない。それはバーサーカーにも言えることだったが、キヤスターのそれはいまいち違うように思われるし、何より彼は覗き見しているこちらに気がついていて。気がついていて見なかったことにしている辺り、性格が悪そうだ。

「頻繁に使つてると気持ち悪くならない？大丈夫？」

「んー、最初はきつかったけどもう慣れたかな。視点を飛ばす感覚つてのを掴んだから、あんまりぴよんぴよん飛ばさなかったら酔わないと思う」

愛歌に使い方を教わった遠くを見るための魔術。初めはとにかく酔いが凄まじかったのだが、とりあえず使っていたらなんか慣れたのでそういうものである。慣れてしまえばそこその範囲は自由に見ることが出来るようになって快適だった。魔術なんて言われていてもできるとは思っていなかったの、地味に楽しく嬉しい。悪用すれば覗きとか出来そうだが、さすがに興味が悪すぎるだろうしそこまで飢えていない。

セイバーとバーサーカーはセイバーが終始圧倒しており、このままいけばバーサーカーが消滅する気がするのだが、マスターは何をしているのか。令呪を使って撤退させなければ敗退必至の状況を見過ごしている。

「バーサーカーってのは狂戦士だったよな？ 他のサーヴァントとは違って理性がない代わりに少し強いって聞いた気がするんだが」

「そうね、名前の通り狂戦士。単語の起源としては北欧のベルセルクに由来する狂える戦士のクラス。理性なきサーヴァントよ。理性の代償に基礎性能を底上げするのが特徴なのだけれど、やっぱり相手が

悪すぎるわね」

俺たちにとって運命の死神、騎士王アーサー。あらゆる攻撃を容易く捌き、着実に追い詰めていくその姿は真摯なものだった。明らかな格下、それこそなりふり構わなければ一太刀の下に斬り捨てていても不思議ではない実力差でありながら、獣の如き相手に敬意を抱きながら戦っている。——虫唾が走る。戦士の誇り、騎士の誉れ、戦場の榮譽。そんな下らないものを抱きながら、ただ運命に選ばれただけの少女を殺そうと出来るのは認めがたい。

可能ならばこの手で殺したいが、そんな力はないからこそ確実に、堅実に進める必要がある。

幸い、カルナは騎士王よりも強い。星の聖剣、約束された勝利の剣も攻略できる。だからこそ他のサーヴァントによる邪魔がない状況、すなわち最後に残る二陣営になってしまえばこちらのものだ。その為の傍観の一日だったはずなのだが、思えばなぜ初日から戦闘を行っているのだろうか。

「様子見とかカルナから提案があつたのになあ……」

「貴方が喉けたようなものじゃない。あのライダー、もしかしてカルナより強い？なんて言ったら作戦なんて捨てて飛び出すわよ」
「……」

いやだつて、ファラオとかラーにしてホルスとか王の中の王とかなんか強そうなこといっぱい並べてたし？感じる魔力の昂りにとんでもなく威圧的な光の波動を見たらついでですね？なんて内心で言い訳しても無意味であるので無言を貫くことを選択する。ああ、カルナが少し不満げにしていたなあ、などと呑気に考えているのも伝わっている。でもまあ、そうだな。

「間違いなく、最強はカルナだよ」

「そう？ あのライダー、まだとんでもない奥の手とかありそうだけれど……」

確かにあれは強いだろう。きっと、忌々しいセイバーの力も借りて複数で対応してようやく勝てそうなほど強力で出鱈目なはずだ。けれど、それでも最強はカルナだ。カルナの方が絶対に強い。

「どれだけ苦戦しても勝つき。負けないって決めたからな」

決して負けない。勝利をこの手に。誓ったのだ、必ず勝つと。誰も知らない、誰にも知られないあの場所で俺たちは誓った。ならば勝つ、必ず勝利する。令呪一角使えばどんな相手でも一騎削れると考えて、セイバーのように一角。ならばあとの二角を用いればいい。

「……ズルいわ、そういうの」

唇を尖らせる少女を見て苦笑する。

「男同士の友情とかそういうの文化、良くないと思うの」

「そうは言ってもなあ」

男は格好付けて生きるものだと言っていた。友情と誓いか、そういうものは殊更大事にしていけないと男が廃る。たぶん今頃、ヒマラヤにでも登って死んでいても不思議ではない門司とも語ったものだ。妙蓮寺はよく分からないが、たぶん素敵だと同意してくれるだろう。だから、こればかりは昔からある男の特権というものだ。

「何か約束してみるか？」

「そういう訳じゃないのー」

「えー……」

難しい乙女心である。というか女心というものは分からない。理解が出来ないと言うべきか悩むが、きつと理解しようとしていないだけなのだろう。理解できないことの殆どは理解不能なのではなく理解しようとしなから当然だ。いや、今のはそういうの抜きで分からんきがする。

「しかし朝までやんのかなあ、やっぱ」

「そうねえ、三人とも顔は笑ってるし続くんじゃないかしら？」

傲岸不遜ここに極まれりといった様子だったはずのライダーは哄笑しながら暴れ回り、獯猛な笑みを貼り付けたアーチャーが駆け回り、いい笑顔のランサーが爆炎を撒き散らして争っている。しばらく続いている光景だが、よくもまあここまで続くものだと思えてきた。戦いの楽しさというものは味わったことがないから分からないが、同格、或いは類まれなる格上とのそれは格別なものなのだろうか。

カルナから逆流してくる感情は歓喜と賞賛に満ちていて、少し羨ましいとすら思う。彼の生涯を思えば確かに、何に囚われることも無く存分に戦えるというのは好ましい状況なのだろうか。彼はある意味、誰よりも神々と人間によってその人生を狂わされた被害者とも言える。クンティにより産み落とされ、身勝手に川に流され、結果的にカーストによって悪となったが故にアルジュナに敗北する運命を背負った。

その人生を客観的に評価すれば悲劇としか言いようがないが、カルナにそんな思いは欠けらも無いのだろう。

あらゆる選択を良しとし、受け入れてしまうまるで聖人のような精神性はどのようにして培われたのか。マスターはサーヴァントの人生を夢に見ると言うし、いつか知る時が来るのであれば楽しみと言っているかもしれない。自分とはまるで違う彼の生涯を体験することで、何か拓けるものがあるかもしれない。

「分からんなあ……」

流れ込んでくる歓喜の感情が強いからか、自分と比べてどうにも陰鬱な考えになってしまう。深夜になって眠くなってきたのもあるだろうが、カルナに関わると愛歌以上に精神の根幹に強く影響があるように思われる。それは経路パスを通じて深く繋がっているからだと思うが、そうであれば他のマスターもこうなりながら戦っているのか。あのライダーとか、かなりやばそうだが。——あれ、目が合った。

「なんかこっち見たな」

「見たわね」

争いはそのままに、確かにこちらと目が合っている。見開かれた眼の鋭さは思わず気圧されそうなほど強く、瞳は宿した意志の尋常ならざる熱量を伝えてくる。手を振り返してみたらどうなるかと思うが、なんかブチ切れて殺されそうだしやめておこう。果たして正解はなんなのだろうか。中指を立てたら色々終わりそうだし、ヘラヘラ頭を下げる気にもならない。

となればまあ、答えは一つ。

「帰って寝るか。そのうちカルナも帰ってくるだろ」

Act 8 Daydream

——?????
、?????
いつからか同じ夢を見る。

世界を救う夢。命を奪い、尊厳を踏み躪り、悪を討ち、世界という不明瞭なものの未来を守る。

?????
の声なんて聴こえないと耳を塞いで生きて、目を逸らして進み続けた。

結局、沙条愛歌という運命に出会うあたり努力は無駄だったのかも
しれないけれど、今はまだ耐えられる。

——けれども毎夜、夢を見る。

その首をへし折る夢を見た。胸を貫かれた彼女を見た。首だけに
なった彼女を見た。血に塗れた彼女を見た。彼女に殺される夢を見
た。眠る彼女を殺す夢を見た。手足を貫き炙る夢を見た。腹を掻き
回して殺す夢を見た。息絶えた彼女を抱き締める夢を見た。死体を
貪る夢を見た。犯しながら殺す夢を見た。死体を喰らう夢を見た。
生きたまま食い殺す夢を見た。嗤いながら踏み殺す夢を見た。水に
沈めて殺す夢を見た。首を食いちぎって殺す夢を見た。殴り殺す夢
を見た。心臓を食われる夢を見た。頭を潰して殺す夢を見た。泣き
叫ぶ彼女を殺す夢を見た。笑顔のまま死ぬ彼女を見届けた。

何度も、何度も、何度でも、夢を見る。

??

「なるほどなるほど、やはり君がランサーのマスターというわけだ。
いやあ、何度見ても恐ろしいね」

「——あ？」

真昼間からそんなことを行ってくる相手に心当たりはない。愛歌を伴わず、カルナも愛歌の傍に置いて用事を済ませるために外出していれば、そんな戯言を後ろから投げられたので反射的に振り向く。

視界に映る黒いスーツ、白い長髪、紫の瞳。胡散臭いことこの上ない表情を貼り付け、その異様な存在感を漂わせるのは玲瓏館のサーヴァントに違いなかった。

サーヴァント、キャスター。真名は不明、その出自も願いも何もかも不明。玲瓏館のサーヴァントであることは判明しているが、それは同時にセイバーの同盟者である可能性もあるということであり、必然的にカルナを呼ばなければ不味い状況に陥ったことを意味する。

令呪を使ってカルナを呼び出して街と人の被害を考えずに一撃。それで終わらせることは可能だが、あまり取りたい手段ではない。街の被害は今更とはいえ、無関係の命を無作為に散らすのは倫理的に駄目だろう。

「まあまあ、私は君と争うために来たわけじゃないから落ち着き給え」「なら何をしに来たキャスター。馴れ合いはセイバーとやっていけばいいだろう。それともランサーとも同盟を組みたいのか？」

「まさか。可愛らしい女の子と覗き見してきていたし、こちらも君を見定めておきたかったのさ。私は聖杯戦争で勝つことは出来ないし、最も勝者に近い存在が如何なる者かを気にするくらいは許されてもいいだろう？」

勝つことはできないという言葉に眉を顰めるが、嘘を言っているようには見えない。諦めているというよりは事実を淡々と述べている姿に言いようのない気色の悪さを覚えるが、まあ悪意はないようだし話くらいは聞いてもいいかもしれない。

ため息を吐いて上機嫌なキャスターの横を歩く。この容貌で悪目立ちしないのは魔術による隠匿なのだろうが、やはりなんというか胡散臭い。

なんというか、現代に慣れている感じがする。カルナは割と物珍しいという様子で色々と視線を動かしていたものだが、これにはそれが

無い。そこにそうあるのが当然といった様子で歩いている様はなんというか、そう——単純に気持ちが悪かった。

「立ち話もなんだし、カフェでゆっくり話そうじゃないか」

人混みを掻き分けて歩く。害意の無い相手は無駄に警戒するのも馬鹿らしいし、まあ個人的な所感には抜きにして考えると別陣営の情報を得られるのは悪いことではない。

まず、セイバーとそのマスターについてはあまりにも謎が多い。

愛歌曰く少し魔術を齧った一般人らしいが、遠見で視認した時に感じたのは言葉には言い表せないズレだ。バーサーカーのマスターらしい少年とは違う。アーチャーのマスターとも違う。自分とも違う。

どこか根本が違う、ズレている。そんな違和感。

「お待たせ、連れてきたよ藤丸くん」

「藤丸くん……？」

カフェのドアを開けて店内に入ればキャスターが大袈裟に手を振り、奥の方の席に腰かけた少年に声をかける。黒い髪、少し特徴的な黒いシャツと白いズボン。この季節、割と寒さに強い自分がコートまで着込んでいるのにシャツと壁にかけてあるシャツだけで動いているのだろうか。いや、考えるのはそこではない。

藤丸、藤丸でこの容姿といえばセイバーのマスター。見れば見るほど何かがズレている。隣の席に腰掛けるセイバーよりもずっと、この少年は特異な存在な気がする。ああ、だがそれ以上に——、

「キャスター」

「なんだい？」

「今ここで死ぬかあとで死ぬか、好きな方を選べ」

身体の内側で魔力が唸る。背中の令呪が熱を帯びる。返答次第ではこの場でカルナを呼んでその瞬間に宝具を解放させる。店内に人がいる気配はなく、周辺からすらも人の気配が無くなっているこの状況。間違いなくこここそと手を回している。

この場でその手の小細工が弄せるのはキャスター以外にはおらず、セイバーが待機しているこの場に招き入れたのはそういう事なのか。恐らく戦闘を望んででは無いのだろうが、それでも万が一はある。

欠片でもやる気があるなら殺す。キャスターを殺して聖杯に焚べることでも一歩、そのままセイバーも殺して更に一歩。予定が少し変わるだけで、隠蔽する役割の人間が困る程度だ。いや、そう考えるとどう答えようがここで終わらせるのが早いのではないだろうか。

ニヤニヤとこちらを見つめるだけのキャスターを見て、それでいい気がしてきた。

「ちよつと待って二人とも、ストップストップ！」

「あ？」

「こちらに争う気はないんです。マーリンが紛らわしくてすみません。でも、今日は本当に話がしたくて待っていたんです」

その言葉に嘘があるように思えなかった。その瞳に揺らぎはなく、ただ誠実なだけであると見るだけでわかってしまう。ああ、なるほど。セイバー、騎士たちの王。ブリテンに語られる英雄譚の主人公を従えるのも納得だった。

「……聞こう」

「ありがとうございます」

一つ、奇妙な確信があったから頷いた。頭を下げる少年の前に腰かけて、隣に腰かけてきたキャスター、マーリンを横目に見る。

これがマーリン。アーサー王伝説に登場する魔術師、千里を見通す目を持つ冠位。聖杯戦争に勝てないというのは彼の王であるアーサー王がセイバーのクラスで現界しているからなのだろうか。確証はないが、その可能性が高そうだ。

「話ってというのは？ 玲瓏館と同盟を結んだ上でこちらとも結びたいとかいう話ではないんだろう？」

「えっと、その、これから話すことを落ち着いて聞いてもらえますか……？」

「よく分からん質問だけどわかった。取り乱して遮らないと約束しよう」

嫌な空気が場を占めている。セイバーは我関せずと言わんばかりの姿勢を崩してこちらを見ており、マーリンは目の前のカップをつついて遊んでいる。

「俺は藤丸立香って言います。端的に言うとも未来から来ました」

「なるほど、坂上真人だ。よろしく頼む、未来人殿」

未来、彼は未来から来たというか。なるほど。

「えっと、信じてもらえるんですか？」

「知らん。話を聞く上で君が未来人であることを認めておくだけだ。ほら続きを話してくれ」

未来から来たなんて世迷言、信じられるはずもない。ましてや敵対状態にあるマスターの言葉なんて聞く耳を持つべきではないことくらい、素人の自分でもわかる。

けれど、どうしてだろう。この少年は嘘を吐くような人物ではないと自分の中で確信と納得がある。

不思議な感覚だ。頻発するデジャブとは違う何か。自分の中で未知を既知と感じるのではなく、既知の物ごとをそのまま確認しているような言いようなない感覚。

端的に言って、気持ちが悪かった。

「この聖杯戦争は未来を捻じ曲げてしまおうんです。何かあるのかとか何が悪いのかまではまだ分からないんですけど、このままいけば確実に未来が変わって、最悪人類史がそのまま滅びます」

「——人類史が滅ぶ？」

「はい。きつとこんな風に説明しても伝えきれない自信はないし納得するのは難しいと思うんですけど、このままこの特異点があると人理が保てないんです」

それはおかしな話だ。人類史は人理によって、抑止力によって守護される形で歩んでいる。今この瞬間でさえ、人類は安全なルートを歩んでいるはずなのだ。

そもそも、彼が未来から来たというのならば一つ、有り得てはならない矛盾がある。

「仮に君が未来から来たのであれば、この時代は既に過去のもの。過ぎ去り、踏破したものであるはずだ。その過去が未来に牙を剥くのはおかしいと思うが」

「疑問は最もだと思えます。でも事実としてこの東京は異常な事態に

陥っていて、放置することはできません。でも、未来から何かを誰かが過去を改変する為に何かを送り込んだなら話は別だと思いませんか」

「……それが聖杯だと？」

「おそろく」

「頭の痛くなる話だ」

つまり聖杯は異物らしい。未来から過去に現れ、過去から未来を脅かすもの。それを彼がどうするつもりなのかは、まあ聞かずともいいだろう。

問題は聖杯を手に入れるに当たって発生するデメリットだ。

未来が危ういということは愛歌の未来を何とかしても世界そのものが危ういということだ。本末転倒と言ってもいい。

しかしなぜ未来が減ぶほどの変化が訪れるのだろう。

聖杯戦争そのものが発生するはずがない事象であったとして、まだ結果は確定していないはずだ。仮に確定しているならおかしな話であり、確定していないにしてもおかしな話だった。

未来が減ぶような事象を抑止力が見逃す道理はない。

「……特異点？」

彼は特異点と言っていたはずだ。特異点、抑止力の働かない地点。歴史に本来存在しない何か。

ならこれを解決されればどうなるかなんて考える必要は無い。

「藤丸立香くん、君は聖杯戦争をどうするつもりなのかを聞きたい。勝ち抜くのか、止めるのか、或いは別の何かか。その話次第で俺たちは手を組めるかもしれない」

「聖杯を回収、最悪破壊して聖杯戦争を終わらせませす」

「……そうか、それなら決裂だ」

席を立てて背を向ける。

藤丸立香、未来から来たという少年。正しい未来を守る役目を果たさんとするカルデアの善き人。こうして背を向けても刃を向けてこないのは本当に、善人らしくて吐き気がする。

気持ちの悪い感覚が消えない。耳元で何かが喚いているが聞き取

れない。
今はとにかく、愛歌のところに帰りたかった。

昼にセイバーのマスターと話した内容の詳細は、愛歌には伝えないことを選んだ。特に深い理由はないがまあ、セイバーといえは自分を殺しに来た相手だしわざわざ伝えて顔を曇らせたくないというのが大きかった。それに何事もない平穏な時間まで聖杯戦争なんてもののことを考えて話をするのは精神的に負担が大きいだろう。オンとオフの切り替えは重要だと思う。

人間は当然として、基本的に生き物は常に全力で走り続けられるようには出来ていない。まあ動かないと死ぬマグロみたいな例外もいるにはいるが、少なくとも人間は休息を取らないと死ぬ。肉体は持たないから休息を必要とするし、それは精神だって同じことだ。ずっと集中して勉強し続けることなんて不可能である。まして、命のやり取りを含むことを考え続けることなんてどれほどの負荷になっているのやら。

そんなこんなで平穏無事に夜を迎えたが、今日こそは安息日。討つて出る！　なんて勇んだ行為は自粛し、部屋でごろごろタイムなのである。

「きもちいい〜……」

「こうかしら？」

「……あゝ あゝ」

背中に乗った愛歌が凝りまくった身体を解してくれる。たまにボキボキなっているのが大変心地いい。とんとんとん肩を叩かれるのも決して痛みはなく、適度な力加減でここが天国かもしれないと思えてきた。

「凝りすぎじゃないかしら？　姿勢に気をつけないと体調崩しちゃうわよ」

「大学の席が硬いのが悪いんだよな、俺は悪くない」

いや、たぶん、悪いのは俺の姿勢何だけど。まあ三年通つても慣れないのは大学の席が悪い。そういうことにおきたいのでしてお

こう。割と古いので硬いのは仕方がないと割り切っているが、ここま
でボキボキ鳴らされると少しショックなのもまた事実だった。

「普段からあまり姿勢良くないんだから気をつけてね？ おじいちゃ
んになった時に困るわよ。それに若くても腰を痛めることはあるん
だから」

「ママ……？」

「うーん、ママではないわねえ……」

そりやそうだ、と軽口を叩き合う。愛歌はなんだかんだでノリがい
い方だ。くだらない事で笑い合えて、大切なことに真剣に向き合え
る。少し怖いところもあるが可愛いものだし、こんな子が悪だと言わ
れても首を傾げざるを得ない。

ただ妙に甘やかしてくる感じはあるし年不相応に大人びた面と容
姿のズレがたまにくるが、耐えられない範囲ではない。うん。やはり
可愛いものだ。

「明日からどうするかなあ」

「大学？」

「そうそう、教授が聖杯戦争とやらが終わるまで顔を出すな。出した
ら殺すぞクソガキとか言ってきたなあ……」

なんで知ってるのかとか殺すとか犯罪では？ とか思うことは沢
山あるが、院進決まってるとはいえ講義サボりまくると単位がやばい
のである。ほぼ足りているが来年わざわざ取りたくもないしこの時
期もメリハリを付けるために通っておきたいところなのだが、あの教
授の様子からして本気で殺しに来そう怖い。

というのもたぶん、あの人も魔術師か何かだ。愛歌から魔術を学
び、カルナや他のサーヴァントを何人も見て肥えてきたらしい目があ
れば普通の人間ではないと結論を出している。よく分からないがモ
ヤモヤしていて、内側にあるのは藤丸立香とやら以上によく分からな
い力だった。正直、友人関係も怖くなってきたが門司や妙蓮寺がアレ
なので今更かもしれない。あいつら人間やめてる次元でキチガイ。

「まあ諦めて明日から昼間は寝るか」

「寝て過ぐすのね……」

「やっぱダラダラするのが一番大事なんだよな。二十超えると体力も落ちるし気分はもやおじいちゃんよ」

「病は気からって言うし気分の問題じゃないかしら」

そうとも言う。というか確実にそうだし今の妙に調子のいい肉体的には変に休息をとる必要も無い。ないとはいえやはりぐーたらしたいのが人の性。何より昼間に散歩して藤丸立香に出会おうと気まずいし、バーサーカーのマスターとやらに出会うのもなんとなく避けたい。バーサーカーのマスターはなんとというか、遠くから見ている感じソリが合わない気がする。

勿論表面的に合わせることはお互い可能だろうが、聖杯戦争を止めたいなんて言ってる奴と必ず勝つと決めている人間では馬なんて合はずがない。下手に情報を与えるのも良くないし、適度に与えて調整するなんて器用なことは出来ないからそもそも関わらないのが正解だろう。

そんなことを考えながら背中にものしかかかって抱き着いてくる愛歌の感触を堪能していれば、甲高い電子音が部屋に響いた。チャイムの音だ。

「……ちよつと出てくるから離れてくれ」

「はーい」

念の為に部屋のドアは閉めてキッチンと直接繋がる玄関に向かう。視界を飛ばして確認しようか悩んだが、態々そんなことをする必要はないという勘を信じて玄関を開けた。

「よう真人、元気か？」

開けた先にあるのは見慣れた顔だった。特徴的なのは赤く染められた頭髮くらいなものだが、顔立ちもそこそこ整っているのは確か。黙っていればまあモテると思うが、酒癖が悪いのと合コン大好き過ぎで諸々を捨てた阿呆なので論外である。あと割かし頭があつぱらばー。

「なんだお前か」

「なんだとはなんだ。せっかく心配して来てやったのによ」

「お陰様ですっかり元気だよ」

「それならいいんだけどよ」

言つて、右手にぶら下げていたビニール袋を突き出してくる。

「一応見舞いの品だ。誰か来てるみたいだし、その人と分けてくれ」

「おお、ありがとう」

「……念の為に聞くけど彼女？」

「ではないな。仲は良好だが」

手を出すのはさすがに不味い年齢だとかそういう墓穴を掘るような話はしない。態々ドアを閉めたのもこういう時に愛歌を見られてややこしい事になるのを防止する為なのだ。こういうところで下手を打つようなことはない。

特に愛歌の容姿は飛び抜けているから知人友人連中に知られたら即通報案件である。

「そつか。じゃあまた合コンする時は呼ぶわ」

「おう、可愛い子を頼む。あとやばいメンヘラは勘弁な？ その辺は上手く見極めてきてくれ」

「この合コン大魔王に任せとき、な……?」

唐突に硬直した目の前の馬鹿に、背筋を駆け抜ける悪寒。視線の先は自分ではなく、背後。具体的にはリビングに繋がるドアの辺り。いやいやそんなまさかと恐る恐る振り向けば、ドアを少し開けて顔だけを出す愛歌の姿があった。

目が合った。手を振られて振り返す。

視線を前に戻す。

「……幼女略取監禁は犯罪ですツツ!!!」

「誤解だ!!!」

「お前貧乳好きだからってこれは幾ら何でもやばいだろ!? 警察署までは一緒に行つてやるから大人しく自首しろって! な??」

「だから誤解だつて言つてんだろが! 幼女でもないし略取でもないし監禁でもねえ!!」

こんなところで騒いでいる時点で通報ものだが、言い訳もでかい声ですておかないと本当にやばい。既に通報されている可能性もあるがその場合は夜にうるさいという理由であることを祈る。

とりあえず首根っこを掴んで部屋に入れる。

テーブルの前に座らせて適当なコップにお茶を入れて出し、対面に胡座をかいて座る。ととととお菓子を持ってきた愛歌が胡座の上に乗る。

裕一の視線に殺意すら籠っている気がするが気の所為だろう。見なかったことにした。

「真人、お前……」

「法律的にアウトなあれこれは一切ないからな」

胡乱な目を向けられても法的にあれなことはしていない。していない。いたらしいない。一緒の布団で寝ても鋼の心で手を出さなかったのだからまだセーフ。ギリギリ首の皮一枚繋がっている。

「お友達？」

「友達だよ。石田裕一、彼女なし歴三年。合コン出る度に振られる数が増える学内一の馬鹿だ」

「……ぐすん、もう帰っていい？」

「まあお茶くらい飲んでいけよ持たざる者」

正直帰ってもらってもいいがこのクソ寒い中わざわざ来てくれたのを放り捨てるのも愛歌を見られた以上はあまり宜しくない。多少のもてなしで軽く口封じである。

ちようどいい所にある愛歌の頭を梳きながら彼女の漁るビニール袋の中身を見る。

「お、ポテチあんじゃん。ビールもある」

「ああ、そのへん教授が振じ込んでたんだよな。金も全額教授持ちだぞ」

「マジか」

教授、教授といえは教授である。名前を前に付けずただ単に教授と呼ばれるだけの人。俺の所属している研究室はその人のところで、ついでに言う俺以外の同期はみんな行方不明になったイカれた研究室だ。

門司と妙蓮寺はどこに消えたのか知らないが、教授はそれを把握している節もあるしよく分からない人だ。

昼間に聖杯戦争終わるまでに顔出したら殺すとか物騒なこと言つてた割に差し入れを他学部の生徒に持ってこさせるツンデレだったらしい。気持ち悪さに鳥肌がやまない新事実発覚である。男のツンデレとか誰も得をしない。

ゴソゴソと愛歌がビニールの中を漁っている。妙なものが見えた気がした。

「ポテチとビールが教授ならお前は何を入れた……?」

「え? そりやゴムだろ」

「やつぱ帰れ今すぐ帰れ女に玉潰されて死んでこいや!!」

「そんな殺生な……あばあ!」

「見舞いでそんなイカれたチョイスがあるか!? バカが3回死ね!

ええい愛歌漁るの中止! 中止!! その袋貸して!」

「あ、見つけたわ。今夜は寝かせて貰えないのかしら……?」

「捕まっちゃうからダメ!」

バカを殴り倒して意識を奪ったが愛歌が顔を赤くしながら冗談か本気かイマイチ分からない調子で言ってくるのを切り捨てる。ちよつと揺らいだとかそんな事実はなかった。流石に14歳に手を出すのは不味い。愛歌の場合見た目も相まってこう、色々と。

即答だったのが気に食わなかったのか頬を膨らませて抗議してくる愛歌を宥めつつ、これからほんとどうしようか悩む。

とりあえず寝ているバカは愛歌に頼んで記憶を飛ばしてもらおうと思うが、割で騒がしくしたのでご近所さんに通報されてしまっている可能性が高い。そして警察が来て男二人に可憐な少女の組み合わせは色々和不味いものしかない。

噂をすればとやらなのか、愛歌からやつとの思いで取り上げて未開封のままゴミ箱に叩き込んだ時、チャイムの鳴る音がした。

無性に嫌な感じがする。具体的には扉を開けたらその先に警察が待ち構えていて即逮捕される未来が見える。いや未来視がある訳では無いのだがなんかこう、状況的にそれが一番濃厚な未来なのでたぶんそうなる。

嫌だなあ、というこちらの心情をガン無視してチャイムは鳴り続け

ているし居ますかー？　なんて声まで聞こえてくる。愛歌ちゃん魔術講座で習った催眠術の出番が来てしまったのが確定した。

「はいなんですかー？」

「近所の方から幼女略取監禁がどうこうって通報がありましたので一応確認ですね。あと夜にあまり騒がないようお願いします」

「いやあ態々申し訳ないです」

若い男とそこそこ年配の警察官たちはまさか部屋の中に未成年の少女がいるとは欠片も思っただろう。一周回って落ち着いた頭がほんとに幼女略取監禁なんてしてたらこんな騒ぎ起こさないうるなあ、などと冷静に考えている。現実には幼女でも略取でも監禁でもないが十四歳の少女が今も部屋でゴロゴロしているのだが。

「……念の為に部屋の中見せてもらってもいいかな？」

「え、ええ、大丈夫ですよ」

たぶんこれ靴見られたなあと思いつつ、ここで下手な手を打つよりも奥に誘い込んで魔術で誤魔化すことを選ぶ。玄関であれこれしてしまうと次が来る可能性が高いため、たぶんこれが正解だと思う。

——ナニカに殺される気がした。

踵を潰すように履いていた靴を脱ごうとして、警官の様子が微妙におかしいことに気がついた。即座に靴をしつかりと履く。

「あ……え、こ、す？」

口から意味を為していない言葉が漏れた。背筋が凍るような気配を感じた瞬間に脳が身体を動かす。

「——カルナア!!」

霊体化していたカルナを呼びながら反転。戸惑う若い警官を無視して走り出せば、直後に肉を握り潰すような音が聞こえた。ああ、これはやばい。焦りを感じながら即座に辿り着いたドアを開けて紙を筒状にして裕一をつついていた愛歌を抱える。カルナが裕一を抱えて窓を突き破りながら脱出したのに続く。

「来るぞ、マスターー！」

「裕一はその辺に放つとけ！　たぶん大丈夫だ！」

サーヴァントらしき気配は二つ。一つ目は警官の背後、二つ目は西

に二百メートル先。クラス等は一切不明。恐らく結託していると思われるため、状況は最悪と言ってもいい。ダラダラする気満々だったこちらはろくに準備も出来ていないし、愛歌に至っては裸足だ。歩かせるなんてことは出来ない為、必然的に俺が抱えておく必要がある。

背後から飛んでくる黒い刃物を回避しながら人の気配がしない住宅街を駆け抜ける。最初の接近にカルナが気づけないとなると、恐らく相手はアサシン。気配遮断のスキルによって家まで寄って来たと考えていいだろう。さらに、援護射撃を行っているらしい矢はアーチャーか。考えうる中で最悪とまではいかないものの、かなり分が悪いと言わざるを得ない。

「クソが……！」

アーチャーの矢は的確に俺と愛歌の進路を狙っており、カルナはそれらを全て撃ち落としていているが、逆に言えばそれ以外の動作を封じられているのに等しい。いつの間にか裕一が手元にいないので捨ててきたのは間違いないが、このやり方だと見つけて人質にしてくる可能性もある。いやまあ、その時は流石に見殺しにするしかないだろうが。

「よくもまあ、人の身でそこまで走れるものだ」

真横から聞こえた声に反射的に愛歌を上放りあげ、突き出されたダークを中心に身体が円を描くように跳んで回避する。着地の手前で愛歌を回収し、地面に足が着いた瞬間にしゃがみながら足を払う。しかしその程度がサーヴァントであるアサシンに通用することはなく、飛び上がったまま振り抜かれた足に顔面を蹴り抜かれた。

「ギヒッ」

「——っ、鬱陶しいー！」

蹴り抜かれた勢いに任せて後方に飛び、空中で後方宙返りを披露してから壁を蹴って跳躍。馬鹿げた速度でアサシンの頭上を飛び越えて矢の雨の中に走りこめば、ちょうど当たるであろうものをカルナが先行して打ち落としてくれる。

「矢を打ち落としながらアサシンをやれるか？」

「それがお前の命であれば成し遂げよう。だが敵の戦力がこれで終わ

ると誰が決めた？」

「……そういうことか」

全く人の気配のない街。降り注ぐ矢の雨。追尾する暗殺者。これだけが今夜の敵の全てであるとは限らない訳であり、矢の雨をカルナが払いながら進む先には星の光が微かに見える。ならば間違はなく、この先に待ち受けるのは星の聖剣。セイバー、騎士王アーサー・ペンドラゴン。明らかに不利な戦闘に向かっていると自覚しても、もう手遅れだった。

「こっちは任せる」

「了解した。武運を祈る」

カルナが細々と最小に留めていた迎撃を最大に引き上げ、矢の雨を一掃すると同時に駆ける。セイバーに向かつてでは無く、余波で後退したアサシンに向かつてでもない。ただ巻き込まれないためだけに真横に駆け抜け、ビル群の谷に走り込む。その間は時間にして三秒ほど。トップスピードのまま複雑に入り組んだビルの谷を走りながら、つい先程までいた場所で迸った膨大な熱量を感じる。

ほぼ間違いなく、1対1の戦いならカルナに軍配が上がるだろう。それだけの強さがあるし、ましてやアーサー王の聖剣はその力を十全には発揮出来ない。聖剣に掛けられた十三の拘束、あれはカルナと戦っていても過半数を満たさなはずなのだ。仮に過半数を満たしたところでカルナが勝つだろうとは思うが、まあ星の聖剣は恐ろしいので発動させないに越したことはない。

それにアーチャーとセイバーは以前共闘した状態でカルナに押されたという事実がある以上、アーチャーがこちらを狙って矢を射る余裕は恐らくない。カルナにセイバーを殺させて離れたマスターを始末するのも考えられるが、その場合はカルナが来るまでに死ななければこちらの勝ちだ。

腕の中で僅かに震える愛歌を強く抱き寄せる。

「悪い、今夜はこのまま落ち着くまで走り回る」

「ええ、私なら大丈夫よ」

現在追われている確証はないが、確実に追われていると思ってい

だろう。おそらくアサシンはマスター狙いだろうし、人質とかも躊躇してやることは無いと思う。警官二人殺してる時点で倫理も自制もあつたものではない。ビル群の間を走り抜けている間も人の気配はしない。そろそろ誰かの気配くらいは感じられてもいいはずだが、一体どれほどの規模で人払いがされているのか。

それにしても、雪が降つても不思議では無い寒さの夜を薄着の愛歌を連れて走るの酷だ。俺は走っているからまだいいが、抱えられているだけの愛歌は夜風をまともに受けて冷える一方だろう。大丈夫とは言つていたが厚着も出来ていないし、後々に響く可能性もある。あまり良くないが一旦止まって俺のシャツを渡すべきだろう。インナーとして着ている半袖一枚でも俺は耐えられる。

脱ぎ着しやすい様に少し開けた場所で速度を殺して止まる。

「羽織るか何かしてくれ」

「……ありがとう」

俺のシャツに愛歌が袖を通したらぶかぶかで、身体のをほとんどを覆うコートのようになった。なんとなく背徳感を感じるのが否めない。さて、気を取り直して走るかと愛歌を抱えようとした時、空気を斬る音が僅かに聞こえて反射的に腕を伸ばして愛歌の顔に突き立つ前にダークを受ける。

「アサシン……っ！」

もう追いつかれたのかと歯噛みする暇もない。左腕から引き抜いたダークで続々と飛来するダークの群れを打ち落とし、接近してきたアサシンと三合打ち合つてどちらともなく距離を取る。左腕からは正常な痛み感覚が伝わってくるが、五感のどこかが狂つたとかそういう気配はない。即効性の毒が仕込まれていた訳では無さそうだ。

そうなる蓄積することで効果を発揮するタイプか、或いは遅効性かそもそも毒なんて無いかという話になるが、仮にもサーヴァントの武器をあまり受けるのは宜しくない。単純に切れ味が良過ぎて複数箇所を傷を負えば失血死するリスクが高すぎるし、ただのダークで手足なんて簡単に落とされる程度のものでしかない。睨み合いながら左腕の血が止まったことを確認して、機能の回復までの時間を計算す

る。

「……ふむ、マスターの言う通りかただの獲物という訳では無いな。であればこちらも相応の手を使うとしよう」

「させるかー」

慌てて踏み出すが、アサシンが懐から取り出した瓶を地面に叩きつける方が早い。僅かに逸れた意識の隙間に飛来する刃を回避するが、瓶の中から溢れた液体が一瞬で気化して視界を覆う。反射的に鼻と口を腕で覆い、アサシンとの間を作るように生まれた煙のような気体から後退することで距離を取る。

けれど、次の瞬間に、選択を間違えたのだと理解した。

ザバーニャ
妄想心音

死を纏う腕が伸びてくるのを他人事のように眺めていた。ただ見えているだけで身体は動かない。麻痺しているとか硬直しているとかではなく、ただ見えていてそれに思考が追いついていないだけ。脳信号が身体を動かすまでの間に回避するのは不可能だ。まだそこまで身体が進化してない。英霊に追いつけていない。

伸ばされた腕が心臓の上に触れてようやく、アサシンに向けて駆け出そうと足が動く。一瞬にも満たない間に収縮した腕に心臓が浮かぶ。あれを潰されたら死ぬと直感で理解する。

だが、あまりにも遅すぎる。彼我の間に致命的なほどの距離がある。ほんの十数メートルが遠い。一息に詰められるだけの距離が遠すぎる。踏み出すのは間に合うが距離を詰めるまでが間に合わない。既に相手の掌に浮かべられた心臓を握り潰されて死ぬほうが早い。それでも諦める訳にはいかない。俺が死んだら次は愛歌だ。それは許容できない。

「では死ぬ、ランサーのマスターよ」

浮かんだ心臓を握られた瞬間に全身が硬直するのを無視して無理矢理動かす。十中八九間に合わないから死ぬが、心臓潰れても一秒動ければいい。完全に油断しきっているなら道ずれにして殺せる。けれど、彼女ならそこに割り込むことが出来ることを忘れていた。

「それはダメよ、アサシン」

「なッ……!?!」

割り込むように愛歌が呟いた瞬間に馬鹿げた魔力がアサシンの右腕を押しつぶす様にして魔術を発現させる。それによって僅かだが動きが止まる。ほんの僅かだが、その隙間があれば詰め切るのには十分だった。魔力の檻に触れないようにしながら真横に踏み込み、光を右の拳に握り込む。

「キ、サマア！」

「消し飛ばやア!!」

仮面の上からアサシンを殴る。固い仮面を砕く感触を感じるが、同時に解放された光がアサシンを殺した感触はない。一応、サーヴァントにも通用するらしいものだったが、たぶん仮面を壊したくらいで回避されたのだろう。その証拠に、未だに心臓を握られていてのを感じる。少し力を入れられたのか苦痛が増すがそれを押し殺してアサシンを探す。

前後左右に気配はなく、それらしい跡もない。血痕は目の前で唐突に消えている。気配遮断は宝具を展開したまま行使できないと考えれば、自前で気配を殺して宝具を維持していると考えていい。何故まだ握り潰さないのか分からないが、恐らく愛歌の仕業だろう。こちらを見て薄らと笑う彼女は先程、特に詠唱もなくアサシンの動きを止めた。

ただそれ以上介入しないということはそれ相応の反動があるのか、或いは制限が課せられているのか。もしくはこれ以上は手を貸さないという厳しさか。まあ反動か制限だろうなど思う。未だに死んでいないのは愛歌があれを抑えているからで、それが無くなればその瞬間に殺されると考えていい。

「やはり先に始末すべきだったか怪物め……!」

「化け物みたいな腕してるお前の方が怪物だろ」

前後左右どこでもないとすれば上かな、と気を配っていたところにダーク持つて愛歌に降ってくるアサシンを止めに入る。振り下ろす途中の腕を掴み、掴まれた腕を起点に遠心力を載せた蹴りを左腕で受け止める。掴んだ腕を離さないようにしながら地面に叩きつける。そのまま顔を踏もうとするが人間とは思えない関節の可動域をしている柔軟性を活かした動作で避けられ、逆に顔に蹴りを入れられそうになるのを額で受けて押し返す。

「有り得ん……!」

「何がだ亡霊!」

顔を掴んでビルの壁面に叩きつける。汚い悲鳴のような呻きが漏れるが、サーヴァントがこんなもので堪えるはずも無いのでそのま

ま顔面を擦るように走り、手頃な大きさのビルに向けて再度叩きつける。呻き声と共に衝撃が壁面に亀裂を生み、老朽化したビルが揺れるのを感じる。当たりだ。これなら上手いこと利用できるだろう。空いた左手で小さな光輪を作る。

「……質量で潰す」

逃げ出そうとするアサシンの腹部に蹴りを入れて押さえ込み、放った光輪がビルの真ん中辺りで巨大化して柱を全て切り落とす。垂直に落ちてくるビルの中にアサシンを叩き込み、巻き込まれないように距離を取る。そのまま愛歌の方に向かって走り、抱えてーと言わんばかりに両手を広げていたのを抱き上げて加速する。

倒壊するビルが隣のビルを巻き込み始め、隣のビルがその隣を巻き込んで連鎖的に複数のビルが倒壊する。比較的真つ直ぐ落ちたのは最初のもので、他は殆ど横倒しであるため次から次へと壊れていく。倒れたビルが寄りかかる衝撃で寄りかかられた方が斜めに破片をぶちまけながら倒れ、倒れそうにならないものも少しの後押しで崩していく。

崩れ落ちていく瓦礫の中を飛び跳ねながら接近してくる黒い影を視認した。間違いなくアサシンだが、手傷を負っているようには見えないためこの手ではやはりダメだったらしい。そもそもが神秘の塊であるあれに物理はダメかーとちよつと面倒になってきたが、そうと決まれば宝具だけ潜り抜けて殴るしかない。

「……愛歌、宝具はまだ止めれるか？」

「ごめんなさい、最初のあれはとっておきだったの」

心做しかしよんぼりした顔で言うのでそりや仕方ないな！ と声を張り上げて気にするなど示し、ビルの壁面を蹴って上に上がる。途中投擲されたダークが当たりかけたが何とか全て回避し、複雑に入り組んだ路地裏からビルの上を跳び回る開けた地形での鬼ごっこに移行した。こうなると純粋な足の速さよりも正確な着地と跳躍、脚力による跳躍速度と距離が重要となる。更に言えばこちらは抱えられた愛歌が完全にフリーなため、妨害にちよくちよく背後で爆発を起こしているので完全に有利だ。

しかし、このまま鬼ごっこを続けるのは宜しくない。何故ならこちらには肉体的な限界が訪れる可能性を多分に含む生身であるのに対し、あちら魔力さえあればいつまでも動ける上に比較的燃費もいいサーヴァントであるため体力勝負で勝ち目は無い。その上、日の出まで逃げ切っても追われたままでは日中に奇襲される危険性が高すぎる。どこかで撒くか倒さねばならないが、如何せん打つ手がない。

正面からの白兵戦ならまだ勝ち目はあるが、宝具を使われたら問答無用で終わるとするのが非常に辛い。身体能力とか魔術の援護とか無視して心臓握り潰されて終わるのは対策の打ちようがない。心臓の上に触れるのが条件なのだろうが、あれを避けられる身体能力は生憎と持っていないし魔術でも当然止められない。愛歌による強制阻止も不可能となるとこうして逃げ続けるしか選択肢がない。

「限界が見えてきたか？ 諦めろ、ランサーのマスターよ。そうすれば苦しむことなく殺してやろう」

「こっちの台詞だよクソが」

飛んでくるダークを避ける。屋上に露出したガス管の一部を蹴って飛ばし、アサシンがそこに追いついたタイミングで漏れたガスの位置を発火させて爆発を誘引する。そこそこデカイ音と規模で爆発が起こるが、同じタイミングで離れた場所から爆発音が響いて火柱が昇るのが見えた。間違いなくランサーの戦場だろう。気がつけば数キロ離れていて割と驚いたが、この速度で走り回っていればまあそんなるかど納得する。

アサシンとのちまちま戦闘とは完全に次元の違う規模の戦闘だ。これもかなり厄介かつ恐ろしいが、あちらは完全に神話の領域だ。踏み込んだ瞬間に消し飛ばされて終わるだろう。最終的にああいう規模の戦闘が行えるサーヴァントしか残らないのだろうと思うと東京が吹き飛びそうな気もするが、まあ忘れよう。しかし派手だなあ、なんて呑気に考えながら余所見して跳んでたのが悪かったのか、

前を向いた瞬間に霊体化を解いて現れたバーサーカーに顔面を殴り抜かれて吹き飛んだ。

「づ、ああ……!？」

道路に体制を崩したまま落ちれば腕の中の愛歌に被害が及ぶため、気合で立て直して両足で着地。鼻はほぼ確実に折れてるし他も折れてるか罅が入ってそうだが痛みも出血も無視してここぞとばかりに忍び寄るアサシンから逃れるために跳躍する。着地した場所に突立つダークを見て勘に任せた行動も馬鹿にならんと再認識して、再度宝具を解放しようとしている姿を視認する。

「ギヒッ」

「クソつたれがアー！」

阻止は間に合わない。腕の布を取るまでに詰められる距離ではないし、これから伸ばされる腕に敢えて接近して懐まで潜り込むにしても三十メートル以上離れていては直線の路上でも詰めきれない。急いで距離を取る中で布が外れる。禍々しい魔力と共に悪魔の腕が露出する。

「宝具——」

ザバーニヤ 妄想心音、と。必殺のそれが起動する直前で嵐のような荒々しきで

黒い何かがアサシンに向けて突っ込んだ。

「??? ツッ——！」

「邪魔をするなバーサーカー!!」

解放直前の硬直の隙を突いて殴りかかったそれがそのまま乱雑に顔を掴んで何度も地面やその辺の壁に叩きつける。一方的な蹂躪に見えるが実際は大したダメージにはなっていないだろう。しかし宝具を中断させてくれたのは有り難い。ありがとうバーサーカー、先程顔を殴られた分はこれで許しやってもいいかもしれない。それはそれとして纏めて死んでくれというのが率直な感想だが、だからといって殺しに行くよりはそのまま離脱するのが利口だろう。

焦って今日決着をつける必要は無いし、家に帰る訳にも行かないから明日というか今日からの拠点を探さなくてはならない。時刻は深夜を回っているが、完全に落ち着けるまではあと六時間ほど無人の街を走る必要もあるかもしれない。かなり厄介な話だった。ついでに言えばカルナがセイバーとアーチャーを相手にしているが、セイバーと同盟を結んでいるキャスターは何をしているのかが気がかりだ。

かなり距離を開けたが、空を舞うバーサーカーの姿を視認できる。未だにアサシンと格闘しているようだがさつきと相打ちでもし欲しい。カルナの方も派手に続いているし、いよいよ朝まで終わらないだろう。

まあ受けた傷は軒並み治療されて治っているが、正直これ以上の鬼ごっこは勘弁して欲しいところなのでキャスターに出てこられると困るし、あれはアサシン以上に厄介な気しかしないので会いたくない。完全に動向の分からないライダーは会ったら即死がほぼ確定なので完全に運ゲーなので祈るしかない。どうか出会いませんようにと願いながら、せめて少しでも人がいる場所を探してビルの上を跳んで十数分、異常に気づく。

「……どう、なってるんだこれ」

街に人の気配が全くない。正確に言うなら、見渡せる範囲内である四方数キロ圏内において一切の人間が視認できない。家の中で電気を消して寝ているならまだ分かるが、試しに見に行ったコンビニはどこもレジに人が立っていないし、車は路上に不自然に止められていたりエンジンが着いたまま放置されたりしている。人払いかと愛歌に聞いてもこれは違うと返ってくるし、何らかの異常が発生していると考えていいだろう。

アサシンに追われながら崩したビル群も一帯に誰一人として人がいないと判別できていたから崩しまくった訳だが、もしかやこれ超広範囲で人がいないのだろうか。そうなると消えた人はどこに行ったのかという話になる。詳しく調べるか悩みどころだが、抱えたままの愛歌の格好は一枚羽織らせたとはいえ薄着であることに変わりはないし、少しとはいえ地面に素足で触れていた為に奪われた温度は長引かせると後に響く。

「……適当に宿探すか」

「受付の人がいないと入れないんじゃない？」

「……………ら、ラブホならいけないこともないかもしれないけど決して手を出すつもりは無いのでそこはしっかりと配慮しておりますので

はい中学生連れ込む犯罪的行為に関してはお見逃しを頂ければなど思っていますよね僕は清く正しい成人なので犯罪者では決してないのです」

「誰に言い訳してるの？」

「俺の内側に眠る善の心」

まあビルを複数棟薙ぎ倒している時点で犯罪者なのは気にしない。あれはアサシンが悪い。俺は悪くない。よって無罪。しかしこの辺、無人フロントのラブホあったかなあと辛い現実から目を逸らす。幸い何度かこの辺は来たことがあるし利用したこともあるので心当たりは比較的早く見つかった。前で立ち止まって看板を見て値段を確認するが、愛歌が持ち出してくれていた財布の中身で足りそうなのを見てほっとする。いや、今も尚この子を連れて入ることに対する罪悪感で胸が苦しいので寧ろお金ない方が良かったかもしれない。

目を輝かせてどの部屋にするか考えている愛歌に少し頭痛がした気がするが気の所為ということにした。少し悩んだ末にここにしましよと指を指されたのはビジネスホテルに近い割と普通の部屋だったので快諾。これで変なSM部屋とかショッキングカラーな部屋とかマニアックな部屋を選ばれると困っていたが、何とか首の皮一枚繋がった。いやまあ連れ込んでる時点で首跳んでるとかそういうのはなしで。

「初めて来たけど面白いわね！」

「そうか？ まあ一日限りと考えるとありかもな。でも明日からは普通のホテルかネカフエ暮らしがしてえけど年確厳しいしホテルかなあ……」

ホテルとなるとビジネスホテルでも連泊すればそこそこ値が張るし財布事情的に大丈夫かどうか不安だ。沙条邸を利用したくなるが綾香ちゃんと広樹氏を巻き込んでしまうのは気が引けるし、人質に使われる可能性を考慮すると選べない。どうしたもんかと思うが、まあ起きてから考えようと開き直る。

衣服に着いた血は愛歌が魔術で取り除いてくれたのでシャワーを浴びて汗と血を流し、歯を磨けば寝る準備は完了だ。鼻歌を歌いなが

らシャワーを浴びてバスタブに浸かる音を一から十まで全て聞きつつ、軽くストレッチをして身体を解す。両足を揉んでしつかりとケアし、肩を回したり力を入れてから脱力したりする。腕も指先までしつかり解したり揉んだりして一通り終えた頃、バスタオル一枚の愛歌が顔を赤くしながら戻ってきた。

「……え、えっと、その」

「ほれ、忘れ物はこれだろ？ 着てから戻って来いよ？」

「むー……」

「髪は乾かしてやるからそれで許してくれ」

問答無用とバスローブを押し付ければ頬を膨らませながら一旦戻り、直ぐにそれを着て戻ってきた。好意を向けられるのは素直に嬉しいが、ちよいちよいませたムーブをしてくるのは心臓に宜しくないので誤魔化せて良かったと思う。ドライヤーで髪を乾かしてやれば擦ったそうにしながら不満げだった表情がふにやっと柔らかくなった。

「乾かしたら寝るけど大丈夫か？ 今夜のうちにやつとくことがあるなら起きとくけど」

「んー、疲れちゃったし寝ましょー」

「はいよ」

水気を綺麗に飛ばして乾かし、一つしかないベッドに横になる。くつついて寝るのを考えるとちよつとあれだが、鋼よりも遥かに硬いこの理性であれば耐えられるだろう。横を向いていたため目の前に来る形になった愛歌が身体を擦り寄せて来るのを黙って受け入れる。甘い香りが鼻腔を擦った。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

さつさと寝息を立て始めた愛歌を眺めながら念仏を頭の中で唱えること二時間後くらいで俺の意識も暗く落ちた。

A c t i l l P r a y e r

夥しい数の死体が積まれている。これは殺して積んだのではなく、殺していたら気がついた時には積まれていただけの死体の山。目の前には、未だに殺戮を続ける男の背中。心の内から湧き上がる衝動に身を任せ、もはや戦闘にすらならない虐殺を繰り返す姿は鬼神の如く。

血に染った全身、赤黒い液体を被りながら一切の劣化をしない大斧。日に焼けた肌と黒い髪、爛々と輝く赤い瞳。口から吐かれるのは聞くに耐えない罵詈雑言の数々であり、クシヤトリヤという階級にある存在への怒りと憎悪。ただ、決して許さないから死ねという理不尽なもの。

一振で幾百の命を奪い、冒険しながら進み続け止まらない。立ち塞がる全てを踏み碎き猛進する怪物。それを向かってくるクシヤトリヤのみならず、二十一度繰り返す。

——ああ、ならば彼は。

『そうだ、あれこそがパラシユラーマ。我が師にしてヴィシユヌ神の六番目の化身、聖仙の憎悪に他ならない』

パラシユラーマ。ヴィシユヌ神の化身、俗にアヴァターラと呼ばれる存在の一角。憎悪に駆られる殺戮の聖仙。そもそも聖仙なんて呼ばれる領域は宙との合一すら可能とする傑物、悟りを拓いたゴータマと並ぶかそれ以上の存在だろう。菩薩の規模を考えれば上回ると考えた方が妥当なのだろうか。

ただ、それが怒りと憎悪に吞まれて殺戮を行う様をカルナと共に見せられているというのは確かだった。

『不思議なものだ。この光景をお前と見ることになるとはな』

会話の最中であっても関係なく、悲鳴を上げる無数の人型を一切の

躊躇なく塵殺する。そもそもこちらの会話は届いていないのか。

『所詮は過去の幻影、オレが師に見せられた光景をお前が見ているに過ぎん。あそこにある師の憎悪は過去のもの、怒りは既に過ぎ去っている』

これは生前のカルナが見た光景、パラシユラーマの記憶の欠片。宿敵アルジュナとの戦いとか母であるクンティーとの問答とか、マハーバーラタの戦場とかを見せられると思っただけに、これは予想外だ。それだけカルナにとってパラシユラーマの存在は大きいものだったのだろうか。

『なるほど、そういう捉え方もあるか。確かに師の存在はオレの生において大きなものだったが、この夢をオレとお前が共に見ているということはそういうことではないのだろう。お前には分からないか、マスター』

否だ、わからない。分かるはずもない。パラシユラーマなんて全く関係の無い、カルナの師であっただけの人物を夢で見て、それになんの意味があるのか。

それでも、カルナではない誰かの声がする。言葉の一つ一つが重く、心に染み渡る様に響いてくる。カルナに向けられたそれはまるで神の託宣のように脳髓に刻まれる。そうしながら怒りの果て、憎悪の果て、恩讐の彼方、殺戮の結末を見る。何も残さない空虚な結末を知る。

『怒りを知り、憎悪を知れ。悪徳を学び、悪行を学べ。思いとは、意志とは何であるかを感じろ。悪を知らぬ人は獣ですらなく、悪を知る獣の名をこそ人と言う』

故にここで、その姿を見て学べ。

『遙か遠くにある我が弟子よ。理解したなら去れ。パラシユラーマより学べることなどこの程度のものだ。怒りと憎悪を知り、心の在処を知れ。己の信じる道を歩み続けろ。ボクはそれを見守っている』

◆

昼、目を覚まして直ぐに愛歌を連れてラブホを離れた。幸い認識障害の魔術で人目を惹く様なこともなく、犯罪者のレットルから免れた訳だがそこから何となくで昼食に選んだマックでこういうのが初めてらしい愛歌の口元に付着したケチャップを拭っていると、なんか魔術師っぽい女がアーチャーを連れて来店した。ちようど注文し終わって商品を受け取ったところでこちらを向いた。

視線が絡む。なんか驚いた顔をしている。アーチャーもなんか目を見開いてこちらを見ている。

「あら、お客様みたいよ?」

「寝起き早々かあ……」

『ふむ、やはり運命的なものに好かれているなマスター。ともすればオレよりも数奇な旅路を辿るやもしれん』

お前より凄いヘンテコで引つ掻き回された人生送るのは無理だと思っうんだよな、と念話でそのまま返してやれば唸って沈黙した。まあクリシユナやらアルジュナやらクンティーやらに掻き回された挙句の果てにインドラに鎧持っていかれたのだからこれほど数奇でヘンテコな人生もないだろう。それでブチ切れて怒り狂うとか憎悪するという感情が抜け落ちてるのが恐ろしい。パラシユラーマの言うように心を知って尚あれなのだから極めつけだ。

向かい側に座っていた愛歌が隣に移動し、隣の空席を引つ張って連結。向かい側に二人分腰掛けられるスペースを確保した。カルナは霊体化したままお預けである。なにやらキヤスターまで現れて三対一だったらしく、手傷を負って出て来れないという風に偽造する為なのだ。他意はない。

「おう! ランサーのマスターであってよな?」

「ちよつとアーチャー!?!」

「ああ、散々ちよつかいかけてくるアーチャーはアンタだな？ マスターさんも座って飯を食べよう。話はそれからだ」

ほらさっさと座って食うぞと急かしてやれば存外素直に従ってくれた。マスターの方は慣れているのか梱包をスムーズに剥いて食べ始め、アーチャーはそれを見て感心したように頷いて真似をする。俺は愛歌とポテトをちまちま摘みながらそれを眺め、少ししてハンバーガーを食べ終わった主従がこちらを見ながらポテトを摘み始めた頃に会話を切り出す。

「何か用があつて接触してきたのか？」

「いや偶然だぜ？ マスターがここにしようって決めて入ったらアンタらが居てな。現世つてのも中々面白いもんだ」

喋るアーチャーが嘘偽りを述べているような気配はない。何となく目が苦手という第一印象だが好青年の擬人化みたいな男なので不思議と悪感情はない。気さくな英雄、ペルシャのアーラシュなんてマイナー極まりないが強力なサーヴァントとは少しイメージがズレる。「しかしまあ、その嬢ちゃん連れてよくアサシンから逃げ切れたな？ マスターがめちやくちや狼狽えてたぜ」

「見られてたのか。隠すわけじゃないからあれだが、見てた通り普通に運が良かった。バーサーカーが介入してなかったら死んでたよ」

「それもそうだが現代にまだアンタみたいなのがいる方が驚いたぜ？

アサシンとはいえサーヴァントとまともに戦えるなんてまるで――
――」

「まるで、神代の戦士のようだ？」

「そうだな。それが不思議だ。俺が生きてたような時代ならまだしも、この時代でアンタのそれは飛び抜けてる」

「ちよつとアーチャー、詮索は……」

「んー、まあたぶん神様とやらに選ばれてはいるだろうし忌々しいけど優秀なボディしてるよ。クソ忌々しいが」

あちらのマスターがアーチャーに注意を促すが、既にバレてる相手だしいいだろう。あと大事なことなので忌々しいって二回言いました。忌々しい。ああ、本当に忌々しい。しかしお陰で大いに助かって

いるのは事実なのが本当に憎たらしい。本当に忌々しい限りである。
「俺の目でも殆ど見れないとなると相当な大物だな、アンタのそれは」
「気がついたら押し付けられてていい迷惑だけどなこんなもん」
「そりやそうだ！」

ハッハッハ！ と男二人で笑い、まあ人柄はいいなどどちらともなく握手。首をこてんと傾げる愛歌は愛らしさ100%だがよく分かんない……と眉間を揉むあちらのマスターは可愛らしさの欠けりも無い。いや間違いない善性の人間で容姿も整っているがイマイチこう、タイプじゃない感じがする。

名前は確か何だったかなと先日愛歌に貰った資料に書いてあった名前を思い出す。……エルザ。エルザ・西条。ドイツ人と日本人のハーフ。子供を亡くした過去があつたはずだ。まあ聖杯にかける望みは妥当に子供の蘇生とかそんな感じかな？ どうでもいいやと切り捨てた記憶がある。

愛した誰かのために戦うのであればそれもまた良し。この身もまた大切な者の為に戦う者。譲る気は無く、負ける気もない。確かに強力な英雄を従えているが、恐らくその宝具を使用してカルナを打倒することが可能になるレベルでしかない以上、徹底的にその芽を潰していけば安全に勝てる程度の相手でしかない。油断はしないが過大評価もしないように気は払っている。

「なあアンタ、聖杯に託す望みを聞いてもいいか？」
「んー？」

少し思案に耽ったタイミングで投げかけた質問に、さてどう答えたものかと考える。割と正直に伝えてよさそうだが、藤丸立香の件もある。その辺は濁していきたいのでちよつとあやふやにする匙加減が求められていた。脳内会議を即座に終わらせた結果、胸の内から湧き上がる望みを少しマイルドに伝える感じで行く事にした。

「神様ってやつを殺す。それを俺は聖杯に託す」

定められた道を捻じ曲げ、定められた死を覆し、後に続く未来の繁栄を否定する。多くの命が失われることになるかもしれないし、世界の寿命とやらが縮むかもしれない。でも、それでも、この子を犠牲に

するくらいならマシだと思っからそう願う。そもそも論、最初から定められた犠牲なんて認めたくないだろう。いきなり指さされてお前が死ななくてはなりません！　なんて言われて嬉しい奴はいないのだから。

「まあ下手すると世界が滅びるかもしれんが、そうなったら命一つと天秤に掛けて壊れる世界が悪いということだ」

「……意外と豪胆だな」

「可愛い女の子の為だから仕方ない」

そう言うのと今まで納得するような顔だったアーチャーが一瞬だけ驚いたような顔をして、それから何かを懐かしむようにこちらを見てきた。エルザは難しい顔をして黙り込んだままだが、そういう反応の方が分かりやすくいい。この後にあるはずの本題に向けて頭を悩ませていて欲しい。

「セイバーのマスターから聞いたんだが、一応確認しときたいことがあつてな」

「……おう」

「この東京が特異点になってるらしいが原因は分かるかい？　俺たちは特異点がどうたらを聞かされて悩んでてな」

「聖杯だって聞いたぞ？　俺もまあ、実際聖杯とやらが原因だと思うんだがそれ以外に何かあるのか？」

「いいや、たぶんそれで間違つてないと思うぜ」

そうなると、この主従は今現在も聖杯を手に入れるかどうか悩んでいる最中と言うわけだ。予想だと同盟の話でも持ち出しってくるかなと思つたが、それ以前に世界と願いを天秤にかけて揺れているというわけだ。これはたぶん説得的なあれこれに失敗したら敵になる流れと見た。……正直な話めんどくさいが、悩んでいるということは発破をかければ藤丸立香に対してぶつけられる戦力になるということだ。

ぶつちやけた話、藤丸立香は厄介過ぎる。

何が厄介なのかと言えば戦力的な話もそうだが、特異点がどうこう世界がどうこうという話の上で、あちらは明確に未来を存続するために行動しているという点だ。これは基本的に人類史に対して前向き、

このまま未来に続かせるべきだという者たちである為、サーヴァントに好まれやすいと言える。あのライダー、オジマンディアスですらもそれは同じだ。そうなる場所でアーチャーの主従を逃せば最悪の場合六対一の状況すら有り得る。

そうなると流石に勝てないだろう。せめてアーチャーともう一騎、味方になるか落ちるかはどうでもいいが相手の戦力を削っておかねば勝てない。あのアサシンが素直にあちらの味方になるのか、バーサーカーは理性がないからどうなのかとかあるが、マスターとて未来をチラつかされればそちらに傾くだろう。アサシンは不明だからともかくとして、バーサーカーの方のマスターはたぶんダメだ。

しかし最大の問題は俺の言動でこの女性を説得することが出来る気がしないことである。基本的にそういう話術は下手くそだと太鼓判押された過去があるし、実際否定のしようがない。ちよつと相手のことを知識として知っていてもどうにもならない事はある。

「……真人が私に黙ってセイバーのマスターと会ったのは後でお話しましょうね？」

「はい……」

「それで可哀想なお姉さんにお話があるのだけれど」

「えつと、何かしら……？」

愛歌がなんとなく怖いので黙って話を聞くことにした。カルナから呆れたぞという思念が飛んでくるのを黙殺する。怖いものは怖いのだ。

「聖杯を手に入れようとしてるのはセイバーのマスターも一緒なんでしょう？」

「手に入れようというか、彼の場合は回収してこの特異点を終わらせる気みたいだけど……」

「それって聖杯で願いを叶えてからじゃダメなのかしら？ 例えばだけど、百万円が欲しいと願っても後世に大きく響く様なことはないでしょう？ 聖杯自体が問題なら起点になる聖杯の在処なんて直ぐに分かるはずよ。だから聖杯がそこにあるだけで特異点にはならない。聖杯によって叶えられる願望の方に問題があるのだと思うわ」

「それは……でも、もしそうなら勝つても誰も叶えられないじゃない」「どうかしら？　問題の無い願望、より善い未来に続く祈りが無いなんて誰も決めてないでしょう？」

じわじわと、毒が回るように彼女に自分の願望を見つめさせる。聖杯戦争なんてものに参加している時点で、彼女は聖杯に託さなくては叶えられない望みがあったはずなのだ。参加権を手に入れるために必要な条件を満たすほどの強い願望と運。相応しいと聖杯に認められなくては参加出来ないのだから。

しかしこう、惑わすのが上手いといふかなんというか。自分やカルナのような馬鹿で口下手な男と可憐で口も達者な愛歌。男と女の差にしてはあれなので、単純に地頭の差が出ている気がする。聖杯を巡る問題の本質を避けて、あくまでもお前の願望を捨てるのか捨てないのかだけで話を進めようとしているのは自分には出来ない事だから素直に尊敬する。

「時間はたっぷりあるわ。思う存分悩んで、次に会う時にはどうか貴女の答えを聞かせてね？」

最後にそう告げて、手を取って立ち上がる。これ以上は話をする必要も無いと言外に示して店を出ようとする愛歌を慌てて少し引き止めて、トレーをちゃんと片付けてから店を出た。

聖杯戦争とそれに纏わる話、世界の未来すら絡んでいるときさほど歳の変わらない少年から聞かされた來野巽は燃えていた。もちろん物理的なそれではなく比喩的なもので、しかしながら彼の心は純然たる正義に燃えていた。

「手を貸してくれバーサーカー」

「それが君の望みであれば」

自身が友達と呼ぶサーヴァントと決意を共有したものの、最初から最後までを鵜呑みにした訳では無い。当然信じられない話もあった。だからこそ昨晩は思わず飛び出してしまったバーサーカーの介入のみで留め、ランサーのマスターを狙うようなことはしなかった。しなかったが、寝て起きてみれば、世界を滅ぼしても構わないなんて言う男を見てしまった。

何処からどう見てもランサーのマスターで、サーヴァントは昨日の今日で疲弊しているはずだ。連れている少女は可憐な花のようで、どうして彼と行動を共にしているのかは分からない。出来れば危害を加えるような事態になりたくないなと思いつながらその後を尾行し続けること数時間、日が暮れた瞬間に無人となった秋葉原の路上のど真ん中で佇む男と少女の前に立つ。

「話がある」

「……バーサーカーのマスターか」

視線が絡む。敵意すら滲ませた視線に一步後退りしかけるのを必死に堪えた。隣ではバーサーカーが険しい顔つきで男を見ているが、英霊が放つ気配を直に受けても彼が気にした様子はない。

「俺は聖杯戦争を止めたい。アンタも聞いたんだろ、聖杯はこの時代にあつちやいけないものだって」

「それで？」

「多くの人が犠牲になるんだぞ!!」 ただでさえ街は壊れて色んな人が

困ってるんだ！」

「ここは特異点だ。解決されれば全てなかったことになる」

だから気にしなくていいんじゃないか？　なんて至極真面目な顔で言ってくる男の気が知れなかった。

「まあでも、それで言う俺は被害者だよ。降り掛かった火の粉を払ってるだけだし、無関係な人に手を出してはいない」

「それは……」

「というか俺の前に顔を出してそんなことを言うってことはさ、決裂した時は殺し合いに来たってことだろ？　あんまり好きじゃないけど手間が省けて助かるよ」

ほら、バーサーカーをその気にさせろよなどと平気で言ってくる。取り付く島もない態度、お前と問答するのは時間の無駄だと言わんばかりの姿。そうじゃないんだとそれに腹を立ててつつも冷静なままの状態を維持し、最後まで説得を諦めようとしないうマスターをバーサーカーは好ましく思う。

実際、相手の態度はどことなく小馬鹿にしたようなものだが、彼の決意は覆せるようなものには無いだろう。サーヴァントとまともに張り合えるだけの化け物じみた身体能力、あのランサーをまともに従えるだけの魔力。どちらも規格外と言っている。ここで争うことは避けるべきだ。

けれど、坂上真人は明確に殺意を向けている。

「何か言うことは無いのか？　世界の平和のためとかそういうの……ないか。ああいや、それならいい」

バーサーカー、ジキルはその言葉が吐き出された瞬間にマスターを押し退け、人間の拳を腹部に受けていた。

その本領を發揮しておらずとも彼もまたバーサーカーの靈基を与えられた存在。身体能力に枷はあるが頑丈さで言えば人間よりは遙かに固い。その腹部にめり込む拳は固く、生身の人間がまともに受けていれば中身が壊れていただろう。

「っ……！！」

「庇ったか」

完全に口で言っているだけで殺す気しかない。少しずつ狭くなつていく意識を認識しながら、彼の背後で虫でも見るような目でこちらを見る少女を見た。

骨の折れる音がした。



「という話があつたんだ」

「そりやまた随分と呆気ないな。最初に脱落するのはアサシンかと思つてたからちよつと驚いたぜ」

「マスターが良くなかったな。どこか浮かれてるような感じだったし、元々は巻き込まれただけの一般人だったんだろうよ。その割には魔眼持ちだったが……」

まあ大したもんじゃなかったなー、と軽口を叩きながらサンドイッチを放り込む。実際魔眼は少し鬱陶しかつたが無理矢理抜けられる程度だったし、正義感の強い少年だったなあというのが感想の全てだ。それ以外の全てが欠けていた哀れな被害者でしかない。決意はまあ多少あったのだろう。しかし覚悟と力が致命的に足りていなかった。不転の覚悟、危機を脱する力、折れない心、立ち上がる強さ。他にも挙げればキリがないほど不足していて、それ故に俺の前に立つべきではなかったと言わざるを得ない。

こちらとしては生身の人間相手に殺しきれるとかどうかの確認にはなつたし、人を殺した嫌悪感はあるがそれを後悔したりトラウマにしたりすることは無いのが分かつて万々歳だ。ついでに寢床もいいホテルの二人部屋確保出来たのでぶっちゃけめちやくちや気分が良かった。昨晩はビジネスじゃないホテル、最高ー！ と叫びそうだった。沙条家の経済事情がとても豊かなことに感謝。

「そちらのマスターさんはまだ煮え切らないか」

「だから俺だけで会いに来たんだが、いいのか？」

いいのか？ という問いはサーヴァントも護衛に付けず、相棒の愛歌をホテルに置き去りにしてこうやって秋葉原で適当にアーチャーと飯を食っていることに対してだろう。仮にも敵対したことのある相手のサーヴァントと直接会うのは確かに危険な行為ではあるが、そこは相手への信頼というべきか信用というべきか。少なくともドンパチやる気はなさそうだし、今回話し合うべき内容的にもこれでいいと判断している。

「愛歌は調査で疲れてる。俺と愛歌なら俺の方が襲撃された時に生き残れるし令呪もある。それにアーラシュ・カマンガーはそういうことをするタイプじゃないだろ」

「——こりや驚いたな。そう言われたら言い返せん」
「というわけで本題だ」

アーラシュ・カマンガー。古代ペルシャにおいて生まれ落ちた正真正銘の英雄。その在り方は正しく英雄であり、その英雄譚の終わりは大陸を割く一矢の反動による自壊だったという。なんともデタラメな英雄だ。だが、だからこそ今回こうして話し合うことが出来るというのだから不思議なものだ。

「街というか東京の住民が消失する現象を確認した。目の前で消えたから間違いない」

「こっちは東京の外がないことを確かめたぜ。出ようとすると境界を越えた瞬間に境界の手前に立ってた」

「完全に隔離されてるわけか」

「いや、境界の中しか世界が存在しないと言う方が正しいな。この時代、この時間軸の東京全体で特異点として完結してる。出るには解決するしかないと思うぜ」

予想通りの結果と言えばそこまでだが、まだ引つかかるところがある。東京から出られないのはいい。特異点としてここまでは分かっていたことだ。しかし、人が消える現象は意味がわからない。アーチャーに確認するが、唐突に消えて唐突に現れたらしい。仕組みは不

明とのこと。

「……アーチャーも分からないか。そうすると無理だな、情報が足りない」

「お前さんらでも無理となると情報収集からしつかりやらんと無理そうだな」

「ああ、こちらとそちらで消えたタイミングが異なるのは解せない」

アーチャー曰く、人が消えたのは午後十時過ぎ頃。俺の視界から人が消えたのは午後八時頃。これまでも似たようなことは多々あったらしいが、どれもこれもバラバラで整合性がない。サーヴァント同士が交戦を始める、または一定の時間になったら消えるのかと推測したがそうでは無いようだし打つ手がない。

昨夜の消えたタイミングに関してはバーサーカーとそのマスターに話しかける五分ほど前だったはずだ。更にいえば、アーチャーがいた方面では普通に人が活動していたという。全地域ではなく局地的に人が消える。アサシンに襲われた時は極めて大きな範囲で人が消えていたが、この差はなんなのだろうか。それとも、昨夜もかなりの範囲で消えていたのか。

「……ダメだ、埒が明かん。やってられっか!」

理屈が通らない。そもそも人が消えて何事も無かったように次の朝には現れて世界が維持されてるのがおかしい。特異点は抑止力による修正が成されない世界だ。つまりこの現象を成立させるなら中で帳尻を合わせるしかない。そうすると何者かは今現在もこの閉じた世界を維持し続けているということになるが、今度はそれがどこの誰で何が目的なのかという話になる。

「なんかこう、怪しいヤツ見てないか？ 如何にも企んでますよみたいなやつ」

「見てないぜ。強いて言うならアンタが一番怖いが……」

「回りくどいことするくらいなら願い叶えて終わりだよちくしよう」
「そうなるとお手上げだな」

はあ、と溜息を吐いてストローに口をつける。音を立てて残り少ないコーラを飲み干し、再度ため息を吐いて頭を抱える。藤丸立香は多

分違うし、玲瓏館も外れ。バーサーカーの陣営は脱落、アーチャーのマスターはそういうタイプじゃない。ライダーの陣営が一番臭いが、あの偉そうなフアラオはそんなことをするタイプではないだろう。

そうなるかと消去法でアサシンだが、そういえばマスターが不明のまままだ。前に貰った資料でも不明のままだったし、明らかになっていれば教えてくれているだろうから今も尚不明なのだろう。つまり一番怪しい。何が怪しいって事ここに至ってマスター不明なのが怪しすぎる。

「……今日はアサシンを探すか」

「手伝おうか？」

「いや、アンタはエルザさんと一緒にいてくれ。まだ正式に同盟を結んだわけじゃないし、あの人がまだ悩んでるならアドバイスしてやってくれた方が有難い」

「敵対するようなことを言うかもしれないぜ？」

「その時はその時だろ。俺の見る目がなかったただけだ」

これは甘言で主を惑わす類のやからでは無い。至極真つ当に、必要となるであろう言葉を投げかけて心の底にある答えを引き出せるだろう。なぜなら会話していて楽だと感じられるから。察しが良く、必要なことを述べ、悩みの表面ではなく本質を解決しようと語りかける。こういうのはよく相手を見ていてそれを分析できる人間にしか出来ない事だし、そこに邪な雑念が混じらないとなると教授のように人を導くことも出来るのだろう。

力も知恵もあつて心もある。まさに完璧な英雄だ。

「もう夕方だし、俺のお前への隠しきれない羨望が爆発する前に解散しとくか」

「おう、またな！」

たぶんまた明日呼び出すと思うとだけ告げ、そそくさと店を出る。異様に冷えた風が暖かい店内から出た身体を冷まし、なんとなく冬の空を見上げた。

透き通るような青い空だった。

日の暮れた街を歩く。人混みはいつもと変わらず雑多で、色んな国籍の人達が歩いているのが視界に映る。そこには酔った者も少なくなく、歳若い男も老いた男も等しく平穏な夜を過ごしていた。平穏、そう平穏だ。サーヴァント同士の争いもなく、危険な気配は欠片もない平和な街。連日慌ただしくしていたからか、隣に愛歌がいなかったら。少し寂しいと感じる。

『特に変わった気配は感じられん』

「やっぱり散歩気分で行くしかないか」

アサシンが釣れるかどうかは完全な賭けだ。そもそも気配遮断のスキルがある以上把握するのは困難な上、単独で動いて釣り出すのはあの宝具を考慮すると選べない。出し渋るタイプではなく、殺せる時に出せるものを出し尽くして確実に殺しにくるタイプの相手に致命的な隙は与えられない。

カルナが霊体で待機している以上アサシンと遭遇できる確率は大きく下がるため、どこかで交戦したのを見つけた瞬間に襲撃する形が理想だろう。ノコノコと姿を見せてきそうなのはセイバーとライダーだろうが、ライダーが自分から出てくるところを想像できない。なんかやらかしたらぶち殺しに出てくる気がするが、そうじゃない限り何処かでふんぞり返って眺めているだろう。たぶん。

前は確かキャスターが煽りまくったから前に出てきたとかそんな感じだった気がするが、今の彼らの関係はどうなっているのか。同盟を組まれていたら極めて厄介なので早めに情報を得たいのだが、如何せん藤丸立香の動向が追えない。キャスターによる妨害があるらしく愛歌でも追い切れないらしい彼の動向が最も危険なので、出来れば早期に始末したい。

『自分の感情に素直に向き合えるのは美点であるが欠点でもある。お前の焦燥が行動に現れることがないように細心の注意を払え』

……ああ、理解した。ありがとう、カルナ。焦ってもいいことがないし、落ち着いて順番に処理していくのがいいだろう。まずアサシン探してそのマスターを暴くこと。その次は状況によって変わるが一騎ずつ落としていって、最後にアーチャーを残す形が理想となる。彼らが必ずしもそこまで残るとは限らないが、可能性は高いだろう。

『今一度お前の願いを問う。お前は聖杯に何を祈り、何を為すのか』
「運命の破却を。彼女の未来の保証を願う」

『その為に幾千幾万の犠牲を払ってもか』

「そうだ」

今更すぎる話だ。きつと大勢殺すことになるだろう。未来で救われるはずだった命が失われることもあるだろう。この世界が特異点となっていてというのなら、自分の願いの果てこそが結実してはいけない悪なのかもしれない。願いを叶えた果てに世界が閉じて終わり、なんてオチも有り得るだろう。

でも、それでも、成し遂げなければ何も変わらない。

ここで折れてしまえば沙条愛歌を殺しておしまいだ。全ては恙無く回り、未来は確約されるだろう。邪悪は絶たれ、光に満ちた明日が訪れる。それは唾棄すべき結末だ。それは認めてはならない結末だと、何度だつて怒り狂ったはずだ。罪なき者には幸福を、罪ある者には断罪を。その為ならばたとえ獣に堕ちようとも構わない。

「ならば是非もなし。オレはお前の望みの為に何度でも戦おう。たとえお前が死に絶えようと、その屍をお前の望んだ未来に届けるために」

「お前が味方でよかつたと心底思うよ」

本当に心の底からそう思う。敵だつたら手に負えないほど強いし、味方となるとこれ以上なく心強い。召喚したサーヴァントがこんなめちやくちやな人間に真剣に付き合ってくれる物好きでよかつた。

「——今の貴様がどれほど罪深いかと思って見に来てみれば、なるほど。それほどまでに愚かであつたか」

入り組んだビルの合間、もはやこの路地裏かも把握できてないこ

の暗い夜闇の中で輝く男がいる。褐色の肌、黒い髪、黄金の眼光。古きエジプトの王、ファラオと称される者。サーヴァント、ライダー。真名をオジマンディアス。ともすればセイバーを優に凌ぐだけの力を持っているのではないかと思われる超級のサーヴァントが目の前にいる。

「その、身体は……」

だが、完成された肉体は所々がどす黒い染みのようなものに覆われている。外見すら付着しているというよりは侵食しているような印象を受けるそれは、間違いなくサーヴァントである彼を表層から内部に向かって侵して塗り替えようとしている。それをこのオジマンディアスが、傲岸不遜な王である彼が取り払っていないということは抗う術がないということなのだろう。

「……気にすることではない。貴様を殺し、その後に滅ぼさねばならぬものが増えただけのこと」

「俺を殺すのは確定かよ」

「当然であろう、自ら滅ぼされるべき悪に墜ちんとする愚者よ。今ここで余が貴様を討つことは慈悲ですらある」

「死んだら願いが叶えられないが？」

「貴様の願いの果てを思えばここで死ぬのが幸福であろう。貴様にとっても、無辜の民にとってもな」

「そりやお前の理屈だろ」

「いいや、世界の意思だ。未来へ繋ぐべき積み重ね、死した者たちの軌跡は未来へと届けられねばならない。それは貴様のような邪悪に絶たれて良いものでは断じてない」

ああ、ダメだこいつ。話を聞く気が欠けらるも無い。既にあれの中で話は完結していて、今はその決定事項を述べているに過ぎない。あくまでも罪人を裁く神の如く、その罪を見つめて死ねと告げに来ただけだ。どう足掻いても戦闘になるのは避けられないらしい。

冷静に考えてカルナに相手を預け、距離をとって巻き込まれないようにするべきなのだろう。というかそうしないと一瞬で殺されかねないのだが、どうも囲まれている気配がするし背を向けようものなら

死ぬまで追いかけて回される気がする。しかも宝具を既に使用しているような気配がぶんぶんするし、割と手詰まりかもしれない。

「覚悟は出来たか？——では死ね」

黄金の光が空に輝く。ライダーというクラスに相応しい空を駆ける太陽の船。視認した瞬間に降り注いできた黄金の魔力光を回避するために前進し、同時に出現したスフィックスらしき大型の怪物をカルナに任せ、短剣を片手に持つライダーを視界に入れる。逸話によればあれは単身でも驚異的な実力を保有しているはずであり、精々アサシンと張り合える程度でしかない肉体で立ち向かうべきではない。

「勇猛と蛮勇は異なるものだ、なり損ないの救世主！」

互いの腕が届くまで残り三步もいらぬ距離。握った拳を振るう準備動作の段階で怖気を感じ、踏み込んだ右足を軸にして無理矢理横に跳ぶ。跳んだ瞬間に空から黄金の光がこれまでにない速度で突き刺さり、人工物に固められた地面に人二人分ほどの穴が空いた。いつの間にか増えたスフィックスの攻撃をカルナが払い、俺だけを狙って降り注ぐ魔力光を極力回避して避けられないものだけを手足で砕く。

一つ砕く度に触れた手足に痛みを感じるが、目に見える外傷はない。寧ろ何だかんだと接近を許されないこの状況は極めて拙く、俺が近くにいる為に全力で戦えないカルナのことを考えるとこの場を離れたいのだが、空に輝くあの船をどうにかしない事には離れようにも離れられない。宝具によって撃ち落とすことも可能だが、どうしても生まれる硬直は相手に付け入らせる致命的な隙になりかねない。俺でも届かせられるか、と一瞬だけ空に目をやってから戻せば、視界に移るはずの男がいない。

「……やべっ」

「この身が邪悪に蝕まれようとも、貴様如きなり損ないに遅れはとらん！ 太陽の英雄たるランサーも貴様がいては全力を出せまい！」

声の発生源を追えば、ライダーは太陽の船の上にいた。視界から外れた瞬間に駆け上がり、上手いこと移動されたというわけだ。しかも油断も慢心もなく、確実に俺を殺すためだけにカルナの動きを縛りに来ている。そこまでヘイト稼いだ覚えは無いのだが、どうにも知らな

いところで殺意ゲージが振り切ったらしい。困ったものだ。

魔力が馬鹿みたいに膨れ上がっているし、本気でこの場で決着をつけるつもりだ。あの調子だと霊基が砕けても不思議ではないだろうに、何があれをあそこまで突き動かしているのか。降り注ぐ魔力光を回避しながらスフィンクスによるちよっかいを避けて頭を砕く。即座に再生するが動かれる前に距離をとって安全圏を作る。無限に再生する神獣と当たれば即死する攻撃の雨は少し間違えればそれだけで死を招く為、気は抜けない。

しかしこのまま付き合っても埒が明かない上に鬪り殺されるが、一息に吹き飛ばすには俺が邪魔になる。割とどうしようもないが、ライダー自体は恐らく弱体化していると思われる。よく分からないがあれだけどろどろしたナニカに霊基への侵食を受けているなら、多少の害はあるはずだ。一瞬でいい。上空すら覆い始めたスフィンクスの群れに穴を開け、そこを突破してあの太陽の船を撃ち落とす。「カルナ、船に向かって一発頼む」

「承知した」

——魔力を回す。右腕に滾るそれと同時に、カルナへと供給する膨大な魔力を賄うことで肉体が僅かに悲鳴をあげるのを感じ取る。身体の中が焼けるような痛みを襲われるのを堪え、一瞬の停滞にこれまでにない殺意を以て襲いかかる神獣と光の大群を見据える。恐怖はある。一歩間違えれば死ぬという確信もある。だがやらねばならぬ。

「梵天よ、^{ブラフマ}地を覆え！」

上空に向けて放たれる宝具。眼力が視覚可能になるほどの熱線として放たれたそれは重なり合うようにして振り下ろされていたスフィンクスの腕を軒並み吹き飛ばし、その上から更に降り注いでいた光の雨の全てを貫いて上空に輝く太陽の船と激突する。溜めの短さから完全ではないが故にそこで相殺されるが、それだけの隙間があれば十分だった。

太陽の如き船、メセケテットと呼ばれるそれに向けて直線にできた空白地帯を大地から跳んだ一歩で詰める。

「——ぐ、う」

音を置き去りにした代償に身体が軋んだ。それを無視して太陽の船を踏み台にして更に飛び上がり、夜空に身を投げ出す。だが、特等席の夜景を見る余裕はない。右腕に集めた魔力をそのまま掌に出力して束ねる。これは球のような形に整えるとかそんな高等なことではなく、乱雑に拡散しようとするそれを握り込むことで無理矢理束ねているに過ぎない為に、今にも腕が弾けそうになる。

空から落ちながらそれを手に、光の尾を引いて空に浮かぶ太陽に迫る。苛立たしげなライダーが杖を手に立ち上がって迎撃の構えを見せるが、止まらないし止まらない。だが今の出力で勝てるかと自惚れてはいない。このまま当たれば良くて相殺が関の山だろう。——故に、接触の直前に出力を上げて打ち砕く。

「地に落ちろ、太陽王——！」

「させると思うかア！」

一枚目の障壁と拳が接触し、抵抗を感じる間もなく粉碎する。即座に二枚目と接触するがそれも粉碎。三枚、四枚と壊したところで、五枚目にて漏れ出るものでは砕けなくなった。——拮抗する。黄金の魔力壁と蒼い魔力が衝突して弾けながら衝撃波を撒き散らす。五枚目の障壁にも亀裂が入る。

「消し飛べエエエエ！」

瞬間、内側にある全ての魔力を絞り出す。ある限りの魔力を腕から出力して蒼き光を束ね、奥にあった六枚目の障壁を砕いてライダーを挟んで太陽の船に拳を振り下ろす。右腕が反動でぐちゃぐちゃになった。

太陽の船が光の粒子になりながら地上へ向かって落ち、短剣を抜きはなったライダーが空中に浮かぶ俺の首を狙ってそれを振るう。使いた物にならない右腕を身体を捻って差し出す形で割り込ませ、激痛と引き換えに命を繋ぐ。そのまま胸元を蹴って距離を取り、何とか着地が出来そうかなという所で地上で再生するスフィックスの群れとそれらを蹴散らしながらこちらに向かって飛んでくるカルナが視界に入った。

そのまま抵抗なく受け止められ、片腕で担がれる。落下中も再生中のスフィックスを右手に持った槍で掃討しつつ、俺よりも遙かに速い速度でスフィックスの群れの中に落ちたライダーの前に向かう。これで終わることなどありえない。絶対に何か仕掛けてくるとはわかってはいるが、背を向けて去るといふ選択肢はもはやない。

この男はここで仕留めなければならぬ。引き伸ばせば宝具であろう船を落として獲得した利を失うことになる。奥の手がまだあると見ていいが、ここで仕留める以外に道はない。かなりリスクはあるがそれを踏まえてもここしかない。カルナと共に判断した所で、スフィックスが覆うように重なり合った下から声が響く。

「全能の神よ、我が業を見よ。そして平伏せよ。我が無限の光輝、太陽は此処に降臨せり！」

カルナが俺を放してスフィックスの群れに突貫する。辛うじてピルの上に着地したので距離を取ろうと踏み出すが、その瞬間に全身を押し潰すような重圧に絡め取られて足が止まる。

「ここで我が光に焼かれて死ぬ、なり損ないの救世主!!」

『ラムセウム・テンテイリス光輝の複合大神殿!!!』

視界を埋め尽くす黄金。歪みに歪んだ今までは違う空気。取り込まれたと分かった時にはもはや手遅れ。詰んだと、心のどこかで理解した。

東京という都市のど真ん中、ビル群の合間を中心として現れた巨大ピラミッドは多くの建築物を踏み潰した。全長数キロ、その威容は見るものに畏れを抱かせる。しかし、轟音と共に現れたその巨大建造物の出現に街が騒がしくなることはなく、完全に無人となった街を二騎の英霊が疾駆する。その後ろからセイバーのマスターを担いだキャスターがあたふたと追っているが、距離は開くばかりだ。だが、速度を落とすわけにいかない。

巨大ピラミッドの出現と同時にライダー・オジマンディアスが宣言したことは見逃すわけにはいかない行為だった。大悪を誅する為に東京を諸共滅ぼし尽くす、と。それはセイバーにとってはある意味二度目、全解放に至らぬ聖剣では砕けないあの電球に挑む行為だったが、それは立ち止まり見逃す理由にはならない。それに、あの日のように偉大なる弓兵が味方にいる。それがどこか嬉しいと、騎士の王たる彼は感じるのだ。

「ランサーとそのマスターは取り込まれたと見ていいな。出来れば助けてやりたいんだが、どうだセイバー」

「私は構わない。だがあの神殿に取り込まれて手負いの人間が生きている可能性は低いだろう」

セイバーの言うことに理があるとアーチャーは理解している。あの中に取り込まれて生きているとは思えないし、彼の千里眼は取り込まれる前に既に右腕の負傷だけで十分重症といえる傷を負っているのを確認している。加えて、恐らく待ち受けているだろうスフィンクスは彼を襲っているに違いない。ライダーの殺意は常に人間であるはずの彼に向いていたし、こうして大回廊の入口に差し掛かっても放置されているという感じしかない。

立ち止まることなく踏み込んだ神殿内はセイバーとアーチャーの肉体に呪詛による猛毒を与えた。アーチャーは神代の肉体を持ち頑

強スキルも保有するがそれを弱体化した上で僅かに毒を受け、キャスターによつて事前に強化を受けたセイバーも同様に毒を受ける。また、アーチャーは知らないが神に由来する宝具か神に由来する存在でなければ宝具の真名解放が行えない。

「この神獣たちは不死身か!？」

「ライダーの宝具だ！ この神殿内では彼とその配下の神獣は不死の肉体を得るといふ！」

セイバーの言う通り、神殿内ではオジマンディアスとスフィンクスたちは不死の肉体を獲得する。時折並走するように現れるスフィンクスに攻撃を加えても再生し、アーチャーとセイバーに目も向けずに走り去っていく姿は異様であり、その先に何かあると察した二騎は先を急ぐ。迎撃される様子はない。ここまで攻撃されないのは先にいる何者か、ランサーかそのマスターの奮闘によるものか。

言葉を交わさずとも二騎は同時に先にいる誰かを頭に思い浮かべ、気を引き締め直しながら駆け抜ける。ランサーがやられなければ三対一でライダーと戦えるが、ランサーはマスターがこの神殿に取り込まれている為、彼が死ぬまでに決着を付けなければ時間切れで負けるだろう。如何に頑強な肉体を持つていようが、この神殿内で長時間生き残れるとは二騎共考えていない。

手遅れになる前にと駆ける、その最中。大量のスフィンクスが一箇所に向かって敵意を向けている光景が目に入った。そのまま進めば大回廊の最奥に辿り着くと直感で理解しているが、ここで脇道逸れるべきだと両者共に理解する。全く同じタイミングで進行方向を切り替え、中心から爆発音を響かせるスフィンクスの群れに突貫。風の鞘から解き放たれた聖剣が瞬く間に半数を薙ぎ払い、尋常ならざる威力の矢が空中に浮かんでいた群れを軒並み撃ち落とした。

「お前らか……」

そうして頭になった中心地には千切れそうなほど深く傷を刻まれた右腕をぶら下げ、全身の至る所に裂傷と火傷を負いながら立つ人間の姿があった。

「思ってたより元気そうだな！」

「失血で今にも死にそうだが?」

「返事ができるなら上等だろ! ほら行くぜ!」

坂上真人、セイバーと決して埋まることの無い溝のある男。いつか殺し合う宿命にある彼は、生身の人間でありながら今も尚この大神殿で呼吸をして立っている。再生し続けるスフィックスを潰しながら傷を負った彼の動向を窺うが、アーチャーに支えられるのを早々に拒否して立つ姿はほんの数秒前よりも堂々としている。

半ばまで断たれた右腕が痛々しいが、止血はできている。全身血塗れだが足元が覚束無いという様子もない。やはり彼はこの特異点でも異常な存在、その中心に近い人物なのだろうと推察する。沙条愛歌の為に戦うと言い、それを実行する彼こそが聖杯を利用して特異点を生んだようにも考えられたが、それにしてもこの状況は危険に過ぎるので思考から追い払おうとする。

聖杯を持っているなら早々に願いを叶えているだろう。事実、坂上真人とはそういう人種だ。それで勝てるならそうするという決断ができる人間だし、わざわざ七騎集めて戦うなんて殊勝な真似をするはずが無い。だから彼が聖杯を持っているはずは無いと思考を振り払おうとするが、振り払えない。疑念が拭えない。自分の背中を見るあの少年は本当にこれから人類史を裏切りかねないだけの人物なのだろうか?

「セイバー、俺に何か言いたいことがあるなら言え。その警戒丸出しの態度を続けられると集中が続かん」

「……すまない」

「……ライダーが終わったら次はお前を殺す。それまでは預ける。嘘を言っていないことくらいは分かるだろ」

一瞬だけ、視線が絡む。その蒼穹の瞳は爛々と輝く瞳を捉え、彼が心の底からそう言っていることを理解する。

「どうやらそのようだ。非礼を詫びよう、ランサーのマスター。そしてこの戦いの後、必ずや君を討ち倒すことを誓おう」

言いながら薄く笑い、傷だらけの身体で黄金の床を踏みしめる男から視線を逸らす。彼はたしかに邪悪を為すだろう。だがそれは尊敬

すべき精神であり誇るべき在り方だ。誰かのために正義を為すのが自分なら、あれは自分の決めたことならば如何なる地獄であれ進める人間だ。それはある意味、貴い行為なのかもしれない。

「ああ!? 死ぬのはお前だろうがよォー!」

「おお、腹から声出せたじゃねえか! その調子ならペースあげても良さそうだな!」

各々がフィンクスを蹴散らしながら大回廊を進軍する。神殿の毒に全身を侵され、宝具を封じられなお英雄たちは雄々しく。既に死んでもおかしくない人間は蒼き光の尾を引いて、まるで彼らに比肩する存在であるかのように眩い。紅蓮を散らし、砂の滝を越え、宙を映す獣すらをも接敵の瞬間に蹴散らして進んでいく。連携なんてものは無い。ただ魔力に任せて殴りつけるだけ。ただ付与された強化により跳ね上がった出力で聖剣を振るだけ。ただ全力で矢を番え放つだけ。

ただただ彼らにとっては普通の行為を繰り返しているだけで、本来攻略不可能なはずの大神殿を攻略している。いい感じだと手応えを感じると同時にセイバーだけは僅かな不安を抱いているが、それを敢えて言うような行為は避けていた。不確定な要素を告げるよりも、何故か異様に高い二名の士気を維持しておくべきだと判断したからだ。

「——近いな。突入と同時に仕掛けるが、構わないか」
「任せな」

「問題ないが聖剣の解放は温存しておけよ、セイバー。あのライダーは普通じゃない」

普通じゃない。その言い方が少し彼の認識とずれているから問いつめようとしたが、思いの外接近していたために問い直すような時間はない。今も戦っているらしい二名により震える大気を感じながら、もう間もなくだと三者揃って気合を入れる。

真名解放には程遠いが聖剣には魔力が漲り、同じように引き絞られた鎌も尋常ではない力が満ちる。唯一既に全力の人間だけは変わらないが、その目は真つ直ぐに前だけを見据えている。

執拗にまとわりついてくるフィンクスの群れを薙ぎ払うついで

に眼前にある大門を打ち砕く。

遂に来たかとランサーとライダーの両名が反応し、天井より黄金の魔力が全てを押しつぶすように放たれる。それだけで大軍規模の宝具に匹敵する規模の魔力であるが、ただ侵入者を撃滅するためだけに放たれただけのもの。宝具ではなく、特殊な魔術でもないそれは破格という他ない代物だ。

だが、ここに至ったのは尋常ならざる英雄三騎に救世の器。聖剣の煌めきが黄金の天井を両断し、空を駆ける鏃が既に放たれていた次弾を拡散前に相殺する。その僅かに生じた意識の隙間に入り込み、真人は入口から玉座の手前まで踏み込んでいた。既に左手には魔力が充填されている。振りかぶられたそれは何の躊躇いもなく振り下ろされ、光の奔流が玉座を呑みながら突き抜けた。

「——その程度か、なり損ない」

ぎろりと。黄金の瞳が物理的な圧力すら伴っていると錯覚するほどの殺意とともに光の奥から睨みつける。油断も慢心もないとはいえこの場の誰よりも劣る彼にライダーは欠片の容赦もなく、自分を巻き込むことを厭わずに全方位から光を叩きつける。微塵の隙間も無い光の檻の中でも振るわれた短刀を辛うじて回避し、上から光を追い抜きながら突き破って割り込んだカルナが梵天^{ブラフマー}よ、地^{マーストラ}を覆えを放って距離を作る。背後から迫る光の奔流は裏拳で砕き、不用意な接近だったと戒めながらセイバーたちと同じ位置まで退る。

「不死の宝具か、それとも別の仕掛けか。どちらにせよデタラメだな」「この神殿内で平然としているマスターもデタラメだろう。効いていない訳ではないだろうに、よく耐えるものだ。——ああ、アレは首を落としても心臓を貫いても死なんぞ」

「その通りだ、この神殿内において余は唯一にして絶対の支配者である」

濃密な殺意だけを乗せた声と共に炎の向こうから現れるライダーの身体に傷はない。崩れていたスフィックスたちが再生し、その内の数体が飛翔することで空中をも席卷する。神獣の数は数えるのも億劫になるほどで、どうやって維持しているのかも分からないほど底な

しの魔力によってそれを成す黄金の王は三騎の英雄を前にして尚、唯一何もなしとげていない人間にのみ殺意を向けている。

「――本気で俺しか狙ってないぞ、あれ」

「どうやらそうらしい。そうなるとお前を逃がし、オレが宝具を解放するとう選択肢は消えたな」

「まあセイバーでいいんじゃないか？ 約束された勝利の剣でいけるだろ」

「……請け負おう。ただ放つまで時間がかかる」

「まあそれまでは持たせるから手早く頼む。割と限界感じてきた」

選ばれた者として特別な肉体を持つていても、ここまでに負った傷と今も尚全身を蝕む神殿の毒は致命的だ。未だに立っていられるのが奇跡的なほどであり、それ故にオジマンディアスは不快感を堪えられない。世界を嬉嬉として滅ぼさんとする大悪、これは特異点にいる全ての命と引き換えにしても滅ぼさなくてはならない。人類の旅路が未来へと続いているのであれば、既に取り越えられた過去の邪悪がそれを否定していい道理などないのだから。

「相談は終えたか？ 終えたならば疾くと死ぬ。貴様の在り方は人類への冒瀆だ」

「――ああ、そろそろお前が何に怒ってんのか分かったから言ってやるよ。いいか、耳の穴かつぽじってよく聞け」

ボロボロの身体に鞭を打って、膨大な魔力を生成しながら大きく息を吸う。

「人類がどうの未来がどうのとなあ、お前らいちいちくだらねえんだよ！ さっさと墓に戻って死に直せやミイラ野郎!!」

中指を立てながら吐かれた言葉を切り口に戦端が再び開かれる。黄金が拡がり、熱砂が獣となる。鍬が穿ち、槍と焰が奔り、蒼き光が煌めき、星の聖剣が振るわれる。聖剣がその力を示せる時までの数分間を稼ぐ戦いが始まった。

闇夜に吞まれた東京を照らす黄金の輝き。アーチャーが固有結界たる神殿内部にて戦闘をしている現在には約一名を除いて誰も知る由もないが、二十三区の全てにおいて聖杯戦争に無関係な市民が路上を歩いているようなことはなかった。それこそがこの特異点における重要な要素の一つであると知っていながらそれを敢えて黙ったままの男は、藤丸立香と共にビルの上から黄金のピラミッドへと視線を向けている。

「オジマンディアス王も本気だ。彼は彼でこの世界の歪さを理解していた。彼は間違いなくランサーのマスターを殺すだろう」

遠くにある黄金の建築物を眺めているように見えるキャスターがそう呟く。彼は千里眼によって内部の出来事まで把握している。既に内部に突入した二騎と取り込まれている一騎に一名。戦況から結末は凡そ見えているが、はてさてどうなるかという段階だった。そこで、取り敢えず後ろに立つ少女に話を振る。

「さてお嬢さん、君は不安ではないのかい？ 彼は大事な人なんだろう？」

「あら、彼なら大丈夫よ。ちよつと心配だけど、何があってもわたしのことを裏切らないもの」

だから不安ではないと言い切る笑顔の少女に、藤丸立香はどこか薄ら寒いものを覚える。可憐という言葉そのもの、妖精のような麗しき少女であるはずなのに。心の奥底にある恐怖という名の感情を拭えない。先程この場に現れた時から終始微笑んでいるが、本来毒気を抜かれるはずのその姿に本能が警鐘を鳴らしている。

「ああ、でもそうね。最近ランサーと男の友情？ みたいなので二人だけで分かりあっているのはちよつと不満だわ」

「藤丸くん、あれは恐ろしい女の子だ。間違いない。浮気しようもの

なら相手を殺したあとで手足をもちで飼われる未来が見えるぞう……」

「いや普通は浮気しないからね?」

「女の子を誑かして遊ぶのは貴方くらいじゃないかしら? 早くアヴァロンにお帰りになった方がよろしいんじゃない?」

「中々に辛辣なご意見をどうも。しかし僕も理由があつて此処に来ていてね、はいそうですかと帰る訳にはいかないんだ」

分かるだろう? とウインクしながら愛歌に告げる姿は普段通り軽薄さに満ちているが、その奥底ではこの小さな少女を警戒しているのが立香には伝わってくる。玲瓏館から契約すら譲り受けた今、マールンと彼の間にはしっかりと霊的なパスが通じている。魔力はセイバーに吸われ続けているが、念話はキャスターが常に立香に対して愛歌についての見解と警戒の催促で使われている。

「わたしはなにもしないわよ? 貴方たちに預けた宝石だって真人に万が一があつたら嫌だから渡しただけ。わたしは彼が出した答えを受け入れるわ」

「……彼が君を殺そうとしてもかい?」

「ええ、もちろんよ。彼がそう決めたならそれでいいわ」

微笑みではなく、咲き誇った花のような笑顔だった。心の底から何の憂いもなく、彼の選択の全てを受け入れると言つてのける。

「それは……」

「優しい人なのね、カルデアのマスターさん。でもわたし、元々死ぬ運命だったから気にしないで?」

「え?」

今、聴き逃してはいけないことを聞いた気がする。

「あなたには真人だけを見て欲しいの。彼を見て、彼を知り、彼の敵として最後まで立ち続けてちょうだい?」

笑顔だ。自分が死ぬ運命だと語る姿も。坂上真人と戦えと言う姿も。終始徹底して微笑みと笑顔のままだった。そして彼女はそのまま、何の前触れもなくその場から消えた。最後に一つ、言葉だけを残して。

『よろしくね、カルデアのマスターさん』



日輪の如き炎を纏い、剛槍が振るわれる。たったそれだけの動作で直線上にある全ての物体が蒸発していくが、大神殿の壁は崩壊せず、それを受け止めている。軋んでいるが、ギリギリ崩壊はしないという程度。衝撃に揺れ、刻まれた僅かな傷は瞬時に再生する。無数のスフィックスは絶えることなく彼ら三騎の英雄を襲っており、討てど討てども湧き続けて消えない神獣の群れに足を止められている。

そんな中、ただ一人で神王と殺し合う者がいる。

蒼き光の尾を引き、傷だらけの両腕を振り回して黄金の魔力を砕き続ける。死に体だろうが構わず突貫を仕掛けてくるイカれた精神性。限界を容易く越えさせる恵まれた肉体。無尽蔵にすら思える魔力。未だ未完ではあるが、いずれ完成するであろう権能の断片。その全てを正面から受けながら、神王は諦観にも似た感情を抱いていた。

いつか見た光景とは違うが、このままいけばセイバーは星の聖剣を以てこの神殿を砕くだろう。それに合わせて最大の一撃を放てば最後、記憶にある光景の焼き直しのように己は敗北すると確信している。素晴らしい勇者たちだ。たとえ特異点であろうとも犠牲を許容しない高潔な心、その在り方に光を見る。

「お前の！ 相手は！ 俺だろうが!!」

怒鳴り声と同時、肉体に数度当たるだけで全身が砕けるような光が叩きつけられて再生する。神殿は健在である今、裡に神を宿す神王としてある彼は死なない。傷をつけようともそれは傷になりえない。ただ、愚かにも獣に落ちんとする救世の器が心を刺す。己が獣を滅ぼす未来を否定して、その果てに世界を壊さんとする者。

それは嘗てない大悪である。犯してはならない禁忌である。魔術王による人理焼却よりも尚タチが悪い。だが、その心の在り方はきつと、どんな人間よりも人間として正しいのだと理解している。今も尚、心を燃やして戦う肉体は光に焼かれ貫かれ、刃によって無数の傷を負っている。その全てを心一つ、不屈の闘志で支える姿のなんと眩しいことか。

「――だがそれ故に、赦すわけにはいかんツ！」

殴られるのをノーガードで受けながら短剣で首元へと刺突。当然のように回避された瞬間にさらに深く踏み込んで左の拳で鳩尾を穿つ。

「っ、ああアアアアッ!!」

木っ端の英雄であれば霊核諸共砕きかねないそれを受けてなお、救世の器は砕けない。叫び、衝撃による横隔膜の痙攣から胃の収縮に肉がひしゃげる音まで何もかもを無視して踏み込んでくる。身体が浮かんだ瞬間に顔面を掴んで叩きつけ、そのまま拳を振り下ろす。再生されようが構わず殴り、蒼い光を撒き散らしながら何度も何度も拳を上げては振り下ろす。

その程度の攻撃で揺らぐような神殿ではなく、それ故に神王たるオジマンディアスは無為な暴力を振るい続ける愚者を眺めている。このまま何もしなければ決まりきった結末を迎えるだろう。デンドラの大電球はセイバーが聖剣を解放できるようになるのと同じタイミングで充填され、己は三騎と一名を前に敗退する。これを覆す術は眼前の男をその手で殺すことだけ。だがそれを為すだけの出力は確保できない。眼前のこれはもうサーヴァントと同等の領域に踏み込んでいる。

「この状況で救世主に近づいているとは何たる矛盾か！ 違和感を感じぬか？ 感じぬのなら、自ら望まぬものに成り果てるその歪な願いの果てを自覚せよ！」

言葉を投げ掛けながら振り下ろされる拳を掴む。壊れていた肉体が再生されるが攻撃するのではなく防御へと回し、空いた拳を受け止める。踏みつけを無視してその瞳を見つめる。理性の色は薄い。順

調に、神王の肉体を蝕むものの望むように完成しつつある。それは赦しておけぬものだ。

「それでは何も救えまい！ 貴様はただ壊すだけの者、世界と共に沙条愛歌すらも壊す狂った獣に過ぎん！」

喝破と共に押し倒されているのを力技で押し返す。純粋な膂力で瞬間的に上回り立ち上がるがそれ以上は続かず、両者は直ぐに拮抗した。投げた言葉に対する返答はない。たとえあつたとしても互いの決裂は見えている以上和解の道はなく、僅かな凧の後に最後を迎えるだろう。

「何度繰り返そうと結末は変わらん！ 貴様は何度でも過ちを犯し、何度でも同じ願いを抱く！ その絶望の果てに人理までをも滅ぼすことなど赦されんわ!!」

「——ああ、頭痛てえからゴチャゴチャ喚くなオジマンディアス。いちいち言わなくても分かっただよ」

「ならば言われずとも自我を保てなり損ないめが！ 余の敵対者であるならばアレに吞まれるような無様は許さん！」

どこまでも傲岸に。たとえ互いが同じものに蝕まれようとも、墮ちることは許されない。この決戦はあくまでも、神王と救世主のなり損ないのそれでなくてはならないから。そうでなくてはこれまでの何もかもが無に帰してしまふ。

「ここが分かれ目だ。これより放つ一撃が後の全てを分かち、未来を決めるものとなるだろう」

「……それがどうした」

「全霊を以て挑め。これは余が世界を救う戦いである。この戦いの後、余は余が続べるためにあらゆる敵を焼き尽くそうぞ」

小悪党を滅ぼして世界を救うならば誰でも良い。だが、大いなる悪を討つのは英雄の役目。ならば偉大なるファラオ、神王オジマンディアスたる彼が討つべき敵は強大なるものでなくてはならない。そして目の前の男は赦してはならないが、認めなくてはならない敵である。その全霊を正面から打ち砕かずして勝利とは言えない。

互いを拘束していた腕を離し、距離を取る。スフィックスたちによ

る足止めは未だ破られておらず、カルナですらも不死の軍団によつて覆われている。セイバーが宝具を解放する為になにやら仕込んであるようだが、未だそれは成っていない。故に勝負を決するのは今の瞬間を置いてほかはない。

「――アメンの愛よ！」

デンドラの太電球が帯電する。本来ならば有り得ぬ速度で充填された魔力はそれでも尚臨界点に達している。今この場にいるものであれを打ち破れるのはカルナの宝具のみだが、溜めと周囲への被害を考えればもはや手遅れだった。スフィンクスの群れを突破していない彼らはそれが放たれるのを見守る他ない。

太電球に込められた太陽光の向く先はそれを仰ぎみるだけの男。彼は武器を持たず、両手を下ろし、その威光を見つめるのみ。――だが、その瞳に絶望はなく。

「―― 纏 「綱工纏。纏ソ綱シ綱ウ、起動」

言語がブレる。自分が起動したのも口にしたことも理解出来ない。ただ蒼き極光のみが手に握られた。

『カルナ、相殺するからあとには任せる』

『承知した。ただし、最悪の場合は令呪でオレを盾にしてお前は逃げるがいい。オレだけならばどうとでもなるだろう』

念話による会話を済ませ、真人は感じるがままに拳を掲げる。そのまま手を開けば蒼き光は膨張し、黄金の天井を貫いて空へと伸びる塔となった。立ち上った光は次の瞬間には螺旋を描きながら元の位置へと収束していく。それは宝具か、或いはまた別の何かか。

「軍神と戦いの女神、我が両腕に宿るがいい！ 豊穡の女神、我が勝利の栄光の後にはお前こそが戦いに血塗れた地を言祝げ！ 最愛なりしネフェルタリよ、ハトホルとしてオジマンディアスの光臨を祝福せよ！」

宣言と同時に、固有結界たる神殿内へと焦点を定めた太電球からの熱投射が行われる。それはオジマンディアスが行使できる最大熱量、すなわちは太陽面爆発にさえ及ぶであろうものだった。ならばそれは

究極の神罰。人体では視認することすら叶わぬ灼熱である。それを、

「終焉を超えて輝け、——」

それを、蒼き光が貫いた。

白衣を着た男、よく分からん衣服に身を包んだ緑髪の男、イタリヤンな風貌の男？、黒い僧衣に身を包んだ男がいた。

大学にある最も大きな講義室を僅か四人で占領し、黒板に何かを記すこともノートに何かを書く様子もない。ただ何かを語る白衣の男の言葉に耳を傾け、各々に反応しているだけだ。

——曰く、全ての命には与えられた価値がある。

全ての命には果たすべき役割があり、果たすべき使命がある。それは産み、作り、育み、壊し、進むことだけでは無い。誰かが誰かに何かをすることにも、与えることにも、愛することにも。

一見して価値なんてまるでなくとも、そこには確かに変え難い命の価値があるのだという。

臥藤門司はそれを受け入れ、更に己の道を進まんと奮起した。

妙漣寺鴉郎はそれを認め、あらゆる命の価値を肯定した。

坂上真人はそれを否定し、今も自分の価値を探している。

——曰く、人生とは旅である。

人生とは順境と逆境を繰り返しながら未明の荒野を彷徨い歩くものであり、その果てに辿り着く地で答えを得る。順境は友を作り、逆境は友を試す。出会い別れ、肯定して否定して、右往左往しながらも歩き続ける苦難の道程こそが人の一生であるといえる。

臥藤門司はそれを肯定し、だからこそ救いを探さねばと断言した。

妙漣寺鴉郎それを肯定し、しかし諦観を抱いていた。

坂上真人はそれを肯定し、その上でくだらないと吐き捨てた。

——曰く、運命とは残酷である。

運命とは人に見えぬ道標、全ての命に敷かれた旅路。誰が決めたのか、何が定めたのかすら分からぬ不明の道筋。しかして多くのものがこの通りに歩を進め、その果てに決められた末路を辿る。仮にそうだととして、お前たちはいかなる思いを抱くのか。

臥藤門司は怒りを抱いた。

妙漣寺鴉郎は諦めた。

坂上真人は????した。

懐かしい夢だと思う。結局、この後も人の生涯だの命の意味だのについて語られ、所感と意見を述べさせられることの繰り返しだったはずだ。講義時間の全てをそうやって過ごし、終盤になると白熱し始めた門司が色々と熱意を持って語りだし、妙漣寺が窘めていたように思う。俺は俺で教授と訳の分からん問答を毎回のように行い、横槍を入れてくる門司とたまに衝突していた。

もはや懐かしい、一年前の光景だ。

『坂上くん、もしも君の目の前に押せば幸せになれるボタンがあったとしよう。押せば間違いなくこれから先の将来は満ち足りたものになるだろう。あらゆる罪、あらゆる後悔、あらゆる未練は残らない。君はこのボタンを押すかな?』

それになんと答えたのか、思い出せない。

『ああ、それでいい。実にボク好みの答えだ。まあボク好みの答えが出せる生徒しか受講させないから当たり前ではあるけどね』

それはそれで問題があるのでは? と思うが学内で絶大な権力を握っているらしい教授のことなので何かあっても握り潰すのだろう。そういえば魔術にも造詣があるらしいが何者なのだろうか。聖杯戦争についても知っているようだし、やはり謎が多い。そんなことを思っていると、音声が乱れ始める。

『聞き取れていたはずの言葉が聞き取れない。聴覚がノイズだけを垂れ流す。』

』、——？』
ノイズが奔る。視界が黒と白の線だけで構築された世界に変わる。
黒い獣のような何かが映る。

』、——』

ノイズ。ノイズ。ノイズ。ノイズ。ノイズ。

雑音が消えない。視界が乱れている。記憶が混じっている。思考が捻れている。身体が壊れていく。世界がノイズに変わる。何もかもが分からなくなっていく。壊れて綻びて崩れていくなかで、たいせつなことを、——、だいじな、ひとを。——？

『そろそろ起きて、寝坊助さん？』



見覚えのある天井だ。いや見たことが無い天井だ、なんて言う奴がいるのだろうか？ いるなら見てみたいが、少し考えてみれば病院送りされたら見た事がない天井かもしれない。まあ少なくとも今視界にあるこの天井は二週間泊まると言って入ったホテルの天井だろう。ビジネスじゃなくて普通の、というか冷静になるとそこそこいい値段のホテルだ。ふかふかのベッドに寝ている幸福を噛み締めたい。

「至福……」

人肌の温もり、ふかふかのベッド、起床義務の消失。この三重の幸

福を前にすれば人間の知性など容易く砕けて溶けるだろう。これは抗えぬ人類の性、人類の生みだした最大の過ちにほかならない。腕の中にあるさらさらでいい匂いがするものに顔を寄せると幸福度が上がる。頬ずりした時の感触もたまらん！ たまらんが、ここから更に長々と語っても結局行き着くのは惰眠最高!! という結論なので二度寝でもしようかなと思ったところで、そういえば腕の中にある人肌の温もりとこの匂いの元ってなに？ と気がついた。

チラツと見る。金色の髪と真っ赤な顔が見えた。

「……………」

「……………その、えっと」

「……………」

「……………もっと、してもいいのよ?」

「今すぐ腹を切って詫びます」

布団を跳ね除けて飛び起きる。手頃な刃物は見当たらないのでカ
ルナを呼んでとりあえず槍を借してくれとせがんで略奪する。では、
さらば現世。後悔ばかりだったが存外悪くは無いものだったかもし
れない。

「悲しかな 流石にこれは アウトです」

「む、腹切りは流石に止めさせてもらおうぞ」

「そんなん?!?!」

「わたしはいつでもウエルカムだしね……」

槍を取り上げられて背後から愛歌に抱きつかれ、そのまま後ろに引
かれてベッドに倒される。ああ、柔らかいしあつたけえと感動しつつ
一周回ってようやく冷静になった頭で色々と思いつく。なんか色々
頑張つてオジマンディアスの宝具の中で死に体になりながら勝つた
……? のだろう。たぶん勝つた。なんか最後の辺りのアレが何
だったのか分からないが、東京吹き飛ばす規模の一撃を相殺どころか
正面から上回ったところまでは覚えている。

となると、問題はその後だ。

あれだけやって殺せてませんでした、では話にならない。恐らく宝具である神殿は吹き飛ばせただろうが、カルナたちがオジマンディアスの死を確認していなければ一段落とはいかない。仮に生きているなら今すぐ殺しに行かないといけないだろう。放置しておくのは選択肢としてありえない。

「案ずるな、マスター。ライダーの死はオレが確かに見送った」

「……そっか。それならいいんだ、ありがとう」

あのまま死んだなら、まあいいだろう。中指立てて見送れなかったのが残念だが、それはセイバーに取っておこう。うっかり巻き込まれて死んでないかなと淡い期待を抱くが、察したカルナが首を振ったので溜め息を吐いて愛歌を抱き寄せる。

——やはり、年不相応に小さな身体だ。本気でやればこのまま圧死させることすら出来そうなほど。微笑みながら身体を寄せる姿は愛らしい。あまりにも彼女は可憐で、無垢に過ぎる。

「ねえ真人、身体はどこかおかしくない？ あの蒼い光は救世主としての権能の断片でしょう？ こう、痛いところとか変な感じがするところがあつたら直ぐに教えてね？」

「ああ、大丈夫。……俺は大丈夫だよ」

救世主。思考を塗りつぶすような靄、馬鹿みたいな出力と肉体性能。自意識が吹き飛びかけるような感覚はないが、オジマンディアスと戦ってまた一つ近寄ったのだろう。世界が求める救世主。獣を討つ者。運命などという下らぬ首輪に繋がれた虜囚の末路。たぶん割と、完成まであと一歩とかそんなものだ。それまでにどう在るかを定義しきれなければ吞まれるだろう。あれはそういうものだ。

なんとなく怖くなって抱き寄せる腕に力を籠める。暖かいと感じられる。まだ肉体ではなく心が人としてあれる。自分が自分で無くなる感覚の中でも、この子のことを思えばきつと耐えられる。自分という個我を守りきれる。——必ず、未来に送り届けるのだ。何を引き換えにしても必ず、沙条愛歌を彼女が笑っていられる未来に送る。それを強く、固く胸に刻む。この命だけが、坂上真人が坂上真人であった証明だから。

「よし、充電完了。作戦会議しようか」

「……ふえ？」

「承知した。ではアーチャーについての報告から始めさせてもらおう」

愛歌を放して身体を起こす。目を向けた先の埋込み型の時計の日付は最後に見たものから三日経過しているため、かつてないほど凝り固まった身体の節々の原因を察した。このまま身体を解しながらにしようとは提案し、とりあえず各所の伸びから解しを始める。とんでもない凝り方しててちよつと痛い。

「アーチャーとそのマスターはこの聖杯戦争を勝ち抜くと決めたらしい。目覚めて問題がなければ連絡を、との事だ」

「おーけー、あとで連絡する」

「次にセイバーとキャスターは同盟を継続。現在はアサシンを搜索しているようだ。ああ、こちらも藤丸立香からもう一度話をしたいとの申し出を受けている」

「話し合いから殺し合いになりそうだな」

今回の特異点に関する事柄で妥協は互いにありえない。こちらは聖杯で願いを叶えなくてはならないし、あちらは俺にだけは願いを叶えさせてはいけない。俺が完全に覚醒してもカルデアはダメで、聖杯を使われてもダメだと話し合えば白ずと悟る。きっとその時が終わりのだろうという確信めいた予感があった。

カルナも理解しているのだろう。頷いて話を続ける。

「マスターが藤丸立香と向き合えば最後だ。聖杯戦争は終わりに向けて加速するだろう。……ライダーとの戦いで少々引つ張られすぎたな」

「……まあ、それならアサシン殺してからでいいな。あれが生きてると事故が怖い」

「それがいいだろう。肉体と精神の剥離を修正してからでも遅くはない。その様子だとともに動けるまで二日といったところか？ 調整には付き合おう」

「んー、一日でなんとかしたいけど厳しそうかなあ」

手を動かす度に数センチ単位でズレが出ているし、調整しながら動かしてみれば今度は手に入力が入り過ぎていて。たぶん魔術回路を常時回転させた昨日までの身体能力を超えているので、戦闘時にどこまで性能が上がるのも確かめる必要があるだろう。試しに手を伸ばしてカップを手を取れば、特に抵抗もなく壊れてしまった。

「やべっ……」

「はい修復修復。手先の調整は急務ね、それ」

「魔術の有難みを感じる」

粉々になったカップの取っ手を瞬く間に修復した愛歌の魔術に割と真面目に感動した。壊したら弁償しなくてはならないと思うので、そんな値段もしないとはいえ出費を抑えられたのはありがたい。ついでに閃いたのだが、もしかして壊れたものって大体魔術で直せたりするのではなからうか。ストーブとかエアコンとか直せたら超便利な上にお財布に優しいと思うのだが如何に。

「そんなに便利じゃないのよね」

「無念……」

もう一回つまもうとして取っ手を粉々にして修復してもらい、効率悪い気がしてきたので一旦やめる。手を開いて閉じる動作を繰り返しながらどれくらい力んでいるかを確かめることにした。開く、閉じる、開く、閉じる。そうやって何度も確かめ、途中で何となく正拳突きしてみることにした。腰を落として腕を引き、突き出す。

なんか凄い風を切る音が出た。ついでに発生した余波で布団が飛んで愛歌が埋もれた。

「……マジか」

「びっくりしたあ……」

「なるほど、見立てを訂正しよう。どうやら無意識に肉体が戦闘態勢に入っているらしい。それさえ抜けければ直ぐに慣れるだろう」

「どうすればいいんですかカルナせんせい」

こいつが見立て間違えるとかあるんだな、と驚いたのを抑えて問いかける。何となく嫌な予感がするのだが、気の所為だと思いたい。だからそんなジリジリ近寄ってこないで欲しい。こう、いい感じに拳

握ってるのはなんなんだ。

「パラシユラーマ師はかつてこう言った」

「待てやめろその続きはダメだと俺の中の何かがそう言っている——
！」

「寝れば治るから殴られる、と」

「絶対頭おかしいだろお!!」

叫んだ瞬間に鳩尾に拳が突き刺さって中身を吐き出しそうになるのを我慢する。我慢するが、猛烈な痛みと内側に流し込まれた魔力に意識が薄れていく。

「う、のうきん、が……」

「許せ、荒療治の自覚はある。だがお前は今一度夢に落ち、知るべきものを知るべきだ。休息はその後に取っておくといい」

意識が遠のく。ベッドに向けて引き倒される感触を最後に、夢の中に落ちていく。

暗い穴の底へと落ちるように。聞き慣れた誰かの声を聞きながら、昏い夢の中へと沈んでいく。

A c t — ?? I n a D r e a m

暗く、昏い世界に浮かんでいる。

—— ??はお前を選んだ

それは聞き覚えのある声だった。それは聞いた事の無いはずの声だった。それは聞いてはいけない声だった。それは聞かなくてはいけない声だった。それに耳を貸してはいけない。それに耳を傾けなくてはいけない。その望みを叶えなくてはいけない。その望みを叶えてはいけない。そのことを考えてはいけない。そのことを考えなくてはいけない。それに従わなくてはいけない。それに従つてはいけない。それは沙条愛歌を殺そうとしている。それは沙条愛歌を殺そうとしない。それは獣を討つべきだと言っている。それは獣を討つてはならないと言っている。それは世界を救えと言っている。それは世界を救えない。それは救世主を求めている。それは救世主を求めていない。それは終わりを求めている。それは人類の破滅を予言している。それは人類の破滅を予言している。

——どうあれ、人類は滅ぶ。その為のお前であり、その為のアレである

いつか必ず訪れる破滅を回避する為に。いつか必ず迎える終焉を超えるために。この肉体は必要なのだろう。正確にはこの肉体に宿った最後の光、終わる世界を救うに足る大権能。零れ落ちた欠片一つを破壊に使えば容易く東京を更地に出来てしまうような、あまりにも強大な最後の希望。人類の悪を生み、それを殺すことで完成する救世主の形。反吐が出る。唾棄すべき願望だと切り捨てた。けれどそれはもう、遠い昔の話だ。人は神と訣別し、人として歩くべきだと悟っている。

——視点が変わる。泣いている少女がいる。

涙を流す少女に手を伸ばす。壊れてしまいそうな少女の頭をそつと撫で、継るように伸ばされた腕を受け入れて抱き締める。小さく幼いその姿はあまりにも哀れで、憐憫という名の情を抱かざるを得ない。その行いは許されたものでないと誰かが叫ぶのを聞いた。その行いは間違っていないと叫ぶ誰かの声を聞いた。ただ、独りぼっちの少女の涙を拭う。そこに善悪の観念は関係などなく、己の意志の示すままに彼女を抱き締める。しばらくして落ち着いたららしい少女が顔を上げ、その瞳に残る涙を拭う。何かを話して頭を撫で、指切りをした所で現れた父親らしい人物に引き渡した。

——視点が変わる。洞窟の中のように見えた。

重たいと、まるで全身に怪我を負ったまま歩いているような感覚を感じながら、暗闇の中を前に向かって歩く。一步踏み出す度に水を踏んだような音が鳴り、脳味噌に直接何かされているような不快感に襲われる。ノイズが正常な思考を許さず、視界すらも埋め尽くさんと拡がって来る。抵抗しても無意味だと分かっているでもこれに吞まれた果ては不明で恐ろしく、ただ踏み出し続ける己の足に意識を向ける。

どれだけ進んだかなんて分からないが、相当に歩いただろうその先には広大な空洞があり、空洞の大地に空いた大穴の底から^覚えの^ある^る気配を感じた。ふらふらと光に群がる蛾のように引き寄せられていく。身体が自由に動かないけど、よく考えてみればこれは夢なのだから当たり前だったと気がついた。黄金に満ちていなくてはならない杯の中身。黄金で満ちているはずがない杯の中身。願いを叶えるものではなくてはならない。願いを叶えるものであるはずがない。その、地獄の釜の底を見る。

——景色が変わる。白いベッドに赤い花が咲いている。

それは死体だった。紛れもなく、疑いようもなく。微笑みながら、まるで生きているような姿のまま死んだ少女の姿だった。それを見て嘆く誰かの姿を見て心に浮かんだのは怒りでも絶望でも憎悪でも

悲哀でも憐憫でもなければ歓喜でもない。ただ、自分はこの光景を知っているというデジャブへの嫌悪感。デジャブ、既視感。見覚えのある光景だ。いつか夢に見た光景だ。いつか起きたはずの光景だ。いつか起きたはずのない光景だ。いつか起こさせなかつたはずの光景だ。

血の香りはいやに鮮明で、抱き上げた冷たい身体の重さは覚えのあるものだった。口元から流れた血が青いドレスを彩っているのはいつそ美しく、鏡に映る姿はまるで悲劇の一幕のようですらある。心が固く、凍つていくような感覚を覚える。それが過去に起きたことなのか、或いは未来に起こることなのか。そのどちらかすら定かではなく、しかしただの夢と切つて捨てることは許されない。たとえ記憶が掠れ、彼方へと忘却しようとも。この魂に刻まれたナニカが叫ぶのだ。許すな、と。救世主などというモノに成り下がるなど吼えている。

——景色が変わる。見覚えのある地獄に立っている。

崩れ落ちた街並みは渋谷のように見えるが新宿のようでもあり秋葉原のようでもあり上野のようでもあり、どれだけ目を凝らしても東京のどこかの街並みのように見えるとしたか認識できない。自分の意識に従つて足が動いている。燃え盛る街並みの中、不自然に拓けた道を肺を焼かれながら歩く。誰かの死体があつた。誰かの遺した武器があつた。誰かの焼けた痕があつた。誰かの食われた痕があつた。そして、その地獄の先にあるものを見る。

それは獣に乗る女だった。金の御髪、蒼い瞳、青いドレス。無垢な笑み、涙を流した痕のある愛らしい顔。そのどれもが坂上真人が覚えのあるものであり、訪れてはならぬと断じた姿だった。獣と成り果て、人理を壊して滅ぼす怪物^{ポトニアテローン}王女。全能の化身、揺籃より目覚めた者。獣に喰われる最中、愛おしい少女と目が合った。

——景色がズレる。雪の降る公園のベンチにいた。

吐き出す吐息は白く染まり、冷えた空気が身体を震わせる。寒いな、と単純にそう思えるほど感覚は働いていて、どうにもこれを夢だと思うことが出来ない。そう思うには鮮明すぎて、現実にしては有り得ない事だらけだった。この後に来るのはきつと考えている通りなのだろうと思う。この景色はきつと自分の記憶を元に構築されているから、きつとこれから起きるのは自分もよく知っていることのはずだ。目の前には雪の中を歩く妖精のような少女がいた。

『——ねえ、あなたのお名前は?』

「坂上真人だ。君は?」

『わたしは沙条愛歌よ。揺籃に眠る者、あなたの討つべき獣の女』

「違う、君は幸福になるべきだ」

記憶と違う会話、思うように動く口。身体はどこにも不自由はなくて、この夢のカラクリは分からなくてもやるべき事だけは心のどこかが教えてくれる。誰かの決めた運命なんてものに従う必要は無い。全能は全能のまま少女となればいい。断じて、獣の咎を背負う必要などない。なぜなら獣とは人類の滅ぼすべき悪、人類が産んで滅ぼすマッチポンプ。自滅機構でありながらそれを超克せんとする愚かな意志の末路に過ぎない。——そんなものを産むのなら、大人しく滅びてしまえばいいのだ。

『優しい人、わたしのために全てを捨てる人。あなたは本当にそれでいいの? わたしを救って後悔しない?』

「——ああ、しないと。するはずがない。だって俺は……」

続く言葉は出てこない。何かを言おうとした事だけは確かなのに、その何かが分からない。それが大切なことだとわかっているのに思考が強制的に打ち切られ、視界に靄が現れる。時間切れなのか、それとも何かがきつかけとなつたのか。何もかも分からないし、この夢だって意味不明がすぎる。それでも、大切なものはこの胸に。たとえば思い出せなくとも分からなくとも関係ない。この胸の奥底で燃える炎が自分を自分にしてくれる。

『ええ、ええ、それでいいの。何も分からなくていい、何も知らなくて

いい。ただあの時あなたの伸ばしてくれた手が、わたしには何より嬉しかっただけだから』

「そっか」

笑顔のままに彼女は消えた。残ったのは雪の降る街並み。空に浮かぶ月と太陽。宙に煌めく星々。そして、目の前に立つ相棒。それは白い髪に幽鬼のような立ち姿の男。サーヴァント・ランサーとしてのこの聖杯戦争に呼ばれたカルナという英傑。

今こうして、自分を夢に叩き落とした張本人。

「夢は見れたか」

「既に覚えてないけどこの感じだと見れたんじゃないか？ ——うん、きつとそうだ。胸が、熱い」

心地よく、それでいて苛烈な熱さ。成し遂げよと叫ぶ心、慈しめと諭す心、そのあり方でいいと認める心。よく分からないし意味が不明なのが殆どだが、この聖杯戦争を終わらせる覚悟だけは出来たと断言出来る。

目覚めは真実に向き合い、終わりを迎える旅路の始まり。カルデアに続く良き未来を否定し、人理を喰らい、己を獣とする悪逆を成す覚悟を抱く。

「是非もなし。お前のその消えぬ焰こそ尊ぶべきもの、オレがお前に見た光に他ならない」

「たくさん殺すことになる。お前も紡いだ人類史の終わりすら齎すかもしれない」

「今更だろう。力を求め、未来を求め、それを切り拓かんとするお前に光を見たからこそ、オレは今もここにいます。故に我がマスターよ、決して止まらず進み続けろ。お前にはその責務がある」

「お前、割とおしゃべりだな」

ついでに発破をかけるのがちよつと上手い。責務、責務と言われればその通りなのだろう。そもそも特異点なんてものに至ってしまった元凶として、世界を滅ぼすことになるかと止まることは許されない。己には、救世主に成り下がらないと決めた男には、立ち止まる権利など無いのだから。

「よし決めた、目が覚めたら愛歌とデートするわ。護衛よろしく」

「心得た。陰ながらお前のエスコートを見守ろう。数多の女で遊んだお前の力量、存分に拝見するでしょう」

「うーん、その言い方はちよつと罪悪感が刺激されるなあ……」

こいつ、わかかってて言ってるんじゃないかなろうかと思うが、まあどうせ天然なんだよなあと勝手に納得してしまふ。表情は動いていないが、あれ何か変なこと言ったか？　みたいな雰囲気醸し出しているので当たりだろう。割と一言多いから拗れるんだろうなあ、なんて呑気に考えてたら空が崩れ始めた。雪が降るのはそのままに、太陽と月が共存していた不可思議な空がぼろぼろと崩れて奥にある真つ暗闇が見え始める。それに伴って周りの家々も光になって溶け始め、あつという間に残るのはこの公園だけになった。

真つ暗な世界を眺める。そこには何の星もなく、光もない。じわじわと最後の足場まで崩れていく光景を他人事のように眺めながら、どこまでも続く暗がりの中に落ちていった。

逢い引き、或いはデート。それは男女の遊び。何をするかは千差万別多種多様。手練手管は無数に存在するがしかし、共通するのは相手の女性をけつして不快な気持ちにさせてはならず楽しませなくてはならないというもの。これは全人類共通の常識であり、男である以上妥協してはならない点であると言えるだろう。

まず身嗜みは重要な要素の一つだ。常よりも整えた髪と気合を入れた衣服。まあ格好が変わった訳では無いが普段適当に着ているクソダサTシャツとジーパンよりはいいだろう。実際合コンでの女受けは圧倒的にいい。まあ適当に気飾れば女は基本ほいほい釣れたので実は一周回ってファッションセンスは滅亡しているかもしれない。

そんなことを考えつつ、一応デートということでお着替えタイムを確保した愛歌を部屋を出てすぐの位置で待つこと二十分。ドアが開いて恐る恐るといった様子で出てきた彼女に大きな変化はない。ないが、しかしこの肥えた目と鼻を以てすれば普段との違いなど一目瞭然。髪はそれとなく目立たぬように、しかししっかりと整えられているしなんなら数ミリ内巻き気味だ。服もいつも以上に皺がないし何なら今の短時間でクリーニングしたの？ となるくらいには輝いて見える。更に普段の甘い花のような香りではなく、なんとというか蠱惑的な香りがした。

「ど、どうかしら？」

「ああ、可愛いよ。よく似合ってるしいい匂いだ」

感想は正直に言う。ここで変に吃ったりつかえたりするのはよろしくない。ストレートに伝えたらほんのり赤かった顔がより赤くなるのが見える。

「お手をどうぞ、お嬢さん」

「あまり似合っていないわ」

「自覚はあるなあ」

手を繋いでエレベーターに乗り、無人のエントランスを抜けて外に出る。今日は土曜、世間一般だと一応休日にあたる日。スーツ姿の人間よりも私服の人間の方が比率が大きくなるのが世の常だが、何故か平日と何ら変わらない比率でほとんどの人間がスーツを着て歩いているのを見ながら駅へ向かって歩く。

見た覚えのある景色だった。通り過ぎる街並みもすれ違う人の顔も、乗り込んだ電車に座る人々も。ただ隣に座る愛歌だけがその異常から外れていて、既視感も違和感もない存在だった。

まあその辺は置いておいて、デートしようぜ！ と誘って何となく電車に乗って移動しているのはいいが目的地も何も決めていないのが最たる問題だった。完全な不覚である。

それもこれも壊れた世界が悪いのだ。見ないふりをしているが通り過ぎる人の顔は次の瞬間には忘却してしまうし、店舗の中もコンビニや飲食店を始めとした接客必須な所ですらレジに寄らないと店員が現れないのは雰囲気壊れる。というかレジに寄ったらいきなり出現するのほんとに宜しくない。

「なんだか不思議だわ」

「なにが？」

「あなたとこうして電車に乗ってること。特異点で東の間の平穩をすごしていることも、こうして手を繋いでいることも」

それは本来与えられることの無かった未来だ。どちらともなく無言になって、山手線に乗ってくるくると無意味に東京を回る。愛歌が目を閉じて腕に凭れ掛かった。今はもう乗客は俺たち以外にはおらず、時折響くアナウンスが電車の揺れ動く音以外に聞こえる唯一と言ってもいいものだった。

気がつけば、カルナは霊体化したまま車内から移動する電車の上立っている。朝にホテルを出てからまだそんなに時間は経っていない。昼には早すぎるが、このまま無人の電車に揺られ続けるのも何だか問題があるような気がしてならない。時計を見れば時刻は午前十時過ぎ、様々な店が開店して混み合っている頃合だろう。

さて、どうするか。渋谷新宿池袋の辺りがこの子の好みに合うのだ

ろうか。昼食を想定して動くなら小洒落た喫茶店があるのがベターな選択肢だと思うが、出来るならベストを選びたいところではある。困った時の焼肉は匂いが着くし昼からはこの子には重そうだから除外して、なんとなくだが寿司も除外。そうなるよこの飲み屋お持ち帰り合コン魔王的にはイタリアンかフレンチしか思いつくものがない。

「愛歌はなんか食べたいものとかあるか？」

「特に食べたいものはないわ。ハンバーガーも食べれたし……あとはそうね、ファミレスか居酒屋に行ってみたいわ！」

「もしかしてファミレス行ったことない？」

「そうよ？」

「マジかア……」

マジかア……と思わず天井を見た。居酒屋はまあ行く機会無いだろうなというのは分かる。しかしファミレスも行ったことないと来た。これは割とビビるが、よくよく考えたら沙条家は裕福だし愛歌の料理スキルも考えると全て家で済ませていたか外食しても良いところに行っていたに違いない。となればファミレスに行くのが安牌だろう。居酒屋は夜からだし、夜に愛歌を連れて居酒屋に入るのも何となく気が引ける。

「せっかくのデートなんだし、そろそろ降りて歩きましょう？ お店なんてどこでもいいもの」

「お前がそれでいいならそうするか……」

上手くエスコートしてやれないことに若干の罪悪感というか引け目のようなものを感じるが、それを振り払って差し出された手を取る。それからどこに行くわけでもないのに電車を降りてホームに立ち、無言のままどちらともなく階段に向かう。年頃の女の子なら秋葉よりも新宿とかで降りれば良かったものを、どうしてここで降りてしまったのか。気にしても仕方が無いので、とりあえず電気街側に出ることにした。

こっちに行こうと軽く手を引けば少し驚いたような顔をしたが、特に抵抗することも無く歩き出した。

「どこに連れて行ってくれるの？」

「ごーごーかれー」

「ごーごーかれー?」

「カレーのチェーン店だよ。意外と美味いんだこれが」

お手軽な値段、そこそこ食べれる味わい。愛歌の服装で行くのは少し躊躇われるが、四六時中この格好だし汚れくらいなら魔術でイチコロなのでその辺を気にするのはやめた。駅を出て少し歩き、交差点を越えれば直ぐに辿り着く。

いらっしやいませを聞きながら店に入り、手頃な席に座ってメニューを見せる。カツカレーが最高なので俺はカツカレーの一択だが、素人の愛歌がどれを選ぶのかだなあ、などと呑気に考えている矢先、何となく見覚えのある顔が店内に見えた気がした。見なかったことにして届いたカレーに向き合う。

「見た目は普通ね」

「見た目からやばい店はほとんどないだろ」

「でもやっぱりほら、こう、あるじゃない?」

「相当変な個人店にいかないとないだろ」

チェーン店とか大通りにある店でそんなことがあるはずが無い。料理は味が大切だが、それと同じくらいかそれ以上には見た目も大切だ。美味そうに見えて味は並以上というのが一番売れる。売れなければ廃業に追い込まれる以上、見た目と味の良さを競うのが飲食店というもの。前に来た時と変わらない味付けのカレーを食べられるこの現状こそ理想なのである。

「……普通だわ。ちよつと感動したかも」

「お前の中でこの店の評価どうなってたんだ?」

やはりナチュラルボーンプリンセスなのか。金持ち、才覚天元突破、超絶美少女とくれば仕方ないことなのか。いや、この数日の付き合いで愛歌は割と抜けたところが愛嬌なのは理解しているし、この生粋のお姫様感がまた堪らんところも否定はできない。そうなるこの無垢さを維持するのもまた俺の役目だったのではなからうか。ここに連れてきたのもしや人生最大の過ち……?」

「真人は普段こういってお店でご飯を食べてたのかしら?」

「んー、まあ作るのめんどくさい時はそんな感じだな。でも割合としてはやっぱ牛丼が多かったかなあ」

そこそこ安い、かなり美味しい、まあまあ早い。この三拍子揃った完璧なる牛丼はチェーン店が複数種類存在するのでとてもよろしい。食べ過ぎると飽きてしまうので、こーやって不定期でカレーとか違うものを食べるのも大切だ。見覚えのある顔がこちらをガン見してる気がするのを無視してルーと米を口に放り込む。褐色の肌には黒い髪と馬鹿みたいに整った顔。年齢不詳のスーツの男がこちらをガン見したまま近寄ってきた。

「上司と目が合って挨拶しないと驚きだよ。ボクはそんな君の将来が不安でならないなア？」

「……………きよ、教授？」

いや研究室に所属だから上司も部下もなくね？　なんて言ったら人生最後の日になりそうなので言葉を吟味する。不幸中の幸いと言うべきか、愛歌に目をつけて幼女誘拐犯！　とか叫ばれなかったので良心の欠片ぐらいは残っているはずだ。聖杯戦争について知っているようだし、確かになんらかの会話はしておくのがいいのかもしれない。

でもこの人、愉快犯だしなあ…………。

「まあ、挨拶は許してあげよう。可愛らしいお嬢さんもいるようだし、むさ苦しい男など見なかったことにしたかったという心境は理解できてるものだ」

「…………じゃあそういうことで」

「しかし！　あの坂上くんが連れている女の子だ！　しかもロリ!!　興味が湧くね!？」

「お願いだから帰ってください」

他のお客さんは触らぬ神に祟りなしというように無関心を貫いているが、こちらの精神はゴリゴリ削られている。張本人はニヤニヤと煽るように見てくるのが始末に負えない。彼こそが我らが研究室の教授。名前は気がついたら忘れてるので通称を幽霊教授。心理学の研究者らしいが、民俗学や各文学にも精通した多芸な男。見た目だ

け二十代。中身すけば親父。まあ割と散々な言われようだが、優秀なのは確かなのだ。聖杯戦争について知っているらしいし、もしかしたらこの特異点とやらに關しても何か知恵があるのかもしれない。

とはいえ、頼りたいかと言われるとそれはまた別だった。

一口が小さいからか未だに食べ終えない愛歌がカレーを懸命に口に運んでいるのを眺めている様子は、門司や妙蓮寺がやらかすのを見守っていた時の姿によく似ている。締めるところは締めるし基本的には規範を守る正しい人間だが、精神の根っこが愉快犯過ぎて頭がおかしいのがこの男だ。出来れば今からでも見なかったことにしたい。

それに、どこか違和感がある。

「まあまあ、落ち着いてボクの話聞きたまえよ坂上くん。我が親愛なる愛弟子よ」

誰が弟子だボケ、などと悪態を吐きたいところではあるがそれをしてたら拳が飛んでくるので口を噤む。

「今回の聖杯戦争について色々と話しておきたい事があったんだよ。ほら、あの未来から来たらしい藤丸立香くんだけ？ 彼のこととか君のこととか、君に話しておくのが実はお仕事だったんだよねボク」

「……は？」

「要は聖杯戦争の監督役だったんだ。そういう役割をボクは与えられている」

聖杯戦争の監督役。通常、奇蹟ということから聖堂教会より派遣される神父が務めるはずのそれに、その信仰とは無縁の男が就いている。その事実には思考が止まりそうになるが、お構い無しに次から次へと教授が言葉を投げてくる。

「色々理由はあつて接触が難しいからこの特異点というのは有難い状態だね、今日まで会えなかったのは君のために手を回していたからなんだ。ああ、大学に来なくていいと数日前に伝えさせたのもその一環でね？ どうせ特異点が壊れたら消え失せるものに時間を割くのは無駄というわけさ」

どうしようもない違和感があつた。食べ終えた愛歌が何も言わな

いいこと。あくまでも淡々とした様子を崩さない教授のこと。振り向きもしない他人、静まり返った店内。決められたように進む外の景色。自分が知らないはずのことを聞かされても、最初から知っているかのような感覚。まるで、脳に直接情報をぶち込まれているような異物感。或いは、初めから知っていたような錯覚か。

「ゆっくり逢い引きして明日まで、なんて出来ると思ったかい？――残念ながら不可能だ。時計の針が止まらないのと同じく、聖杯戦争は進行する。ボクが話をしている内にアサシンは脱落し、残るは四騎。内二体は未来より来た来訪者^{イレギュラー}。そう考えると、路線からの脱却は初めからなされていたのかもしれないね」

「……教授？」

顔は教授だ。声も教授だ。妙蓮寺鴉郎や臥藤門司と共に彼の元で学んだ頃と何も変わらない。何も変わらないのに、致命的な何かがズレている。知らない何かがそこにいる。知らない誰かが教授という皮を被っている。

「もしかして記憶に混濁があるのかな？　だとしたらそれはボクの問題ではなく君の問題だ。思ったより状態は良くないらしいが、聖杯を手にする迄に解決すればいいし、解決しなくてもまあ別に支障はないだろう。大切なのはこれから起こる争いで君と沙条愛歌が迎える結末だけだ」

「何を言ってる……」

「ボクはただの監督役だ。この捻れて狂って壊れた世界で救世主の器を見守る者。君のよく知る教授その人であり、君の末路を哀れんだ男の残滓に過ぎない」

気がついた時には、店内にいた人が消えていた。窓から見える人も、街に溢れていた筈の気配も全て。

「さて、時間だ。定められた役割から逸脱したボクが最後に、ボクとして君に言葉を贈ろう」

あまりにも一方的だった。会話をするというより、発言をしに来ただけという方が余程しつくりくる。頭の中はぐちゃぐちゃだし、愛歌との穏やかな日常なんてものが幻想だったのだと自分の中の何かが

納得していた。それが、腹立たしくて仕方がない。

「聖杯を手に入れる。それ以外に道はない」

「何を、今更……」

とても今更なことを言っ、満足気に笑っている師の気が知れない。とはいえ、足元から光の粒子になっていく彼の姿に何かを言うことも出来ず、呻くように漏れた言葉だけが空気に溶けて消えていく。隣に歩み寄ってきた愛歌の瞳は悲しげで、晴れ晴れとした目をした彼と妙に対照的だった。

「――二度と会わないことを祈るよ、バカ弟子」

だから、救世主にだけはなるんじゃないと残して、彼は消えた。

窓の外は赤く染まっ、終わりが訪れたのだと否が応でも理解させられた。

燃える。燃えた。世界が、燃えた。
終わりは必ず訪れる。

始まりは必ず訪れる。

それは未来を否定する過去、未来へと至らぬ過去。

獣の揺籃、聖なる杯。閉じたる世界。

獣に微睡みを。救世主に安寧を。

有り得てはならない世界に終幕を。

※

——世界が赤く染まっていた。燃え盛る街並み、夕暮れよりも尚赤い空。まるで真っ白なキャンパスに赤い絵の具を零してしまったような、乱雑な赤さだった。とにかく燃えろ、終わり刻限だと急かさされているようだった。その奇妙な光景を前にして焦る気持ちは不思議と湧かず、手を繋いだ愛歌を見れば微笑んでくれる。教授の言っていたことは全くもって意味がわからないが、この手を離さなければきつと大丈夫だと自分に言い聞かせる。

救世主にだけはなるなというのなら、沙条愛歌の手を離さなければいい。救世主に成り果てたくないのなら、沙条愛歌を愛して慈しめればいい。定められた末路から逃れたいのなら、沙条愛歌を殺してはならない。つまり、今現在の状況においては愛歌の存在だけが自分を繋ぎ

止めてくれる楔となっている。

自分と同じ境遇でありながら、悪であれと定められてしまった少女を救うはずだったのに。さて、蓋を開けてみれば救われているのはどちらなのか分からなくなってきた。

けれど、ああ、けれど。そんなことはきつとどうでもいいのだ。大切なものは、この胸にある。それだけで、終わりに向けて踏み出すのには十分だった。

「ねえ、真人」

「どうした」

「あの黒いモヤモヤの人と話して東京が炎上してるのはいいのだけけれど、アーチャーとそのマスターはどうしてるのかしら？」

同盟組むかどうか悩んでなかったかしら？ と疑問を口にする愛歌に、なるほど確かにと頷いた。アーチャーはマスターを第一に考えているだろうし、無理矢理説得して戦おうとする人種でもない。そうになるとマスター次第なのだが、不思議と不安はなかった。なるようになるというより、未来がどうのこうので悩んで諦めてしまうような人間が聖杯戦争に参加するはずが無いからだ。人間なんて皆、突き詰めてしまえばエゴの塊であり、それが極端に強い人間だからこそ聖杯に選ばれる。

強い願いと人々の祈りこそが聖杯を顕現させる最たるものである以上、選ばれるマスターもまたそれに相応しい者であるべきだろう。どこかおかしくなければ、こんな頭のイカれた争いになぞ参加出来るはずもないのだから。

「まあ、来るだろ。だから聖杯を探しつつ合流を目指したいところだな」

一周回って信用できる。あの女は平凡に見えたが、その内側にある芯は強固なものだと思える。何があろうと心に燃える意思は消えな
いだろう。

だから諦めるはずがない。諦めきれないはずがない。その証拠に、遠くで英霊同士の激突の余波であろう衝撃が発生し始めた。視認は出来ないが、忌々しい黄金の輝きを感じる。とはいえ、介入するかどう

かは微妙なところだ。勝手にぶつかるとしたら放置して弱ったところを
宝具で纏めて殺せばいい。結局のところ、この聖杯戦争は藤丸立香を
排除することを前提としなければ破綻する代物でしかないのだ。な
らば、アーチャーたちの事の成否はどうあれ、疲弊したところを狙う
のが戦の常道だろう。

「カルナ」

「どうした」

「お前、さっきの教授をどう思う？」

だから一旦戦闘のことを放置して、意味がわからんことを話すだけ
話して消えた、あの訳の分からん男のことをカルナへと問う。霊体化
していたとはいえ、カルナならば何らかの絡繰りを見抜くなり何なり
してくれていそうだという予想からの問いだったのだが、それは悪い
意味で裏切られることになる。

「オレにはその教授なる男のことが分からん。マスターがそう言うの
であればそこに居たのだろうが、この眼には映らずこの耳に声は届か
なかった。オレでなければ幻でも見たのかと疑うやもしれん」

「それでも存在は確定なんだな」

「無論だ。正体は不明なれど、紛れもないマスターの縁者に違いない。
それこそ、本来であればより深く関わっていたはずだ。おそらくだ
が、捻れたこの状況で接触が不可能になったが、そこを押し強引に
介入したのだろう。その結果、マスターと愛歌にしか認識できなかつ
たのではないか」

カルナの説明はある程度納得のいくものだった。前提条件の意味
不明さを除けば分かる話ではあるし、そもそも特異点とか未来に至ら
ない過去とかになっている時点で常識もクソもないだろう。未来人
が平然と存在しているのもそうだ。カルデアなる天文台の魔術師。
有り得ないはずのサーヴァント。そこに正体のよく分からん教授が
一人増えたところで、もはや大差はない。

じゃあこの話は終わり、と打ち切ったところで今後の方針を改めて
考える。

まず、敵対して殺さなければならぬ藤丸立香。サーヴァントはセ

イバー、アーサー王。それからキャスターのマーリン。地力は完全に勝っているし、対面ならばカルナの勝利は揺るがない。しかし聖剣の完全解放は不可能であるとはいえ、宝具は宝具で英雄は英雄。中途半端な解放でも下手を打てば敗北に直結する為警戒が必要。さらに、マーリンは多様な手札と夢魔であるが故の強力な幻術が厄介だろう。

次点、アーチャー。真名をアーラシュ・カマンガ。こちらはマスターを殺すこと自体に若干の抵抗がある上に、ある意味ではマーリンよりも厄介な相手とも考えられる。なにせ、あのアーラシュだ。今も遠見で覗けば秒間三桁は下らない矢の嵐が東京を砕いている。カルナと正面衝突するのを避けて遠距離に徹されれば苦戦は間違いなく、何とか接近してもエルザを獲りにいけばあの矢を受けることになるだろう。

その辺の宝具よりも強力なのが普通の攻撃という辺り、理不尽さを感じないでもない。

「どうしたもんか……」

残ったのは誰も彼も瞬殺不可能。苦戦は間違いなく、加えていえば確実に勝てる相手でもない。特にアーチャーは恐ろしい宝具を保有しているのを知っている。撃たれれば如何にカルナといえども厳しいと言わざるを得ないだろう。大地を裂く矢、2500kmを穿つ窮極。俺では相殺など出来るわけなく、カルナの宝具でも食い破れる保証はない。加えて、先んじて使用されればこちらの宝具は間に合わない。

「ねえねえ、いいことを思いついたの！」

「ほほう？」

悩んでいれば、瞳をキラキラと輝かせた愛歌が自信満々に手を挙げた。カルナも興味深そうに視線を向け、注目が集まったところで肝心の内容を聞かせてもらう。

「聖杯の前で待ち伏せしちやえばいいのよ！」

聖杯の前で待ち伏せする。それは聖杯の在り処を知らねば出来ないことであり、それを知っているということは聖杯戦争において絶対

的なアドバンテージとなる。何せ、戦争の最後に行き着くのが聖杯である。待ち伏せされれば、あとから向かう側はどう足掻いても迎え撃たれることになる。

それは絶対的な有利だ。策を弄し、罠を仕掛け、十全の準備を整えて待つということは戦闘において覆せない有利となる。英雄であるとか英雄でないとか、そんなことはもはや関係ない。あらゆる不確定要素を削ぎ落とし、拠点における迎撃戦という体を整えてしまえば勝利は確定するだろう。聖杯の在り処を知るということは、これに限りなく近づくということだ。

だから――

「聖杯は長い洞窟の先にあるわ。だから待ち伏せして、カルナの宝具で皆殺しにすればいいの！」

その通りに考えたのだろう。彼女の導き出した解答は、間違いなく最適解だった。何故その在り処を知っているのかとか、何時から知っていたのかとか、そういう疑問を全て無視してしまえるほどに魅力的な解答だった。あまりにも甘美で、あまりにも完璧だ。対象となるセイバーとアーチャーは今も潰し合っている。残った方を待つて愛歌の告げた案を採用してしまえばいい。まるで初めから用意されていたようにこの状況は整っている。

猛烈に襲い来る嫌な予感。もはや既視感に近いそれに晒されながら、愛らしく笑う華を見る。曇りのない笑顔、穢れのない姿、愛らしい容貌。その全てが清廉潔白な幼い姫君のそれであるというのに、どうしてか。脳裏にチラつくのは惨憺たる未来の光景。夢に見た、訪れてはならない末路だった。泥のように脳裏にこびり付いたそれを振り払うことも出来ず、綺麗に笑う愛歌に言葉を返すことが出来ない。

――嫌な、予感がする。

炎上し、崩壊する東京に鏝の雨が降る。数えることなど不可能なほどの鏝は雨と呼ぶに相応しく、その一つ一つが頑強なビルを砕くほどの威力を秘めている。故に、それをただの攻撃手段とするアーチャーはもはや災害に等しい存在だ。ただの一矢がビルを砕き、山を抉り、大地を平す。

「中々やるなー」

だが、それだけの暴威を前にしても最優のサーヴァントは倒れない。彼は雨を払いながら大地を駆け、聖剣より放たれる輝きは暗闇を割いてアーチャーへと迫るほどだ。それだけで決着が付くことは無いが、サーヴァントとしての実力が飛び抜けた二騎の戦闘はとにかく派手であり、その全ての動作が崩壊していく東京の滅びを加速させている。

だが、開いた距離が詰められることはなく、ただじわじわと消耗を続けるだけの戦いだ。コップの水を流し続けるのと同じように、どちらのマスターも遠からず魔力が足りなくなるだろう。そうすればアーチャーのマスターが願いを叶えることは叶わず、セイバーのマスターもまた、聖杯の回収という目的を達成できない。それは互いに望まない結末だろう。

そして、魔力という面で有利なのはセイバーだ。燃費という面では決していいとは言えないが、彼のマスターはキャスターと契約しており、その結果としてマスター本人とは別の魔力供給が存在する。その差は非常に大きく、所詮一人の魔術師でしかないアーチャーのマスターでは埋め難いものだ。故に、先に打って出るのはアーチャーである。膠着した現状を打破するべく行動を起こさなくてはならないのはアーチャーであり、セイバーはその時まで耐え凌げばそれでいい。

とはいえ、それも容易い行為ではない。

鏃の雨によつて発生する瓦礫の群れを足場に跳び、四方八方から迫る致死のそれを打ち払う。足を止めれば迫る確実な死を前に臆することは許されず、僅かな誤差は弓兵の卓越した技量により死を招く切っ掛けとなるだろう。時に瓦礫を足場に空を跳び、時に鏃の雨を掻い潜りながら大地を駆ける。黄金の残光が夜闇を照らし、時折斬撃として放たれるそれも鏃によつて散らされる。

これは正しく超一級の英霊同士の争い。ただ戦うだけで地形を変え、多くの命を奪う頂上の争いだった。一つの物語において最高の位にある二体は互いが全力を出し尽くしていないまでも本気であることは理解していた。同時に全力を出せば最後、相打つ結末になるであろう事もまた。

「アーチャー、貴方は何故……!」

それ故に、セイバーにはアーチャーが理解できない。聖杯を求めるマスターに応え、本気で戦いながら全力ではない彼の姿に。千里を見通す瞳を持たない騎士王には、文字通りに千里を見通す弓兵の心中を見通すことはできない。もはや壊れ始めた揺籃の行く末も知らず、ただ時間を浪費する他にない。聖剣の解放も不可能ではないが、身を潜めるランサーを考えれば安易に使うことは出来ない。

衰えることの無い鏃の雨、鉄の暴風。永遠にも感じられる攻防を繰り返すこと千と少し。セイバーは確かに、東京の何処かでどす黒い何かの鼓動が鳴つたのを聴いた。物理的に音を拾った訳ではなく、確かな感覚として彼の第六感はそれを感じた。その根源は一度は打ち倒した獣の残り香か、或いは別の邪悪か。正体が定かではなくとも、セイバーはそれを許されざる邪悪であると即座に断じた。

そして、それこそがこの歪な特異点の元凶であることを、彼は直感で感じ取っている。有り得ざる気配に動揺を隠しきれないセイバーはふと、不気味な程に彼を足止めしようとするアーチャーの悲しみを湛えた目を見た。憐れむようで、悔いているようで、しかし確かな悲しみを宿した瞳はアーチャーの後ろに広がるビル群の彼方を見据えていた。

「貴方にも感じられたはずだ、アーチャー! 我々が為すべきことは

ここで争うことではなく、今生まれた邪悪を正すことだど！」

恐らく、ランサーのマスターは失敗した。沙条愛歌という悪をそのままに目覚めさせてしまったのだろう。かつて騎士王アーサーが聖杯戦争にて葬ったあの少女は、この世界でも悪と成り果てたのだと彼は思った。それを悲しいと思わない気持ちがないと言えば嘘になる。だが、そうなってしまったのならはお終いだ。目の前のアーチャーとして、その悪を見逃す道理はない。

「……悪いな、セイバー」

だが、返答はセイバーの期待したものでは無かった。言葉と共に放たれた鏃は一本。しかしこれまでのどれよりも重い一矢は、それを受け止めたセイバーの身体を大きく吹き飛ばした。何棟もの建物を突き抜け、ようやく止まった時にはサーヴァントであつても差し障りがないのが不思議なほどの距離を移動させられていた。姿は小さく、声だけが魔術によって伝わるだけの距離。

「たとえばそれが悪であろうとも、今回のオレはあの坊主のファンなんぞでな」

それは、これから行うことが自らのマスターのための行為ではないと告げているようなものであり、紛れもない真実だ。アーチャーはこれから、自らのマスターの為ではなく、己の我欲の為にセイバーを射つ。

「なあ、セイバー。お前さん、聖杯の在り処を知ってるかい？」

「……」

「知ってるって顔をしてるぜ」

それがどうしたとセイバーが答える前に、アーチャーは矢を番える事もせず口を開く。困ったように薄く笑いを浮かべ、戦意を欠片も纏わない姿にどうしようもない違和感を感じる。

「聖杯は東京の地下にある。だが、それは特定の地点の地下ってわけじゃあない」

「……まさか」

「聖杯は東京というテクスチャの下にある。だから、穴を掘るのはどこでもいいってわけだ」

直感で聖剣を解放する。十三の拘束を解放するまでいかずとも、せめてマスターを巻き込む事になることは避けなくてはならないと聖なる輝きを宿す。煌めく刃は真なる輝きを宿す段階になくとも超一級の神秘であり、確かにセイバーが望むだけの効果は得られるだろう。

だが、それだけだ。アーチャーは自らの意思を持って弓を引き、そのマスターは沙条愛歌に諭されたままに令呪を行使している。

莫大な魔力が収束する。並大抵ではないそれは、神王オジマンディアスの大電球すらも食い破りかねない極光となるだろう。偉大なる弓兵、アーラシュ・カマンガーの集大成。大陸を割いた一矢、命と引き換えに行使される奇跡の宝具。令呪により、矢を番える以外のあらゆる工程を無視して放たれるそれを回避するすべは無い。

「――墜ちろ、セイバー!!」

そうして、極光は放たれた。遠く離れたビルの屋上から、燃え盛る街並みの残骸へ。とても小さな極光だ。元々は鏃の一つ、ただの一矢。それが莫大な魔力の尾を引いてセイバーへと迫り、不可避の速度を持って聖剣と衝突する。セイバーは決して碎けることがないはずの聖剣が軋むのを感じながら、余波で周囲が崩壊していくのを感じる。

アーチャーはセイバーを仕留めるといふよりも、聖杯のある地下に落とすことを目的としているような口ぶりだった。そうであっても気を抜けば一瞬で死に至るほどの一撃であり、セイバーは全力を以てそれに相対している。即死していけないのは矢の目的が掘削であり、セイバーの殺害ではないからというだけだ。目的が殺害であれば、セイバーはマスターのいる方向に被害を散らさないことを意識する暇もなく死んでいただろう。

「たぶん今回がラストチャンスだ。あとは上手くやれよ、真人」

彼以外の誰もが彼の動機を知ること無いままに、アーラシュ・カマンガーは消滅した。マスターとしての資格を喪失したエルザ・西条がこの東京から姿を消したことを知る者も誰もいない。炎上し、破壊という末路を迎えた閉じた世界に残るのは、僅かな人と英霊だけだ。

——アーチャーが消滅したことを感じながら、深い穴を落ちていく。暗がりの底の底。そこは地下というには深く、星の内海というには浅すぎる。かつての記憶に存在しない奈落を墜落していく。黄金の尾を引く姿は夜空に奔る星のようだった。マスターの姿はなく、魔力の供給は絶たれている。

隔離された空間に突入した感触から、絶命によるものではなく空間的な断絶であることを把握する。もしかすれば絶命によるものかもしれないが、藤丸立香にはあの花の魔術師がついている。己のマスターならば大丈夫だろうと彼は不安を振り払い、長い墜落の終わりを見据える。

灼熱にも似た気配。神々しい煌めきを捉え、聖剣を握る腕に力が籠もる。限界などとうに超えているが、悲鳴をあげる霊基を無視して着地に備える。相手の魔力の満ち具合から、自身の着地と同時に一撃が放たれることを逆算した。勝負の際であるそこで聖剣の拘束を半数以上解除することは可能だろうが、果たして間に合うかどうか。

「シール・サーティーン デンジョン・スタート」
「十三拘束解放、決議開始」

是は邪悪との戦いである。是は己よりも強大なものとの戦いである。是は一对一の戦いである。是は精霊との戦いではない。是は生きるための戦いである。是は真実のための戦いである。

「——是は、世界を救う戦いである」

十三拘束の内の七つ。半数以上の拘束を解かれたことによって、およそあらゆる悪を退ける黄金の刃は解き放たれる。これが正しく機能した事実から、眼下にて待ち受けるランサーもまた、坂上真人と共に悪道へと堕ちたのだろうか。沙条愛歌という獣の女、救世主となることを否定した坂上真人。うち払われるべき特異点の中核を成す彼らを、セイバーは知っているようで知らない。

何故こうなったのか。何故特異点となったのか。何故選ばれたのか。何故セイバーは彼らが悪であることを知っているのか。何故世

界は廻るのか。何も知らず、何も分からず、何も得られない。全てはそのように定められ、そのように進んでいるだけだということに気づけない。世界を救う黄金も、今や歯車の一つに過ぎないのだから。

「言葉は不要、ただその輝きを以て打ち倒して見せるがいい」

長い墜落を終えたセイバーに投げられたのは簡素な台詞。不敵な笑みを浮かべたランサーの真名をカルナ。マハーバーラタに語られる大英雄の一人にして、世界に悪とされた者。その宝具は周囲の環境すらも塗り替えながら、解放の瞬間を待っている。着地と同時にあまりの熱波で溶解を始めた大地を踏み、聖なる光を振り翳す。

「――日輪よ、死に随え！」
ヴァアサ ヴィ・シヤクテイ

「約束された勝利の剣!!」
エック スカ リバー

かくして、全てを灼き払う一撃は、黄金の輝きにうち払われる。星の内海より生じた輝きは、神の威光を一蹴した。なんといふことは無いと、呆気なく。それを成したセイバーですら半ば呆然とするほどに。黄金に呑まれたランサーの姿はなく、切り開かれた景色の先には青い光の柱が見える。

本来であれば岩石に阻まれた先の先。聖剣の輝きすら阻む青の煌めきを目にしたセイバーは、徐々に解け始める身体を無理矢理押し止めて前に進む。純粋な魔力不足だけではない。何か、異常な力があることを彼は感知していた。

たとえ何も出来ないほどに弱っていても、それでもこの聖剣を振るうべき時に振るわなくてはならない。ただその一心を以て、彼は靈基を酷使して歩を進めている。一步進むごとに波動を感じる。一步進むごとに鼓動を感じる。胎動する邪悪、目覚めてしまった獣の吐息。未完の救世主では何を成すことも出来ず、ただ死ぬ他にはない強大な靈基。姿を捉える前から感じられる絶望的なまでの力。沙条愛歌は、坂上真人はどうしているのかと思った刹那、背中に何か当たる音がした。

「……っ、あ」

「流石に英霊か、しづといな」

「坂上、真人……！」

胸を貫いているのは腕だ。背中から胸を貫き、霊体を維持できないように破壊されている。音も、気配もなかった。疲弊しているとはいえ英霊に感知されることのない動きは人のものではない。腕を引き抜かれ、セイバーは地面に蹴り倒された。苦悶に喘ぎながらも消滅の間際で耐え、血に濡れた腕に青い炎を纏う男を見上げる。

「どういう、ことだ」

「どうもこうもクソもねえ。最初から最後まで俺がしくじってただけの話だ」

坂上真人の左腕だけで抱き上げられた少女の胸元は血に濡れている。血に濡れ、口の端から血を流し、安らかな表情で眠るように死んでいる。想定していなかった事態にセイバーの思考は硬直し、真人は忌々しそうな表情を崩さない。ただ、それ以上を語ることはしない。

凄まじい霊基を宿した男は、あらゆる全てを憎むように殺意を振り撒いている。倒れた自分のみに殺意を向けている訳では無いと、セイバーは感じ取った。ともすれば、己自身すらもその対象に含めているのでは無いかとすら思う。

「お前は何も知る必要はない。このまま死ね、騎士王」

燃えるような憎悪を宿した瞳が倒れ伏した騎士王を捉える。頭を目掛けて振り上げられた足を、彼はただ見ることしか出来なかった。

聖杯の目の前に辿り着いた瞬間、伸びてきた触腕が少女の胸を貫いた。

「……愛歌？」

胸に赤い花を咲かせた少女の前に、それ以上の言葉は出なかった。分かったのは湧き上がってくる膨大な魔力と怒りで視界が真っ白になったこと。全身を駆け巡る熱のままに崩れ落ちる少女の身体を抱き留め、そのまま権能を以て獣を封じた。人類史を覆すほどの怪物を片手間で封じたことを偉業であると思いが過ぎる中、腕の中で言葉もなく微笑みながら手を伸ばす少女を見る。

「なん、で……」

薄く笑う彼女の心境を理解することは出来ない。その機会は永遠に失われた。名前を呼ぶことしか出来ないままに、腕の中の彼女は瞼を閉じた。それ以上の動作はない。それ以上の鼓動はない。残されたのは温もりと重みだけ。ただの物言わぬ屍に過ぎない。

——最悪な話だ。

腕の中に収まったまま、微動だにしない少女の亡骸を抱えて絶望する。坂上真人、愚かな道化。救世主になってしまったもの。選ばれて、資格があつて、抗おうとして、ただそれだけだった。

忌々しい獣によつて、全能を封じたままの少女は殺された。当然の話だった。当たり前前の話だった。救世主が討つべき獣の前に全能を封じた少女が立ったとしても餌にしかならない。そして、それが鍵になつて権能を振るうことで完成する。定められた未来に辿り着く。これは誰かが描いた道であり、過去に過ぎ去った行いの反復に過ぎない。

い。

だから、なんの疑いもなく、なんの誤りもなく、沙条愛歌は死んだのだ。愛おしいと思つた輝きは、他の誰でもない己によって散らされた。彼女は聖杯を前にしてはならなかつたのだ。聖杯の前に連れてきてはいけなかつた。だが、その中に眠るものを知らぬままに連れてきた。

己の罪深さを呪う。己の愚かさを呪う。己の命を呪う。獣の宿命を呪う。世界の在り方を呪う。

一つの命を糧に世界を救うことを、坂上真人は認められない。それが自らの選択の結末としてそうなつたならば兎も角、邪悪であることを宿命とされていることなど認められない。自分が救世主として成立するために彼女が必要ならば、どうしてその逆ではいけなかつたのだろうか。

自分が獣となればよかつたのに。あんな、片手間で封じれてしまうような存在ならば、さほど労することもなく成れただろうに。沙条愛歌に討たれるべき悪として、世界がそう定めてしまえばよかつたのに。

現実はそのうならなかつた。沙条愛歌は討たれる宿命を背負わされ、坂上真人は救世主の業を背負わされた。

その結末がこれだ。

捻れに捻れた因果の果て。権能による隔離世界。全能者の揺籃、救世主の繭。獣を討つための時間軸は特異点と化し、人理は揺らいだ。過去と未来は捻れ、未来の天文台から観測されるほどに歪な揺籃は、ここに臨界を迎えようとしている。

「……これで最後だ」

揺籃の時は終わった。幾度となく繰り返したのであろう世界は、もはや耐えきれないほどに疲弊している。本来であれば相討ちが関の山だった獣を、こうしている今も片手間で押さえ付けられているのが証明である。

そうして、予定通りに辿り着いたセイバーは排除した。オーラシユ

によって削られ、カルナによって魔力を吐き出さされた男の頭蓋を踏み砕き、その霊基を霧散させた。今や彼の意識はカルデアに還った頃だろう。どれほど記憶を保持しているかは定かではないが、確かな縁は結ばれたはずである。

故に、残る縁は一つだけ。

「見ているか、藤丸立香」

既に強制送還した花の魔術師のことは気にしない。虚空に向けて投げる言葉に返答はない。確証はないが確信はある。元々ここは、彼からすれば泡沫の夢のような世界だ。肉体ではなく精神のみでの介入でよくここまでとは思うものの、お節介な花の魔術師がいたことを考えると案外普通なのかもしれない。

「ここに、真つ当な聖杯は存在しない。この世界は俺の権能と愛歌の全能によって作られていたものだ」

蓋を開けてみれば、それだけの話だ。ただ、繰り返していただけ。俺も愛歌も毎回記憶を忘れ、定められた道筋を順調に辿って破綻していただけである。絶望と権能を中核に、繰り返される揺籃の中で逢瀬を繰り返す。どちらが始まりの引き金を引いたのかは分からない。一番大切な、始まりの瞬間を忘却している。

それでも、成すべきことは決まっていた。

「だが、それも終わる。権能のほぼ全てを引き出せるようになった今、俺はこの揺籃から羽化してしまえばいい。救世主に至るものではなく、至った者として羽ばたこう」

坂上真人は器だ。救世主として完成するための器。終末を越え、新たな世界へ至るための十番目。そして、沙条愛歌を必ず未来に送り届ける者である。

「羽化を見届け、カルデアへと戻るがいい。未来より訪れたマスター、人類最後の希望よ。お前がどれほどの記憶を保てるかは知らないが、いつか会うその時がお前の終わりだ」

獣を飲み込んだ青い光の柱は、気がつけば小さな箱となって手元に収まっていた。超高密度の魔力であり、相反する属性の混沌である。ただ解き放つだけで、この小さな特異点など跡形もなく消えてしまう

全能の化身、根源の姫を救う者として肉体は内側から変成する。救世主の器に飲み干した獣すら流し込む。かつてないほどの破壊衝動を押し潰しながら、今も動かない少女に口付ける。冷えきった身体を感じながら、心を燃やして完成する。

「——名乗ろう、我が名はカルキ。ヴィシユヌ神の十番目の化身、あらゆる穢れを払う者」

そのまま、青の光を以て特異点と化した世界の幕を引いた。暗闇に包まれていた世界が壊れる。岩盤に覆われていたはずの世界は真っ青な空に塗り代わり、存在しない足場に立ったままに呆然とこちらを見る男を見据える。

平凡な男だ。特別強い魔術を使えるわけでも、特別な出生がある訳でもない。触れれば壊れる、ちっぽけな人間に過ぎない。だからこそ、残念でならない。

「カルデアのマスター、彼方の希望よ。ここでお前を殺せないことだけが残念だ」

本当に、心の底から残念でならない。最も警戒すべき者、刈り取るべき希望の光。異なる未来において世界を救うに足る存在。排除すべき障害であり、殺害すべき対象である。だが、殺せない。ここで殺しては意味が無い。必要なことであるとはいえ、それが酷く辛い。

「お前の言葉は届かない、お前の言葉に興味はない、お前の言葉に興味はない。」

俺はここにカルキとして完成し、坂上真人として彼女の未来を保証する」

その行為がどれほどの悪であろうとも。その果てに、自分がどのような末路を迎えることになるのだとしても。この先が、どれほどの絶望に満ちていたとしても。何が待ち受けていようと関係ない。

何度でも繰り返そう。何度でも挑み続けよう。何度でも恋をしよう。何度でも彼女を愛そう。何度でも成し遂げて見せよう。何度でも世界を覆そう。

宙ぶらりんになった世界に錨を刺す。何度も繰り返したように世

界を型どり、藤丸立香の意識が戻るのを通じて手を伸ばす。手を伸ばし、掴み、固定してしまえばあとは簡単だ。人理に割り込み、丁度起きている異常な現象を真似て構築してしまえばいい。濾過異聞史現象。二つのそれを認識し、世界に刻まれていた過去を掘り返して七分の情報搔き集める。

時間の概念すら存在しない世界で、亡骸を抱えたまま世界を始めるための作業を行う。時間を定義し空間を固定し生命を設定する。過去より現在に至るまでの過程を組み上げて設定し、演算する。

「……きつとこれが最後だ、愛歌」

再構築されていく世界の中で、どう足掻いても最後だと感じた。きつと何をどうしてもやり直せない。何の気なしに行った作業は思いの外に消耗を齎している。身の内にある全能感が薄れていく。苦痛と共に飲み干した権能は、世界を構築するための柱となる。獣はそのまま燃料に、輪廻の権能を以て異聞ですらない世界を始めよう。

君を未来に届けるために。